

関西外国語大学大学院外国語学研究科

博士学位申請論文 2021年

手話の認知言語学的研究

— 一日中手話の比較を中心に —

関西外国語大学大学院

外国語学研究科 言語文化専攻

919301 唐 昭君

目次

第一章 序論.....	1
1.1 研究背景と目的.....	1
1.2 先行研究と問題点.....	1
1.2.1 日中手話の使用現状.....	2
1.2.2 日中手話に関する言語学的研究.....	4
1.2.3 日本手話に関する認知言語学的研究.....	5
1.2.4 中国手話に関する認知言語学的研究.....	10
1.2.5 先行研究における検討課題.....	12
1.3 研究の流れ.....	12
第二章 認知言語学のアプローチ.....	14
2.1 イメージ能力とイメージ操作.....	14
2.1.1 イメージのスキーマ化.....	15
2.1.2 イメージスキーマと比喩写像.....	16
2.1.3 イメージへの複合的視点の投影.....	18
2.2 認知言語学のメタファー理論.....	19
2.2.1 手話におけるメタファー.....	22
2.2.2 メタファーと文化.....	23
2.3 メトニミー理論.....	24
2.3.1 メタファーとメトニミーの融合.....	25
2.3.2 参照点構造とメトニミー.....	26
第三章 日中手話の身体部位に関する意味拡張.....	29
3.1 「頭」に関する意味拡張.....	29
3.1.1 日本語と日本手話の場合.....	32
3.1.2 中国語と中国手話の場合.....	35
3.1.3 比較とまとめ.....	37
3.2 「手」に関する意味拡張.....	40
3.2.1 日本語と日本手話の場合.....	41
3.2.2 中国語と中国手話の場合.....	46
3.2.3 比較とまとめ.....	50

3.3 「足」に関する意味拡張.....	51
3.3.1 日本語と日本手話の場合.....	52
3.3.2 中国語と中国手話の場合.....	54
3.3.3 比較とまとめ.....	58
3.4 「口」に関する意味拡張.....	58
3.4.1 日本語と日本手話の場合.....	60
3.4.2 中国語と中国手話の場合.....	64
3.4.3 比較とまとめ.....	68
3.5 日中手話の身体部位に関する意味拡張の比較.....	68
3.6 手話の身体部位表現の身体性と修辭性.....	70
第四章 日中手話の感情表現.....	72
4.1 手話の感情表現.....	72
4.1.1 日中手話の感情表現.....	72
4.1.2 日中手話の感情表現の分析.....	75
4.2 手話の感情表現からみるメタファー.....	88
4.2.1 容器のメタファー.....	90
4.2.2 身体部位の機能によるメタファー.....	91
4.2.3 空間のメタファー.....	92
4.3 手話の感情表現からみるメトニミー.....	93
4.3.1 直接的な感情表現.....	94
4.3.2 間接的な感情表現.....	95
4.4 手話のメトニミーと参照点構造.....	95
4.4.1 手話の多義性.....	96
第五章 手話の空間運用について.....	101
5.1 手話の空間認知と意味の創造性.....	101
5.1.1 日中手話の空間認知と意味の創造性.....	102
5.2 日中手話の空間認知.....	104
5.2.1 <上・下>の認知と意味拡張.....	105
5.2.2 <前・後>の認知と意味拡張.....	114
5.2.3 <左・右>の認知と意味拡張.....	120

5.3 手話の空間距離と心理距離.....	123
5.4 方向性動詞からみる手話の特徴.....	126
5.5 手話の主観性と創造性.....	128
5.5.1 手話の主観性.....	128
5.5.2 手話の創造性.....	129
第六章 結論.....	130
6.1 まとめ.....	130
6.2 今後の研究と課題.....	133
参考文献.....	134

第一章 序論

1.1 研究背景と目的

2006年に国連総会で採択された障害者権利条約の第二条に、『言語』とは、音声言語及び手話その他の形態の非音声言語等をいう」と定義されている。手話は言語として、各民族の歴史、文化に基づいて発展してきた重要な伝達手段である。手話と音声言語との違いは、手話が、手の位置や動き、顔の表情、口話などの形で意思を表現し、視覚情報としてコミュニケーションを図る点になる。手話は、長期の相互コミュニケーションの中で発展した複雑な視覚空間言語である。そして、音声言語とは異なった独自の文法と語彙体系をもった言語である。音声言語と同等の情報量を同等の速度で伝達することが可能であり、聴覚障害者との円滑なコミュニケーション手段として有効である。しかしながら、地域、文化、生活環境などによって、手話を一つの言語として音声言語と同様に扱う方言もある。例えば、中国の「上海手話」、日本の「大阪手話」などがこれに相当する。現在、方言手話が、「標準手話」より広範に使われている。したがって、聴覚障害者のコミュニケーションでは、読み取り能力、読み書き能力などの影響が認められる。

本研究は、手話の身体性と主観性、メタファー、メトニミー、意味拡張、参照点などの認知言語学的視点から、日中の手話の基本的なメカニズムの解明を試みる。さらに、この考察を通して、聴覚障害者の認知能力に基づく手話の運用の諸相と、この種の認知能力に基づく手話学習の可能性を検討する。また以上の考察に基づいて、聴覚障害者の手話の創造的な表現能力と意味拡張のメカニズムの解明を試みる。

1.2 先行研究と問題点

手話に関しては、音韻論、形態論、統合論、意味論、社会言語学、言語習得、心理言語学の研究がなされているが、近年は特に、手話の認知言語学的な研究が注目されている。その中でも特に手話のメタファー研究が中心になっている。以下では、まず日中手話の基本的な状況を考察するとともに、手話の意味分析の代表的な研究を取り上げ、手話に関する認知言語学の研究現状を把握する。また、先行研究の手話研究の問題点を指摘し、認知言語学の視点から、手話の新たな研究の方向を探っていく。

1.2.1 日中手話の使用現状

日本は中国と地理的に近く、2000年以上の交流の歴史がある隣国である。日本の手話と中国の手話は、ある種の類似性が認められる。

現在、日本で行われている手話は、日本手話（自然手話、伝統的手話）、日本語対応手話（同時法的手話）、中間型手話の三つに分けられる。

①日本手話（Japanese Sign Language）：独特の語義と文法をもった聴覚障害者の手話である。日本語とは異なる文法構造なので、口話¹との併用ができない。手の形や運動の強さ・速さ・大きさ、表情、視線などをトータルに使うことで語調的・意味的情報を視覚的に伝達できる。ろう家庭の場合、通常、第一言語として習得される。また、この手話は全国的に使用されているが、地域や生活環境によって手話の表現形式が異なるため、方言手話が存在する。

②日本語対応手話（Signed Japanese）：日本語を手話で表現するために作られたものである。手指日本語と呼ばれている。日本語文法にそった文法体系をもっており、口話との併用ができる。学習が高度化して伝達する情報量が多くなると対応が困難になるため、聴覚障害者への普及率は低い。

③中間型手話：日本手話と日本語対応手話の両方の要素を取り入れた手話である。日本語の文法に手話の語義をまぜたものである。日本語の助詞、助動詞などは省略され、別の手話で代用されることがある。また、口話や聴能²との併用が可能である。

長南（2001）は、聴覚障害者を被験者として、日本手話、日本語対応手話、中間型手話の構造の違いが聴覚障害者の手話の理解に与える影響を、被験者の手話能力と日本語能力という二つの要因から検討し実験を行っている。その結果、被験者が理解しやすい手話の種類には個人差があり、中間型手話は、どの被験者にとっても理解が難しい表現方法であることが指摘されている。

大杉（2002：39-40）は、現在の日本の手話に関し次のように述べている：「日本では日本手話は全国のろう者に使用されていて、全部同じだろうと思われているが、よくよく見れば、地域やろう学校によって独自の手話がある。ろう学校は全国で107校があるので、日本語で言う方言のように、地域や年代によって手話が違ってくこともある。例え

¹ 口話とは、聴覚障害者が、健聴者の口の動きを読み取り、聴覚障害者が表現したい言葉を「発話（口の形と音声）」で表す、特殊な技術に関する。

² 聴能は、脳で音声を認識する能力である。

ば、「名前」の手話は関東地方では左掌に右手親指をあてるが、関西地方では右手の親指と人差し指でつくった丸を左胸にあてる。このように地域差が今も残される。1979年から始まった厚生省(現、厚生労働省)による標準手話確定普及事業によって、『私たちの手話』が全日本ろうあ連盟から発行され、手話の共通化が進んできたのである。」

中国で行われている手話は、中国手語(中国手話)、手勢汉语(サイン化された手話/手指中国語)、通用手語(共通手話)の三つに分けられる。

①中国手語(Chinese Sign Language)：聴覚障害者が使う手話である。独自の音系特徴、語構成、文法体系を持っている。

②手勢汉语(Signed Chinese)：中国語の文法に沿った、口話と併用して人工的言語である。中国語の文法、漢字、書き言葉と対応するため、文法手話、文字手話、文章手話と呼ばれることもある。

③通用手語(共通手話)：中国手話に基づく、手話の標準語に相当する。

呂(2019)は、中国の方言手話を自然手話(中国手話)と手指中国語の二つに分けている。方言手話は必ずしも中国手話とは限らない。意味を伝達する場合、同じ文法体系に沿っていても、異なる形で表現する中国手話の方言も存在する。

劉・顧・程・魏(2013)は、聴覚障害者の学生、大人、手話を教える教師の三つのグループを研究対象として、方言手話、中国手話、中間型手話(二つとも使う手話)の使用状況の調査を行った。その結果、聴覚障害者は、中国手話より方言手話を多く使い、(およそ80%の聴覚障害者は異なる手話を使用するため)聴覚障害者の間にコミュニケーションの問題が生じるとされている。

日本と中国の手話は、社会の発展に伴い聴覚障害者の交流範囲も広くになり、必要な知識やメッセージの深さと広さも高まっている。手話学習者や手話話者間に円滑なコミュニケーションができるように、広範に使える手話辞典が発行されている。

日本：『わたしたちの手話 学習辞典I/II』は、日常広く使用されている手話を中心に約6500語を収録しており、手話学習者の便宜と標準手話の一層の普及に役立つ必携の書となっている。

中国：『国家通用手语词典1/2/3/4』は、手話の語彙だけでなく、文法の基本的な特徴も紹介している。聴覚障害者が日常で広く使用している手話を中心に、8214語を収録している。手話研究者だけでなく、多くの聴覚障害者にも使われている書である。

以上、本節では、日本と中国の手話の使用現状を概観した。両国の聴覚障害者の間では、方言手話が広範に使われているが、手話の標準化を進める必要があると思われる。本研究では、現在、日本と中国でよく使われている手話辞典（『わたしたちの手話 学習辞典』、『国家通用手语词典』）の手話語彙を基本的なデータとして体系的な対照研究を試みる。

1.2.2 日中手話に関する言語学的研究

神田（1994）は、手話学の言語理論に焦点を当てて、手話単語の基本構造、類辞、語の形成と変化、手話の表記法についての研究、音韻規則、音韻論の変遷、また、統合論の歴史、関連する研究など、形態論、音韻論、統合論の順序で基本的な理論を概観している。また、神田（2007）は、手話の認知構造とその応用について、社会的、哲学的、言語学的、工学的という多角視点から考察し、手話の言語的特性と認知的特性を記述し、手話翻訳、手話認知、手話生成ために必要な情報をまとめている。

市田（2005: 1~12）は、一年に渡って月刊言語連載された記事の中で、日本手話の基本知識、音韻形態構造、文法、日本手話の語彙体系の図像性とメタファーについて、手話の特性を捉えて記述している。この研究では特に、日本手話の文法の記述が充実している。例えば、手話の代名詞と動詞の一致、動詞の一致と指示対象のシフト、知覚・思考動詞と非手指副詞、文タイプと従属節などの文法的研究が充実している。岡・赤堀（2011）と松岡（2015）は、日本手話の音系、語彙、文法などのしくみと基本的な考えを、わかりやすく解説し、日本手話の基礎知識を体系的に記述している。また、佐伯（2016）の「日本手話におけるアスペクトの分析」も注目される。日本手話に関する構造、文法的研究の成果も注目される。木村（2007, 2011）、木村・市田（2014）のように、日本の聴覚障害者を取り巻く日本の手話の歴史、社会状況、基本的な知識や考えを記述する研究も存在する。

中国手話に関する言語学的研究として、于・張（2004）は、中国手話の分類、語構成、文法規則の表現など、中国手話の言語学の基本知識を記述し、手話の言語学的研究の社会的意義も論じている。邱・姚・李・刘（2018）は、手話の音韻論、形態論、文法論、意味論、社会手話学、などの面から中国手話の言語学知識を記述し、国内外の手話研究成果を

紹介している。呂 (2019) は、言語学の理論方法に基づき、中国手話を分析し、中国手話の言語学の基本知識を明らかにしている。

一方、手話の省略現象は、聴覚障害者が中国語の学習に困難を感じる原因の一つと考えられる。許・傅 (2015) は、中国手話の助数詞、虚詞、動詞、代名詞などの省略現象とその言語学的分析を行って、手話の構造の独立性を強調し、手話は、豊富で複雑な言語現象であると指摘している。

日中対照研究として、張・王 (2011) は、日本手話と中国手話の発展の歴史と現状を比較し、両手話の共通性を指摘している。また、張・于・米 (2011) は、日中手話の指文字、語構成、文の表現を比較し、共通点と相違点を分析している。日本や中国の手話ができる人には、相手の手話を勉強する際の学習転移の効果が認められる。一般に手話に関する研究では、日本手話は、中国手話より広く、体系的に研究されている。

1.2.3 日本手話に関する認知言語学的研究

島田 (2003) は、聴覚障害者の概念構造を、日本の手話という言語的側面を通して考察している。この研究では、まず「手話」の言語資料を多義的手話表現に限定し、認知言語学の視点から、手話の多義性をメトニミーという認知手段と照らし合わせて考察する。この分析により、手話の多義性のプロセスを説明する統一的なモデルを提示する。

以下は、島田 (2003) の典型的な例の二つを挙げながら簡単に説明する。

(1) 泣く、哀れ、悲しい

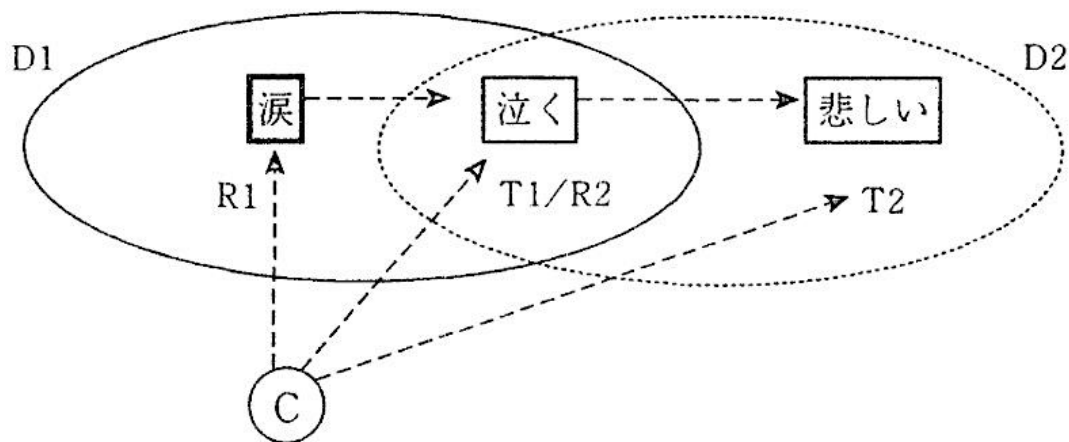


図 1-1 (島田 2003 : 27)

例 (1) は、日本手話の泣く、哀れ、悲しいは共に涙が流れる様子で表現する。まず、涙と泣くことは部分と全体の隣接関係がある。そして、人を悲しみに沈ませるような状態にある時、こらえきれず涙がこぼれる。哀れ、悲しみと泣くことは一連の現象と考えられ、そこに因果関係が成立する。すなわち、泣くことを示す典型的な要素「涙」を参照点 (R1) としてターゲット (T1) 「泣く」を指示し、その「泣く」が今度は参照点 (R2) となり、ターゲット (T2) で「ある「悲しみ」を指示する。

(2) 寒さ、恐怖

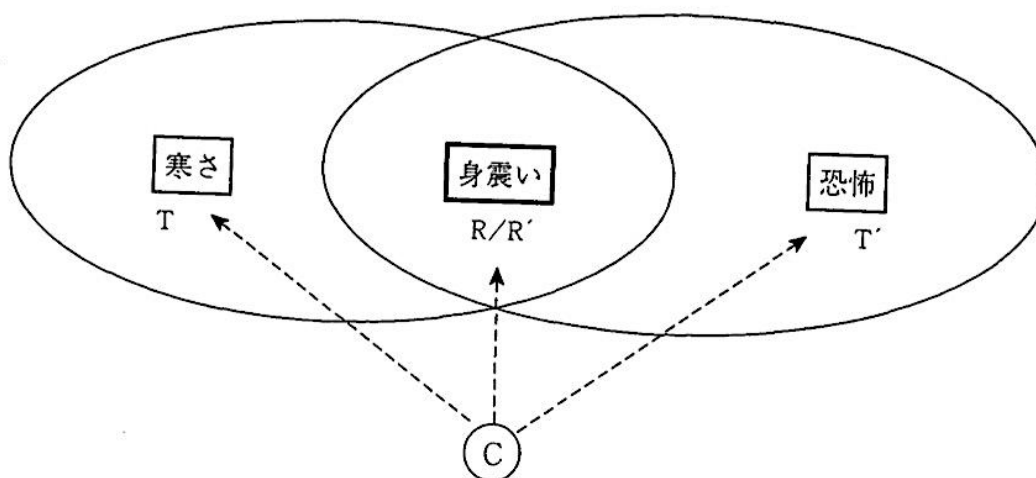


図 1-2 (島田 2003: 34)

例 (2) は、「寒さ」と「恐怖」の手話表現が身震いのしぐさで表現される例である。寒さと恐怖を感じる場合には、両体が震える生理変化が起こる。これは因果関係と考えられるが、「寒さ」から「恐怖」という因果関係が成り立たないので、表現としてのしぐさは同じであるが、意味はそれぞれのメトニミー的拡張によって異なる。この島田 (2003) が提示した参照点モデルの分析は、手話語彙の拡大と縮小の現象を説明できる。

また島田 (2005) は、Taub (2001) が提案した「類似構築モデル」(Analogue-Building Model) を援用し、手話表現の心的操作やそこから生まれるイメージについて考察している。手話表現が各言語で異なったり一致する要因は、類似構築モデルのそれぞれの過程における心的操作やそこから得られるイメージの違いとして規定される。

(3)

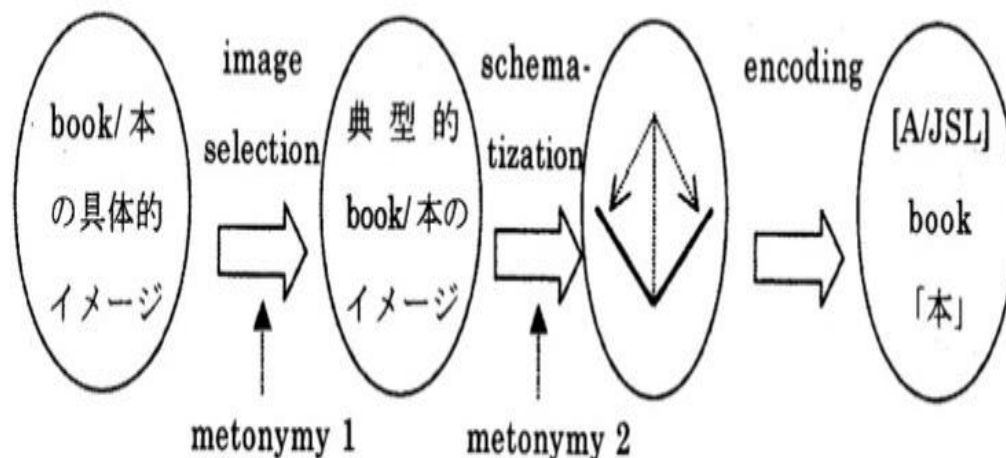


図 1-3 (島田 2005 : 94)

メトニミー (1) : より具体的で鮮明な BOOK 又は「本」のイメージから、本の形状・表紙・ページ・本の取り扱い・機能などのイメージの抽出。

メトニミー (2) : 本の形状・人は本への働きかけ (開く動作) 以外のイメージ捨象。

島田 (2005 : 94)

例 (3) では、日本手話とアメリカ手話の{本}のイメージ化の過程において、類似のイメージ生成と心的操作が行われるため、同一手話表現が生じたと考えられる。人は本への働きかけが基本的に類似しているのもその一因である。

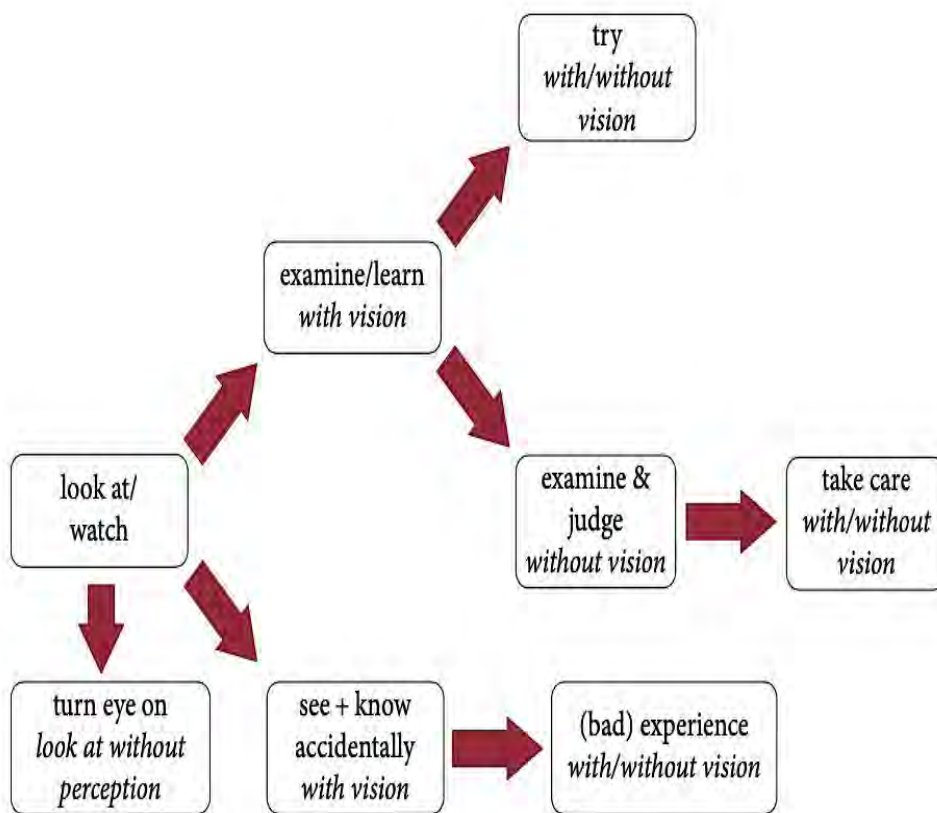
物体を手話で表す場合には、その心的操作のプロセスが様々な状況の中で起動される。このプロセスを具体的に見た場合、個々の指示物の鮮明なイメージの中から典型的イメージを選択し、得られたイメージを手話の形態素で表現できるようなスキーマに抽象化し、最後に得られたイメージ・スキーマが手話表現として記号化される。

島田 (2005 : 97)

島田 (2003, 2005) は、手話表現の差異や一致の根底には、メトニミーという認知能力が関わっている点に注目している。メトニミーの認知機能に関わる参照点能力に基づくモデルは、多義的手話の語彙の分析要因が説明できるモデルと考えられる。また、具象的な概

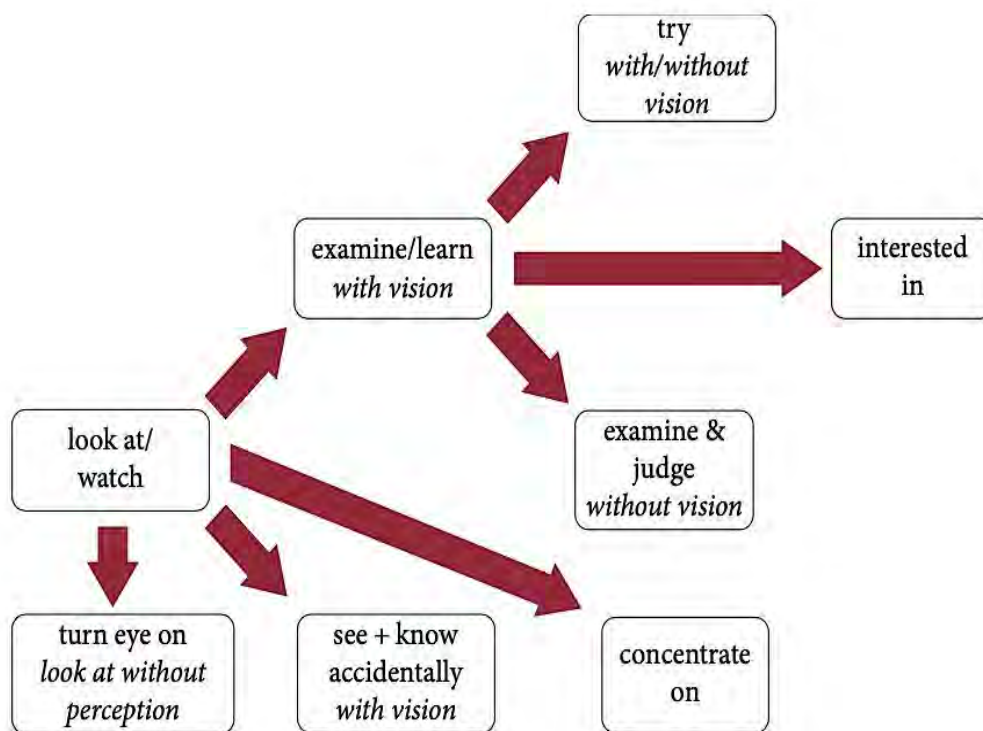
念のイメージをメトニミーによってスキーマ化する手話の使用には、参照点モデルとメトニミーに関わる一般的な認知プロセスが存在する。

Takashima (2019) は、認知言語学の枠組みに基づいて、日本手話の「目」、「耳」、「鼻」に関する知覚動詞のメタファー表現を分析し、日本手話と日本語の「目」、「耳」、「鼻」に関する意味拡張の共通点と相違点を明らかにしている。この研究では、認知概念ネットワークに基づき、日本手話と日本語の知覚動詞の「みる」に関し、以下のような規定を試みている。



a. Meaning extensions of the vision verb *miru* 'see' in spoken Japanese

図 1 - 4 - 1 (Takashima 2019: 315)



b. Meanings of signs articulated around the eyes in JSL

図 1-4-2 (Takashima 2019: 315)

このネットワークの分析は、メタファーとメトニミーによる意味拡張に依拠している。図1-4-1は、日本語の「みる」に関する意味拡張のネットワークである。図1-4-2は、日本手話の「みる」に関する意味拡張のネットワークである。図1-4-1における「to look at」(みる) → 「to examine/acquire information (検査する/聞き込みする), to see + know accidentally (見聞きする), to have (unexpected) experience (意外の経験をする)」、などの意味拡張は、知覚領域から他の認知領域へのメタファー写像によるものである。それ以外の拡張は、語用的意味に基づいた意味拡張である。「take care(気を付ける), have a bad experience (不快な経験をする)」の意味拡張は一般的であるが、「be interested in (興味がある), concentrate on (集中する)」の意味拡張は、日本手話しか存在しない意味拡張である。日本語と日本手話の「みる」に関する意味拡張には、共通の意味の認知操作が存在するが、異なる意味の認知操作も存在する。

1.2.4 中国手話に関する認知言語学的研究

鄭 (2010) では、中国手話は、主に①習慣化の手話表現、②中国語の漢字を借用する表現、③他の方式（類似語の代わり、詳しく説明）で間接的な表現の三つの表現で抽象概念を表すと主張している。特に、この種の習慣化の手話表現には、メタファーとメトニミーによる表現が認められる。

吳・李 (2012) は、中国手話に「上一下」、「前一後」、「左一右」の三種の時間・空間のメタファーの存在としている。この空間から時間への認知は中国語と類似しているが、「未来は後ろ、過去は前」のメタファー表現は、中国手話の中に存在しない。また、李・吳 (2013) は、中国手話の感情のメタファーの認知的な研究で、中国手話の 10 のタイプの感情のメタファー（好き、自慢する、悩む、焦る、羨ましい、気まずい、怖い、恥ずかしい、かわいそう、怒る）を手形、位置、動きの三つの要素から分析している。中国手話と中国語の感情的メタファーには、違いより共通性が顕著である。それは聴覚障害者の場合、聴覚以外の感覚器官と聴者の身体的経験が中国文化の影響を受けることによる。


傅 (2016) は、中国手話の語彙の中にも、メタファー表現が多く存在する事実を指摘している。特に「頭」、「心」、「手」などの身体部位は、主要なメタファー表現に使われる。この研究では、中国手話と中国語の身体部位に関する語彙のメタファーの分析に基づき、身体的メタファーの写像範囲、共通性、差別になる原因を考察し、メタファーは、聴覚障害者にとって、世界を認知し、概念を形成するに重要な手段の一つであると論じている。

劉・曹 (2019) では、動詞の分類によって、メタファーは以下のように分類される。

①動作行為動詞：「歩く」、「立つ」、「座る」、「転ぶ」、「取る」など

中国手話の動作行為動詞は、人の具体的な動作のジェスチャー動詞を指す。例えば：「座る」、「立つ」、「歩く」など。この種の動詞は、私たち経験できる、熟知の行為動詞である。中国手話の動作行為動詞の中に経験を基盤とする形と動作の類似性が存在している。中国手話では、動作行為動詞の「座る」、「立つ」、「歩く」などは、同じ人差し指と中指を人の両足として写像する。これら動詞の動作、移動の方向には、人の具体的な行為動作の類像性が認められる。この類像性の写像は、手話の動作行為動詞を表現する場合の経済的な方法である。



表 1-1 「歩く」

動作行為動詞	音系特徴		人の具体的な動作行為
歩く	人差し指と中指を分けて下に向く、交替的に前へ移動する。	形、動作の類像性の写像 	人差し指と中指を人の両足として写像する。交替的に前へ移動する動作は、人が歩く様子をまねる。

②言語活動動詞：「話す」、「聞く」、「教える」、「交流する」、「答える」など。

聴覚障害者は、手、体、そして表情を発音器官として言語動詞を表現する。言語動詞の中には、二重の写像 (double mapping) が存在している。一つは形、動作の類像性の写像、もう一つはメタファーの写像である。言語活動動詞を表現する場合、聴覚障害者は抽象的なメッセージや考えを客観的な実態とみなす。なおこの場合、メッセージの伝えるプロセスは、抽象化から具体化の拡張の方向をとる。



表 1-2 「話す」

言語動詞	音系特徴	動作の類	起点領域	メタファー	目標領域
話す	人差し指を口の周りに二回動かす	像性の写像 	物体を他人に渡す	一の写像 	メッセージを聞き手に伝える

③抽象動詞：「忘れる」、「断る」、「受ける」、「成功する」、「感じる」など。

この種の抽象動詞は、非視覚概念に関係し、状態、変化、行動、過程などを含む。抽象動詞の中にも、二重の写像 (double mapping) が存在している。中国手話には、抽象的概念を表現する場合、ある決まったルールが存在する。

表 1-3 「忘れる」

言語動詞	音系特徴	動作移動の	起点領域		目標領域
忘れる	右手掌を額にあて、そして後脳部に軽く押す。	類像性の写像 	モノを頭の中から取って捨てる。	メタファーの写像 	記憶を忘れる

抽象動詞には、方位的メタファーと容器メタファーが多く見られる。例えば：「成功する」、「失敗する」を手話で表現する場合には、上と下の移動方向が関係する。上は良いプラス意味を、下は良くないマイナス意味を示す。「喜ぶ」、「怒る」などを表現する場合、心や頭を容器として生理変化の喚起を写像する。感情を伝える心理動詞には、方位的メタファーと容器メタファーに関係する例が多い。刘・曹（2019）は、以上の分類から、中国手話は、動詞の語構成の中のメタファー表現の動態性と空間性が認められる、と論じている。

李・吴（2013）、傅（2016）、刘・曹（2019）の研究によると、手話のメタファーでは、類像性に基づいて起点領域から抽象的概念の目的領域へのメタファーの写像が成り立つと述べている。一般に、この種のメタファーは、聴覚障害者の考え・感情を表す有力な手段としても、手話の語彙を豊かにしてきている。

1.2.5 先行研究における検討課題

日本と中国の手話に関する認知言語学的の先行研究には、文献資料が少ない。日本では、現在の手話研究は、聴覚障害者の手話とされる日本手話の文法的研究に偏っている。中国では、中国手話の体系的な研究はまだ少なく、日中手話の現状の比較はあるが、日中手話の言語学上の対照研究はほとんど存在しない。

現時点での日中手話の認知言語学的研究は、主にメタファーとメトニミーの研究が中心になっている。日本手話の研究は、認知言語学の理論に基づき、語彙の多義性、意味拡張の認知プロセスの分析に注目している。これに対し、中国手話の認知言語学的研究は、中国手話のメタファーによる意味拡張の分析と記述が中心になっている。本研究では、以上の先行研究に基づき、それらの分析方法を参考にして、認知言語学的視点から日中の手話の比較研究を行う。具体的には、手話の認知言語学的研究で特に注目される身体部位、感情表現、空間運用の三つの手話の事例を中心に検討する。その際、メタファーとメトニミーの認知的モデルを用いて、それぞれの手話の特徴を究明する。

1.3 研究の流れ

本研究は、以下の流れで研究を進めていく。

まずは第一章では、本論文の研究背景、目的、意義を述べるとともに、日本と中国の手話の使用現状を紹介し、本研究の分析対象を具体的に示す。日中手話の言語学における先

行研究、特に認知言語学における先行研究をまとめ、問題点を検討し、本論文の構成を紹介する。

第二章では、認知言語学のアプローチ（特に、メタファー、メトニミー、参照点構造、などの理論的な枠組みに基づく認知的アプローチ）を概観し、本論文の手話研究の具体的な分析の方法を説明する。

第三章から第五章までは本研究の中心部分である。これらの章では、先行研究を踏まえ、収集した手話の語彙データをもとに、認知言語学的視点から日中手話の対照研究を行う。

第三章では、身体部位の「頭」、「手」、「足」、「口」に関する日中手話のメタファーとメトニミー表現について分析し、その比較を通して、日中の身体表現に関する手話表現の創造性の一面を明らかにしていく。

第四章では、メタファー、メトニミー、参照点構造に関わる認知プロセスを分析し、日中手話の伝達における経済性、創造性、多義性を検討していく。

第五章では、特に手話の空間運用の側面に焦点を当て、空間及び時間の認知と意味拡張のメカニズムを明らかにしていく。

最後の第六章では、本論文で考察した日中手話の身体部位、感情表現、空間運用に関する研究成果をまとめるとともに、本研究の残された検討課題を検討していく。

第二章 認知言語学のアプローチ

認知言語学のアプローチは、言葉と知のメカニズムを科学的に分析し、カテゴリー化、概念化、イメージ形成、等を反映する言葉の諸相を体系的に研究していく言語学のアプローチである（山梨 2000 : 5）。身体性や創造性に根ざすメタファー、イメージスキーマ、メトニミー、参照点能力、などに関わる認知プロセスは、人間の一般的な認知能力を特徴づける重要な心的プロセスである。

手話は、身体的経験をもとに、聴覚以外の一般的な認知能力を持っている視覚空間言語である。本章では、聴覚障害者の認知能力、手話語彙の意味構造、意味拡張のメカニズムの分析の理論背景となる認知言語学の基本的な枠組み概括していく。

2.1 イメージ能力とイメージ操作

想像的なイメージ能力は、言語能力の根本的な基盤であり、外部世界の創造的な理解と伝達を可能とする概念体系にも深く関わっている。創造的なイメージ能力が言語能力とどのように関わっているかを明らかにしていくためには、イメージ能力に関わる認知プロセスの考察が重要である。山梨（2000）は、このイメージ操作に関わる認知プロセスとして、以下の認知プロセスを指摘している。

表 2-1 (山梨 2012: 12)

<イメージ操作に関わる認知プロセス>
イメージ形成、イメージのスキーマ化、イメージの合成、イメージの組み替え、イメージの組み合わせ、イメージの背景化、イメージのブリーチング、イメージのゲシュタルト変換、イメージへの視点投影、イメージの焦点シフト、イメージのトポロジー的変換、等

このイメージ操作のプロセスを通し、日常言語の意味の世界を特徴づける様々な概念体系が作り上げられる。以下では、特にイメージのスキーマ化、イメージを他のイメージに変換していくメタファー写像、イメージのドメインの焦点を変換していくメトニミー写像

などの認知プロセスに注目し、この種の認知プロセスに関わる日常言語の認知分析の諸相を考察する。

2.1.1 イメージのスキーマ化

イメージは、経験に基づいて形成される心的表象の一種であり、具体的な表象として把握することができる。この心的表象を形成するための認知プロセスには、イメージのスキーマ化の認知プロセスが関わっている。一例として、卵と容器のイメージを考えてみる。

例 (1) 卵のスキーマ化

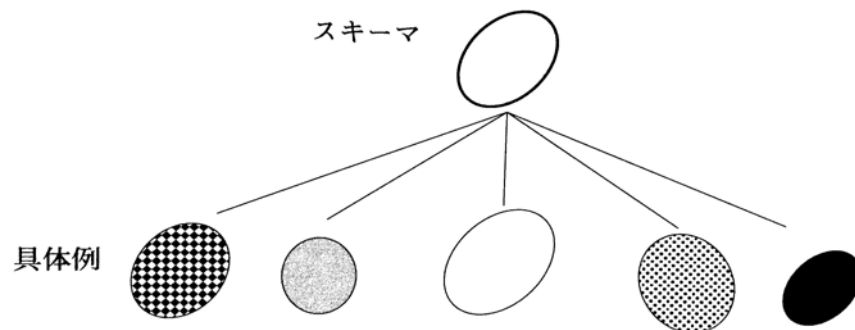


図 2-1 (大堀 2002: 21)

この図の具体例に示される「卵」は、それぞれ形、大きさ、色が異なるが、これらの事例の共通の特徴に基づいて、スキーマとしての抽象概念の「卵」が抽出される。このプロセスをスキーマ化という。

次はカップの例である。

例 (2) 容器のスキーマ化



図 2-2

カップにはいろいろな形があるが、この図の右側のイメージのスキーマは、具象的な容器のイメージを抽象的に示している。ただし、容器のイメージのスキーマ化は、必ずしも

サークルで表現することはない。三角形、四角形などの他の形のスキーマと考えることも可能である。サークルの容器のイメージスキーマが自然な感じがするので、一般的には容器のスキーマはサークルで示される。

手話の場合にもこの種のイメージ形成とイメージのスキーマ化が重要な役割を担う。Taub (2001) は、「類似構築モデル」(Analogue-building model) を提案し、類似構築のモデルに、①イメージの選択 (Image selection)、②スキーマ化(Schematization)、③記号化(Encoding)の三つの認知プロセスが関わっていると論じている。

下の図 2-3 は、このモデルに基づく ASL(American Sign Language)の「木」のイメージ形成とスキーマ化の過程である。まず、木に対するイメージを選択する。次に、適切なイメージを絞り込み、イメージをスキーマ化し、最終的に「木」のイメージスキーマが手話言語に変換される。このようなイメージの抽象化のプロセスをスキーマ化という。このスキーマ化のプロセスは、手話の語彙生成に関わる非常に普遍的な認知プロセスである。

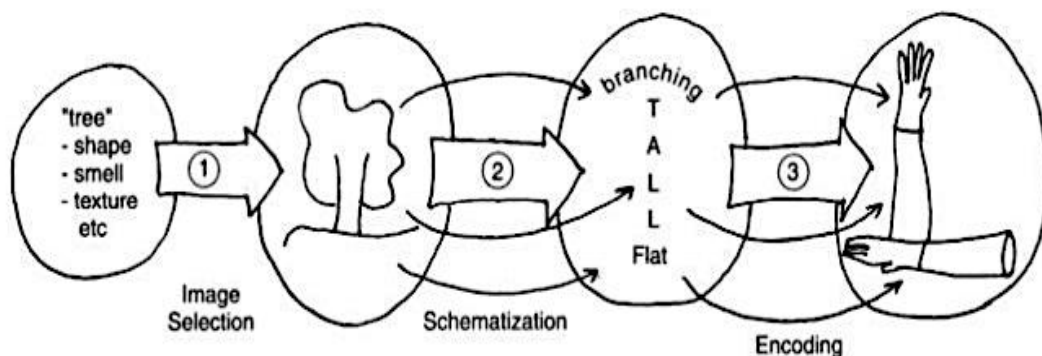


図 2-3 (Taub 2001: 70)

このスキーマ化の認知プロセスによって得られた普遍的なイメージスキーマは、具体的な経験の諸相を一般化して理解する際に重要な役割を担う。

2.1.2 イメージスキーマと比喩写像

イメージスキーマは、スキーマ化のプロセスを介して形成される、より抽象的な表象を意味する。山梨 (2012 : 17) は、「イメージスキーマは、感覚運動的な経験、場所・空間の認知的な経験、等によって形成されるゲシュタルト的なパターンに基づく認知構造の一種とみなされる。」そして、「具象的な意味の世界から抽象的な概念への意味拡張のかなりの

部分は、イメージスキーマの比喩的な写像によって可能となっている」ことを指摘している。日常言語の概念構造の拡張に関わるイメージスキーマとしては、様々なスキーマが考えられる。例えば、容器のスキーマ、リンク・ノンリンクのスキーマ、遠・近のスキーマ、上・下のスキーマ、前・後のスキーマ、中心・周辺のスキーマ、などが考えられる。

以下は、リンク・ノンリンクのスキーマの比喩的な写像の例である。

(1) リンク/ノン・リンクのスキーマ

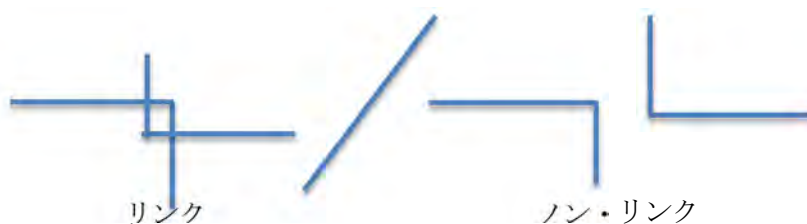


図 2-4

- a 彼と彼女は強い愛情で結ばれている。
- b あの男はヤクザとつながっている。
- c 彼と彼女は離れってしまった。
- d 彼はやっと暴力団とのつながりが切った。

(山梨 2012: 17)

このようなリンク/ノン・リンクのスキーマは、文字通りの結び目に関わる概念だけではなく、比喩的な写像のプロセスを介して抽象的な概念に拡張される。

手話では、リンクのスキーマを手で表現する場合も多く存在する。中国手話では、関係（関係）、交流（交流する）、勾結（ひそかに結託する）などの手話表現が存在する。日本手話では、関係、友達、連盟などの例もリンクのスキーマを手で表現する。物理的な概念だけでなく、抽象的な概念にも拡張している。そして、中心・両側、上・下、内・外などのスキーマも多くの手話語彙に見られる。

この種のイメージスキーマは、言語表現の拡張のプロセスと言葉の創造性を考察していく際、重要な役割を担う。手話言語を使う聴覚障害者は、想像的なイメージ能力が持っている。また、イメージ形成とイメージスキーマ化の認知プロセスは、手話の語彙生成、意味拡張において、重要な役割をになう。

2.1.3 イメージへの複合的視点の投影

容器のイメージ形成では、複合的な視点の投影の認知プロセスが、言葉の意味の創造的な拡張に重要な役割をになう。容器のイメージに対する認知主体の視点の投影の仕方によって、様々な比喩的な意味拡張が可能となる。山梨（2012）は、容器のイメージに対する視点の投影の認知プロセスの諸相を以下のように明らかにしている。

A: 容器の空間領域の内（ないしは外）に何が存在するのか。（実/空）

- a 彼の頭にはアイデアがいっぱい詰まっている。
- b 鈴木先生の講演は中味がなかった。
- c あの政治家の頭は空っぽだ。
- d この本は内容豊富で面白い。



図 2-5

B: 容器の境界領域が閉じているのか開いているのか。（開/閉）

- a 彼はオープンな人だ。
- b あの生徒は内にこもっている。
- c この子は心を閉じている。
- d 彼女はとてもあけっぴろげの人だ。



図 2-6

C: 容器の境界領域を内に見ているのか外から見ているのか。（裏/表）

- a この子は喜びが表に出ている。
- b 彼女の裏の面を想像するのは難しい。
- c 彼は笑顔の裏に深い悲しみを秘めている。

d あの子の心は表の顔からは理解できない。

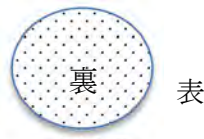


図 2-7

(山梨 2012: 28-29)

以上のように、異なる容器のイメージの視点から、人間の社交、性格、心理的な側面、等を比喩的に叙述することが可能となる。本研究では、手話に関する身体部位、感情表現の意味拡張の認知プロセスを、この種の容器のイメージ形成と比喩的な写像との関連で考察していく。

2.2 認知言語学のメタファー理論

メタファーは、言語の修辭的な手段として存在するだけでなく、思考や行動に至るまで、私たち日常生活に浸透している。人間の概念体系の中核は、基本的にメタファーによって成り立っている。Lakoff and Johnson (1980) は、概念体系を特徴づけるメタファーを、「構造のメタファー」(structural metaphors)、「方向のメタファー」(orientational metaphors)、「存在のメタファー」(ontological metaphors) の三つの基本的な種類に区分している。

以下は、この三種のメタファーにこの典型例である。

A: 構造のメタファー

(1) ARGUMENT IS WAR

Your claims are <i>indefensible</i> .	(守りようがない)
He <i>attacked every weak point</i> in my argument.	(攻撃した)
His criticisms were <i>right on target</i> .	(正しく的射ている)
I <i>demolished</i> his argument.	(粉碎した)
I've never <i>won</i> an argument with him.	(勝った)
You disagree? Okay, <i>shoot!</i>	(撃つ)
If you use that <i>strategy</i> , he'll <i>wipe you out</i> .	(戦略殺される)
He <i>shot down</i> all of my arguments.	(撃破した)

(Lakoff and Johnson 1980 : 4)

議論という概念は、部分的には戦争という概念によって構造を与え概念化される。戦争という概念のネットワークの一部が、議論という概念の一部に特徴づける。換言するならば、戦争の一部の構造を通して議論の場で行われる行動や展開の仕方が理解される。このように、メタファーによって、二つ異なる概念領域が具象から抽象への写像の認知プロセスにより繋がっている。

B: 方向のメタファー

(2) HAPPY IS UP; SAD IS DOWN

I'm feeling *up*. That *boosted* my spirits. My spirits *rose*. You're in *high* spirits. Thinking about her always gives me a *lift*.

I'm feeling *down*. I'm *depressed*. He's really *low* these days. I *fell* into a depression. My spirits *sank*.

(Lakoff and Johnson 1980 : 15)

例 (2) の「嬉しいー上、悲しいー下」は、人が嬉しいとき、真っ直ぐな姿勢になって；悲しいとき、うなだれた姿勢になる身体的基盤の経験を構成している。

空間の「上ー下」、「前ー後」、「中心ー周辺」などのメタファーにより、身体的経験をもち、気持ち、心理状態、社会地位、数量などの概念（内的や外的の面）への写像が可能となる。

C: 存在のメタファー

(3) QUANTIFYING (数量化する)

It will take *a lot of patience* to finish this book.

There is *so much hatred* in the word.

DuPont has *a lot of political power* in Delaware.

You've got *too much hostility* in you.

(Lakoff and Johnson 1980 : 26)

例 (3) では、抽象的な概念の根気、怨恨、政治力、敵意を具体的に数量化している。このような抽象的な概念を実際に存在するものとみなす存在のメタファーも広範に存在する。

また、**容器のメタファー**について、Lakoff and Johnson (1980) は、以下のように説明している。

- ①土地領域：土地の領域、人の皮膚、内容物そのもの、境界を持つものの境界線によって、内・外に区別されるものは容器と考えられる。(There's a lot of land *in* Kansas.)
- ②視界：視界を容器、見る物を内容物。(The ship is *coming into* the view.)
- ③出来事、行為、活動、状態：容器や内容物として概念化されている。(Are you *in* the race on Sunday; Are you *going to* the race)

(Lakoff and Johnson 1980 : 29-32)

存在のメタファーは、私たちの経験をするために必要とする最も基本的な手がかりの一つと考えられる。

さらに、Lakoff and Johnson (1980) の概念メタファー理論において提出した「起点領域」、
「目的領域」、「写像」について、大堀 (2002) は、下の図 2-8 のように説明している。

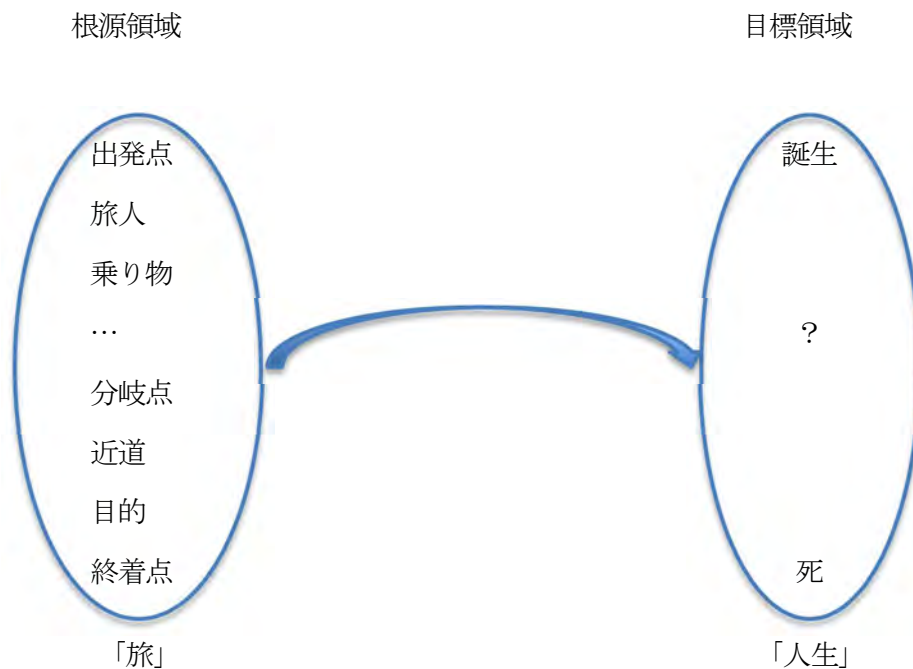


図2-8 メタファー<<人生は旅である>> (大堀 2002 : 75)

この「起点領域」から「目標領域」への対応関係を「写像」という。図2-8のように、「旅」から「人生」への写像は、基本的な写像の一種と考えられる。この場合、メタファーによって、「人生」という概念領域が目標領域へ対応できる構造を与え、「人生は旅である」のメタファーが成り立つと考えられる。

2.2.1 手話におけるメタファー

手話の場合、Wilbur (1987) は、Lakoff and Johnson (1980) の研究をもとに、ASL (American Sign Language)における手話のメタファーを「空間のメタファー」(spatialization metaphors)、「存在のメタファー」(ontological metaphor)、「構造のメタファー」(structural metaphors)の三つのメタファーに区分している。

A: 空間のメタファーの手話

HAPPY IS UP; THE NEGATIVE VALUE IS DOWN. (Wilbur 1987: 174)

手話で「嬉しい」、「笑う」を表現する場合、上への動きを伴う。それに対し、「嫌」、「失敗」などを表現する場合、下への動きを伴う。この空間のメタファーは、Lakoff and Johnson (1980) が提出した方向のメタファーと同様なものであると考えられる。

B: 存在のメタファーの手話

THE MIND IS AN CONTAINER. (Wilbur 1987: 177)

内容物は容器の中に入れられる。手話では、「C」の手型を額のところにもっていく。このしぐさは、メッセージを内容物とし、容器としての頭や心の中に入れることを示す。このメタファーによって、異なる意味が、我々の経験や認識に基づき、頭やところの中に形成される。この場合、内容物は、導管メタファー³によって、様々な手の形で意味を伝える (cf. Reddy (1979))。

³ 導管メタファー (conduit metaphors) は、Reddy (1979)によって提出されたメタファーである。Reddy (1979) は、言語の言い回しは、複合的なメタファー (考え/意味はものである; 言語表現は容器である; コミュニケーションは送ることである) によって構築される、と論じている。

C: 構造のメタファーの手話

BRILLIANT---UNDERSTANDING IS SEEING.

(Wilbur 1987: 179)

「BRILLIANT」の手話表現では、手話表現を通し、「物質的な明るさ」（物理的な概念）を起点領域、「知的の明るさ、輝き」（抽象的な概念）の目的領域とする理解が成り立つ。

Brennan (1990) は、BSL (British Sign Language) の手話におけるメタファーは、日常言語の語彙の部分だけでなく、手話の語彙の創造にも非常に重要な役割を担うと指摘している。

2.2.2 メタファーと文化

われわれは、社会、環境との相互作用から様々な身体的経験をしている。また、無意識的に身体的、文化的体験に基づき、様々なメタファーが形成される。したがって、メタファーには、社会的、文化的な影響が反映されている。

Lakoff and Johnson (1980 : 22) は、「ある文化における最も根本的な価値観は、その文化で最も根本的な概念に構造を与えているメタファーと一貫性を持っている」と述べている。特に、その文化に深く浸透している価値観がメタファーによる概念と一貫性を持っている。例えば、「上一下」に関して、「More is better」は、「More is good」、「Good is up」と一貫性を持っている。当然、「上一下」、「内一外」「中心一周辺」などの認知は、主な方向づけとして、多くの文化に見られるが、どの概念がどのように方向づけられるか、どの方向づけが優先順位であるかは、それぞれの文化によって異なっている。

Wnuk and Ito (2021) のムラブリ語 (Mlabri) の分析によれば、文化と社会環境の影響で、彼らの普遍的な身体的経験に根ざす感情に関する抽象概念の方向づけがわれわれの普遍的な認知と異なっている、という報告がなされている。下の例 (1)、(2)のように、Klöl jur が好ましい感情を叙述している。Klöl khun が不安、苦悩の感情を叙述している。この例は、ムラブリの独特の生活、文化の環境に関係している。

(1) Klöl jur (heart is going **down**) → 「happiness、ease、contentment」

(desirable emotion states)

(2) Klöl khun(heart is going **up**) → 「agitation distress」

(undesirable feeling of emotional states)

(Wnuk and Ito 2021: 200)

手話の場合にも、社会、文化の影響で、各種の比喩が存在する。例えば、日本手話 (JSL) とアメリカ手話 (ASL) の「木 (tree)」の事例研究では、ASL と JSL の表現の違いは、スキーマ化によって得られたイメージの異なりが原因であると島田 (2005) が論じている。以上の考察は、「各言語の言葉の意味は、それぞれの経験的基盤を介して理解され動機づけられている。この言葉の意味の背景となっている概念構造は、外部世界との相互作用を反映する経験に基づくイメージスキーマによって特徴づけられている」という山梨 (2000: 157) の指摘と一致する。(図 2-9)

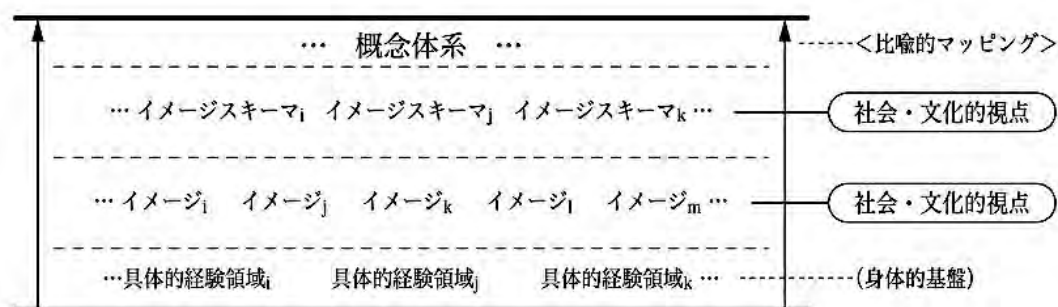


図 2-9 (山梨 2000: 157)

本研究では、日本と中国の手話表現が、イメージスキーマの認知レベルの概念と、メタファー、メトニミーの比喩的な写像のプロセスを介して派生する認知プロセスの諸相を考察していく。また、各言語の手話表現の概念構造が、それぞれの手話の背景となる文化・社会の具体的な経験領域によって動機づけられる事実を明らかにしていく。

2.3 メトニミー理論

Lakoff and Johnson (1980) は、メタファーと同様、メトニミーも人間の思考体系を形成する重要な認知手段の一つであると主張している。「部分が全体を表す (synecdoche)⁴」や「制作者が製品を表す (因果関係)」などのメトニミーは、われわれの身体的経験を基盤として形成される。「メトニミーの基本的な機能は、意味する対象と、この対象の意味を伝えるための手がかりとして表現される対象との関係にある。この種の関係は、空間的な隣接性・近接性、共存性、時間的前後関係、事象の因果関係などによって、特徴づけられる」と山梨 (2015: 17-18) が述べている。

⁴ シネクドキ(synecdoche)は、メトニミーの下位類：〈類〉と〈種〉の修辞表現と考えられる。

この慣用的なメトニミーを特徴づける近接の関係としては、A. 容器-中身、B. 主体-手段、C. 作者-製品、D. 主体-付属物、E. 部分-全体、F. 産地-産物などのリンクがある。

- A. 容器-中身：「鍋」（が煮える）」→「鍋の食べ物」（が煮える）」
- B. 主体-手段：「白バイ」→「白バイの警官」
- C. 作者-製品：「漱石」→「漱石の小説」
- D. 主体-付属物：「黒帯」→「柔道の有段者」
- E. 部分-全体：「ブロンド」→「ブロンドの髪の人」
- F. 産地-産物：「ボルド」→「ボルドのワイン」

(山梨 2015 : 18-19)

また、Peirsman and Geeraerts (2006) は、近接性の中心は部分と全体の関係からなる、部分と全体は人間が世界に対して概念化の最も基本的なカテゴリーであると指摘している。

メトニミーは普遍的な言語現象であり、人間の認知能力の重要な機能を反映している。聴覚障害者は聴者と同じ、概念体系を理解するために、外部リンクなどの関係を重んじる。無意識的に全体のかわり、わかりやすい、感知しやすい部分を手で表現する。それゆえ、手話の語彙の中には、メトニミー表現がかなり存在している。例えば、中国手話の中には、特徴を人物に指す(イヤリング-女 / 花が咲く様子-花)、動作方式を具象物/抽象概念に指す(餃子の皮を包む動作-餃子/右手拳を前の上に出す-抗議する) が存在する。

本研究では、手話の身体部位表現と感情表現に関わる語彙の構成と意味拡張において、メトニミーを特徴づける認知プロセスがどのような役割を果たしているのかを具体的に考察していく。

2.3.1 メタファーとメトニミーの融合

従来の研究では、メタファーとメトニミーに関わる言語現象は個別に分析されている。しかし、日常言語や手話には、メタファーやメトニミーの認知プロセスが複合的に関与する現象も広範に見られる。

メタファーとメトニミーに基づく認知プロセスが複合的に関わっている表現の分析として、山梨 (2012) は以下の分析を示している。

- a. 獅子鼻と才槌頭がケンカしていること。
- b. 太鼓腹がジョギングしている。

(山梨 2012: 134)

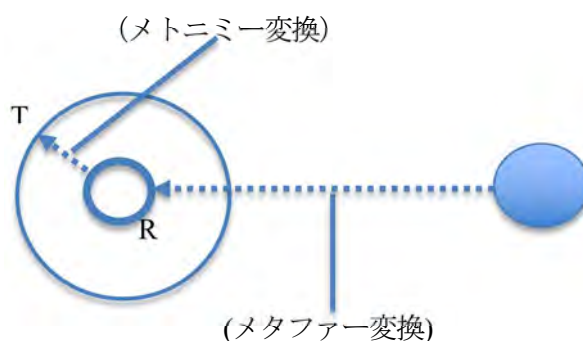


図 2-10 (山梨 2012:135)

例 a、b の表現は、メタファー（獅子、才槌、太鼓への写像）とメトニミー（鼻、頭、腹を身体部位の一部で人を表す）の両方とも含意している。山梨は、参照点構造（図 2-10）に基づき、この種のメタファーとメトニミーの融合の認知プロセスを分析している。左側の R でマークされる太線のサークルは問題のメタファー⁵の身体部位、T でマークされる細線のサークルはこの身体部位を指す人物、右側の小さな円形は身体部位を比喩的に喩えるソースドメイン（source domain）を示す。また、点線の矢印はそれぞれメタファーとメトニミーの変換の認知プロセスを示している。

メタファーとメトニミーの融合は、どの言語にも存在する可能性のある修辭的な表現である。本研究は、この種の修辭表現の複合的な認知プロセスの分析によって、一部の手話の語彙の構成と意味拡張における意味の融合現象を考察していく。

2.3.2 参照点構造とメトニミー

2.3.1 節では、メトニミーと参照点の問題を考察したが、詳しく説明していないので、本節で具体的に説明していく。

⁵ 山梨 (2000: 135) は、メタファーとメトニミーのブレンディングを「メタファー」と呼んでいる。

参照点能力は、人間の注目すべき認知能力の一つであり、ある対象を探索のための手がかりとして参照しながら、ターゲットに到達していくことができる能力である。基本的にはこの能力により、ある固定的で注目されるものを手がかりとして参照する。

Langacker (1993) は、人間の心的操作には、参照点構造が反映されていると主張している。われわれは問題のターゲットを探索する際には、そのターゲットに到達するための参照点を認知し、この参照点を経由して、問題のターゲットを間接的に認知していく。この認知プロセスは下の図 2-6 のように示される。

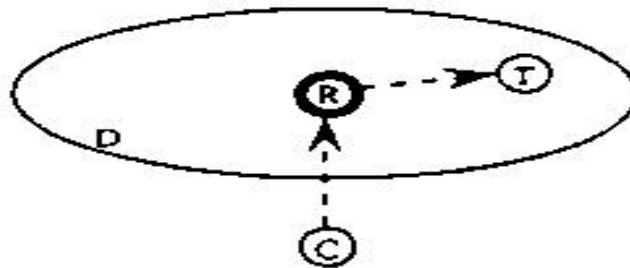


図 2-11 (Langacker 1993 : 6)

この場合、C は認知主体 (conceptualizer)、R は参照点 (reference point)、T はターゲット (target)、楕円形の領域は参照点 R の支配域 D (domain)、そして、破線の矢印は認知主体が参照点を経由してターゲットに到達する心的操作を示す。この参照点能力は、人間のより一般的な認知能力である。参照点とターゲットの関係は、メトニミーの基本的なメカニズムと考えられる。

山梨 (2000) は、認知主体から参照点、参照点からターゲットにいたる心的操作は動的な認知プロセスとして再規定可能であるとしている。すなわち、下の図 2-12 のように、状況によっては参照点を介して認定されるターゲットが次の参照点となり、この参照点を介して新しいターゲットを認定していくことが可能となる。

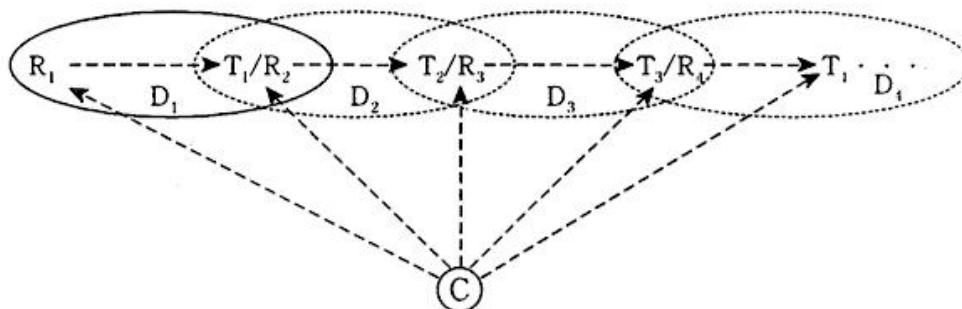


図 2-12 (山梨 2000 : 96)

この図における「C」は認知主体、「R」は参照点、「T」はターゲット、「D」は支配域、「→」はメンタル・コンタクトの経路である。参照点とターゲットは、固定された存在ではない。この参照点からターゲットの推移は、動的な認知プロセスの展開の可能性を示している。山梨（2000）は、参照点に関して一般的に以下の制約が存在するとしている。

<参照点と探索領域の制約>

参照点からターゲットへの絞り込みは、参照点が起動する探索領域の間に、包含関係から見て適切な隣接性が存在しなければならない。

(山梨 2000 : 112)

以上のように、参照点構造は、言語の多義性と意味拡張を説明する注目すべき認知モデルと考えられる。本研究では、この参照点構造のモデルに基づき、日中の手話表現の概念構造と認知のメカニズムの諸相を考察していく。

第三章 日中手話の身体部位に関する意味拡張

日常生活で使っていることばの意味の大部分は、メタファーやメトニミーの修辭的な認知のプロセスを介して表現される。メタファーは類似に基づく比喩である。メタファーには、抽象的な概念と明確な形をもった具体的な概念との間に成り立つ一定の対応関係が存在している。この対応関係はメタファーの認知活動に深く根を下ろしており、意味拡張に最も強力的なプロセスである。メトニミーは、人間の理解や概念化の手段として、言語現象のみならず、日常の思考や行動の仕方において重要な役割を果たしている。これは音声言語だけでなく、手話にもかなり使用される表現手段である。聴覚障害者は、ある事物の意味、形状、特性の類似を通じて、手の形、位置と方向、動き、顔の表情、口話などの形を表現している。

メタファーやメトニミーの修辭的な認知は、われわれを取り巻く環境世界での身体的経験に根差している。山梨 (2012) は、「河口、先頭、腹が立つ」などの日本語の慣用的な身体部位に関わる表現が、「場所・空間、物の位置関係、方向、感情」などの概念が身体部位に基づいて修辭的に表現されている事例を分析している。この種の表現には、根源的にメタファーやメトニミーの修辭機能が認められる。

本章では、矢沢 (2013) と傳 (2016) の身体部位に関する意味拡張の事例を参考にして、「頭」、「手」、「足」、「口」の四つの身体部位を取り上げ、日本語と日本手話、中国語と中国手話、音声言語と手話、日本手話と中国手話の考察を行い、日中の手話のメタファーやメトニミーによる意味拡張のメカニズムの考察を試みる。

3.1 「頭」に関する意味拡張

まず、身体部位の「頭」に関わるメタファー、メトニミーとその意味拡張の例は、以下にまとめられる。

表 3-1 「頭」に関する意味拡張

言語	日本語	日本手話	中国語	中国手話
語形	頭	右手人差し 指の指先を こめかみに あてる	头 (頭) / 首 (頭)	右手人差し 指の指先を 額にあてる
1 形が似てい る	頭に似た形の物： くぎの頭	a.頭が空つ ぽ b.頭うち	日头 (太陽)、 石头 (石)	昂首
2 形態的な特 徴が似てい る	先端：山の頭、筆 頭、テープの頭 出し 組織の長：頭 (か しら)	/	先端：箭头 (やじ り)、山头(山頂) 始まりと終わり：两 头红 (両方の端、 日暮れから夜明 けまで)、尽头 方位：外头 (外) 組織の長：头领 (リ ーダー)、工头 (職人のかし ら)	f.开头(はじ め) g.首脑 (首 脳)
3 機能	考える/頭脳：頭が いい	c.頭がいい	思考力：有头脑、头 脑灵活(頭がいい)	c'聪明 (頭が いい)
4 機能の派生	考え方：頭を切り 換える、頭が古 い 気持ち：頭を下げ る、頭が高い	d.頭にくる e.頭が固い	気持ち：缩头缩脑 (いじいじした様 子)、垂头丧气 (ガ ッカリして気を 落とす)	e'顽固 (頭が 固い)


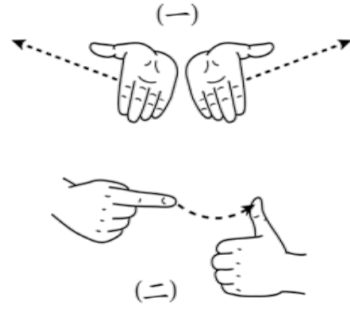

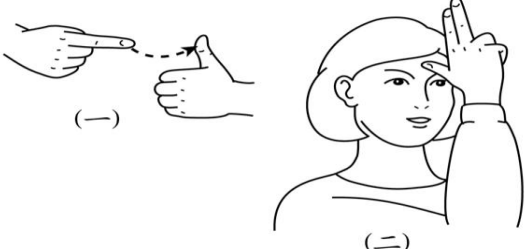

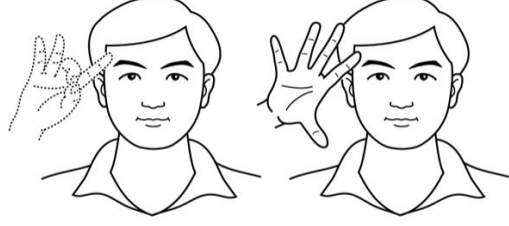


<p>あたまから 頭が空っぽ、のんき、軽率 左手を頭の中に見立てて空っぽな様子を表現</p>  <p>湾曲させた左手の人差指側から親指側に沿って右手人差指を回す</p> <p>a. 頭が空っぽ</p>	 <p>f. 开头 (はじめ)</p>
<p>あたまを 頭打ち 壁に当たって伸び悩んでいる様子の表現</p>  <p>右手拳を揺らしながら上げ、湾曲した左手掌にあてる</p> <p>b. 頭打ち</p>	 <p>g. 首脳 (首脳)</p>
<p>かたい、鋭い、利口、頭がよい、インテリ</p>  <p>つまんだ右手2指をこめかみにつけ、人差指を上げて伸ばす</p> <p>c. 頭がいい</p>	 <p>c' 聪明 (頭がいい)</p>
<p>あたまを 頭にくる</p>  <p>上に向けた右手人差指を左手掌に突きあてる</p>  <p>右手人差指の指先をこめかみにあてる</p> <p>d. 頭にくる</p>	

図 3-1

3.1.1 日本語と日本手話の場合

日本語と日本手話の「頭」は、首から上の身体部位を意味する。日本語の「頭」に関する意味拡張は、以下の通りである。

- ①頭の形に似た物：くぎの頭
- ②頭の形態的特徴（上の部分、先端）：頭出し、頭（かしら）
- ③機能（思考力、考え）：頭がいい
- ④機能の派生（考え方、気持ち）：頭が古い、頭を下げる

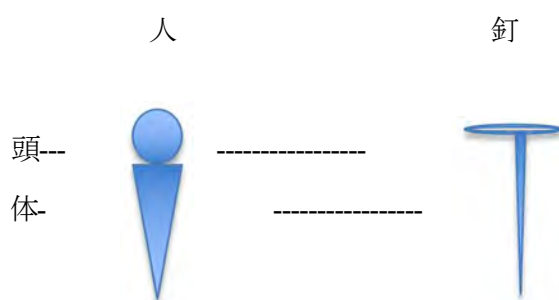


図 3-2 形、位置の類似性

形が似ている部分と頭の形態的特徴は「頭」の基本意味ではない。「頭」の形が丸い、「頭」は身体の上部である。この二つの性質により、メタファーによる意味拡張で、形が似ているものを指し、ある物の上部を表すことができる。①の「くぎの頭」は、形の類似性に基づく意味拡張である。②の「頭出し」は、位置の類似性に基づく意味拡張である。位置の類似性に基づく意味拡張は、主に「物の先端部分」、「物の上部」、「物の前部」という三つの部位に関わる空間概念に関する意味拡張である。また、頭は全身をコントロールすることができるので、機能的に、身体が一番重要な部分である。したがって、「頭」はここから他の語義に拡張し（例：「かしら」）、ある集団の最も権力がある人を指す地位に関する意味拡張である。

頭の働きには、物事を決める、判断する能力が関係し、人間の思考力や感情にも関係する。頭は人間の経験や知識によって、物事を判断する機能、すなわち、考え、思考力に関係する。この場合には、「頭」より「脳」の働きであると考えられる場合が普通で、「頭」と「脳」は全体と部分の関係によってメトニミー的に関係している。さらに、人間が感情を表す場

合には動作を伴う。日本語には、頭を下げる、頭が高いなどの例がある。また、動作によって内的感情を表すことができる。

一方、日本手話では、「頭」に関する意味拡張は、以下の通りである。

- ①頭の形に似た物：頭が空っぽ、頭打ち
- ②頭の形態的特徴（上の部分、先端）：/
- ③機能（思考力、考え）：頭がいい
- ④機能の派生（考え方、気持ち）：頭にくる、頭が固い

①の「頭が空っぽ」、「頭打ち」は、頭の形が似ている手話の例である。「頭が空っぽ」は、左手は頭の中に見立てて空っぽな様子を表現する。(i)：類像性の写像（音系特徴を頭の丸い形（球体）へ写像）。(ii)：メタファーによる写像（頭から容器への写像）という二重の写像が存在している。

表 3-2 「頭が空っぽ」

手話	音系特徴		起点領域		目標領域
頭が空っぽ	湾曲させた左手の人差し指側から親指側に沿って右手人差し指を回す	形の類像性の写像 →	容器と中身	メタファーの写像 →	頭の中に、何もない状態

また、「頭打ち」は、手話で右手拳を左手掌に当てる動作により、壁に当たって、それ以上上がらなくなる意味を表現する。この表現では、左手を壁、右手を頭として表現している。(i)：左手を壁、右手の拳の音系特徴を頭の形として写像する。また、(ii)：壁（天井）に当たって、それ以上は上がらなくなる表現は一番上の最高点を示す。これは、類像性に基づくメタファーによる意味拡張の一種である。

表 3-3 「頭打ち」

手話	音系特徴		起点領域		目標領域
頭打ち	右手拳を揺らしながら上げ、湾曲した左手掌にあてる	形と動作の類像性の写像 →	頭を天井にあたる	メタファーの写像 →	最高点

また、日本手話では、③頭の機能と④機能の派生には、「頭がいい」、「頭にくる」、「頭が固い」の表現がある。主に「頭+いい/くる/固い」の二つの動作を組み合わせて表現する。これは「頭」で「脳」を指すので、メトニミーによる意味拡張である。この場合の頭は、脳の働き、記憶、コントロールなどの機能がメトニミー的に関係している。

ここまでの分析は日本語の部分とかなり近いが、手話の場合には、メトニミーとメタファーの融合と複合的な認知プロセスが認められ、メトニミーに基づいたメタファーの認知プロセスが成り立つ例も存在する。頭の脳機能のメトニミーに基づき、考えを1本の指、2本の指、指で「モノ」の形にする。このように具象化する表現は、頭と内容物に関する存在のメタファーの一種とみなすことができる。

③の「頭がいい」は、機能的に「脳の回転が速い」を意味する。この場合、人差し指をこめかみに当て頭を指す。この場合には、全体と部分のメトニミーの認知プロセスが関係している。またこの事例には、考えを指で「モノ」として概念化される存在のメタファーと関係している。④の「頭にくる」は、右手の人差し指をこめかみにあて、頭を指し、上に向けた右手の人差し指を左手掌に突き当てる。この動作は、「刺激を与える」の意味を示している。この場合、刺激を受けるのは脳の機能である。ここでは、頭と脳は、全体と部分の近接性の関係であり、メトニミーの認知プロセスが認められる。また、刺激を指で具象化し、概念化する表現はメタファーと考えられる。

さらに、日本手話の「頭」の機能と関わる意味拡張の事例は、以下に示される。

表 3-4 日本手話の「頭」の機能に関する意味拡張

頭の機能	日本手話の例
考え、思考力、	考え、推理、知恵、知識、思想、教養、ヒント、発明、思惑、想像する、回転する、勘違い、など
記憶	忘れる、覚える、記憶
気持ち、精神状態	根に持つ、懐かしい、思い切る、困る、気になる、煩わしい、病気になる、断腸の思い、など

3.1.2 中国語と中国手話の場合

次に、中国語と中国手話の場合を考察する。

中国語の「頭」に関する意味拡張は以下の通りである。

- ①頭に似た形の物：日头（太陽）、石头（石）
- ②頭の形態的特徴：
 - a 先端:箭头（矢じり）、山头(山の頭)
 - b 始まりと終わり:两头红（両方の端、日暮れから夜明けまで）、尽头(頭うち)
 - c 方位:外头（外）
 - d 組織の長:头领（リーダー）、工头（現場監督の人）
- ③機能（思考力、考え）：有头脑、头脑灵活（頭がいい）
- ④機能の派生（気持ち）：昂首（頭をもたげる）、缩头缩脑（いじいじした様子）、垂头丧气（がっかりして気を落とす）

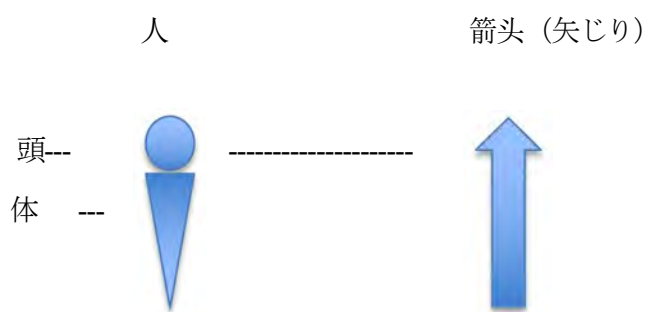


図 3-3 <位置の類似性>

①は「頭」の形の類似性による意味拡張である。②の a、b は「頭」の位置の類似性による意味拡張であり、物の上部、先端部分、終わりを意味する。c は方位の類似による意味拡張である。d は「頭」の位置の上部からさらに拡張していき、トップや重要性の働きを意味する。③の「头脑（頭脳）」の語彙は、中国語では「脳」との強い関連性がみられる。頭は脳と近接関係があるので、メトニミーによる意味拡張である。④の「昂首（頭をもたげる）」、「缩头缩脑（いじいじした様子）」、「垂头丧气（がっかりして気を落とす）」は、動作によって内的感情を表す時間の隣接関係による意味拡張である。

一方、中国手話では、身体部位の「頭」は、「头」と「首」の二つの表現が存在する。表3-1の分類による「頭」に関する意味拡張は、以下の通りである。

- ①頭の形に似た物： 昂首（頭をもたげる）
- ②頭の形態的特徴（上の部分、先端）： f. 开头（はじめ）、g. 首脑（首脳）
- ③機能（思考力、考え）： 聪明（頭がいい）
- ④機能の派生（考え方、気持ち）： 顽固（頭が固い）

中国手話において、①の「昂首（頭をもたげる）」は、下の図3-4のように、拳で頭を見立てる頭の形に似ている。この例は、私たちの身体的経験に基づき、形と動作の類像性の写像と考えられる。この場合、形と動作の類像性の写像に基づき、気持ちの高揚の意味も表現できる。また、ここには時間の隣接関係が認められるので、メトニミーによる意味拡張と考えられる。



図3-4 「昂首（頭をもたげる）」

②の「开头（はじめ）」、「首脑（首脳）」の例は、頭の形態的な特徴が似ている。「开头（はじめ）」は、親指の位置のはじめを時間のはじめへ写像する。これは、空間領域から時間領域へのメタファー写像による意味拡張である。「首脑（首脳）」は、二つの手の形から組み合わせた手話表現である、この場合、「頭の位置+脳の働き」の表現は、頭と脳の隣接関係

により脳の働きの重要性を意味するメトニミーによる意味拡張と考えられる。また、ここでは脳の働きの重要性から権利のある人を意味するメタファーによる意味拡張が成立している。したがって、この事例は、メトニミーに基づくメタファー表現の複合的な意味拡張の一種である。

さらに、中国手話の「頭」の機能と関わる意味拡張としては、以下のような抽象的な概念への拡張が考えられる。

表 3-5 中国手話の「頭」の機能に関する意味拡張

頭の機能	中国手話の例
考え、思考力	常识、吃一堑长一智、聪明、错误、笃信、发明、观念、反省、反应、概念、感想、构思、意识、智力、知识、など
記憶	记忆、背诵、忘记、
気持ち、精神状態	崩溃、懊悔、耿耿于怀、恍惚、生病、など

3.1.3 比較とまとめ

以上、身体部位の「頭」に関する意味拡張について、日本語と日本手話、中国語と中国手話の対照的研究を行った。結論としては、まず、音声言語の日本語と中国語の「頭」に関する意味拡張には、「形が似ている」、「形態的な特徴が似ている」、「機能」、「機能の派生」、という四つのタイプが存在する。この点で両言語の手話には、共通性が認められる。しかし、日中における「頭」の「先端」部分という意味拡張はおおよそで一致しているが、一つ異なるのは「頭」に関する「物の先端部分」という点である。日本語の場合には、ただ物のはじめを表す。中国語の場合には、物の始めと終わりの両方も含んでいる。そして、音声言語と手話の比較は、音声言語より、手話の意味拡張は少ない。日本手話では、「形態的な特徴が似ている」という意味への拡張ができない。日本と中国の手話は、主に「機能」と「機能の派生」による意味拡張であると言える。

なお、日本手話と中国手話の「頭」に関するメタファー表現は、基本的に容器のメタファーである。すなわち、頭は容器であり、考えや内容物を入れることも、取り出すことも可能である。頭は容器として、様々なメッセージと知識を頭の中に記憶して保存する。そして、頭の中の思いや考えを必要とする時、それらを取り出すことができる。一般的には、

容器と中身の関係はメトニミーであるが、手話の中には、「頭」を使って、考えを内容物のモノと考えるメタファーの意味拡張も存在する。

以上の関係は図3-5で表すことができる。



図3-5

ここでは、次の二点に注意する必要がある。

(1) : 「頭」の「形に似ている」と「形態的な特徴が似ている」に関するメタファーの意味拡張は、音声言語と異なり、類像性の写像によって可能となる。

(2) : 「機能」と「機能の派生」の意味拡張は、メトニミーに基づきメタファーの複合的な認知プロセスによって成り立つ。手話の場合には、常に、「脳」は「頭」のかわりになる(中国手話では、頭と脳の動作表現は同じである)。頭と脳の隣接関係は、メトニミーによる意味拡張である。

以下に、この種の手話の例を二つ挙げる。



図 3-6 「记忆 (記憶)」

i. 记忆 (記憶) : 右手の人差し指をJの形にして、額を二回たたく。

(物事、知識をモノとして、頭に入れることを意味する)



忘记 wàngjì forget
一手五指撮合,先在前额按一下,再转向脑后按一下,表示把原记住的事情忘在脑后。

图 3-7 「忘记 (忘れる)」

ii. 忘记 (忘れる): 右手掌を額にあて、そして後頭部を軽く押す。

(本来覚えたことをモノとして頭の後ろに置き、忘れたことを意味する)。

手話は、音声言語と同じく、身体的経験に基づく社会、環境、世界に関する意味の伝達を可能とする。日・中の手話には、「頭」に関する類似の表現が多く存在する (表 3-4、表 3-5 を参照)。

前述に挙げられた日本手話の「b. 頭打ち」と「c. 頭がいい」の例は、中国手話の中にも類似している表現もある。例えば、「b' 碰壁 (行き詰まる)」は、頭と壁にぶつかる表現が日本手話の「頭打ち」と類似しているが、意味拡張は異なっている。日本手話はそれ以上上がらない最高点の意味に拡張する。これに対し、中国手話は、挫折、失敗の経験という意味に拡張する。



图 3-8 「碰壁 (行き詰まる)」

「c' 聪明 (頭がいい)」は、手の形と動作が異なるが、拡張された意味は基本的には同じである。日中の手話の「頭」に関する意味拡張は類似しているところはあるが、拡張していく意味は必ずしも一致しない。

3.2 「手」に関する意味拡張

次に、「手」に関する意味拡張を取り上げる。

まず、「手」に関わるメタファー、メトニミーとその意味拡張は、以下の表にまとめられる。

表 3-6 「手」に関する意味拡張

言語	日本語	日本手話	中国語	中国手話
語形	手	右手掌を前に向け て立て、体の前に置 く	手	左手掌を下に向け、 胸前に置く、右手は 左手の甲をたたく
1 形が似て いる	/	/	/	/
2 形態的な 特徴が似て いる	手の形をしたもの : 急須 の手、鍋の手、取手	/	手の形をしたもの : 把手 (取っ手)	/
3 機能	能力 : 手に余る 手段、方法 : いい手、最 後の手 手数 : 手を抜く 世話 : 手が焼ける 技量、腕前 : 腕が上がる、 方向 : 山手、横手、手前 傷 : 手を負う、痛手 所有領域 : 手に入れる	a. 方法、手段 i. 形をつくる ii. 動作をまねる iii. 掌 : 境界 iv. 指 : 男、女 v. 腕 : 技術、技能	能力 : 眼高手低、心 灵手巧 手段、方法 : 束手无 策、 自由 : 放开手脚、束 手束脚 参加する : 袖手旁观 経済情況 : 大手大脚 方向 : 西手 (西側)	b. 技術 i. 形をつくる ii. 動作をまねる iii. 掌 : 境界 iv. 指 : 男、女 ; 地位、 優劣、季節、順 序、時間、など、 v. 腕 : 時間
4 機能の派 生	力、助力 : 手を借りる 人 : 助手、歌手、聞き手	人	人 (ある種の技術を 持っている人) : 一把 手、扒手	人

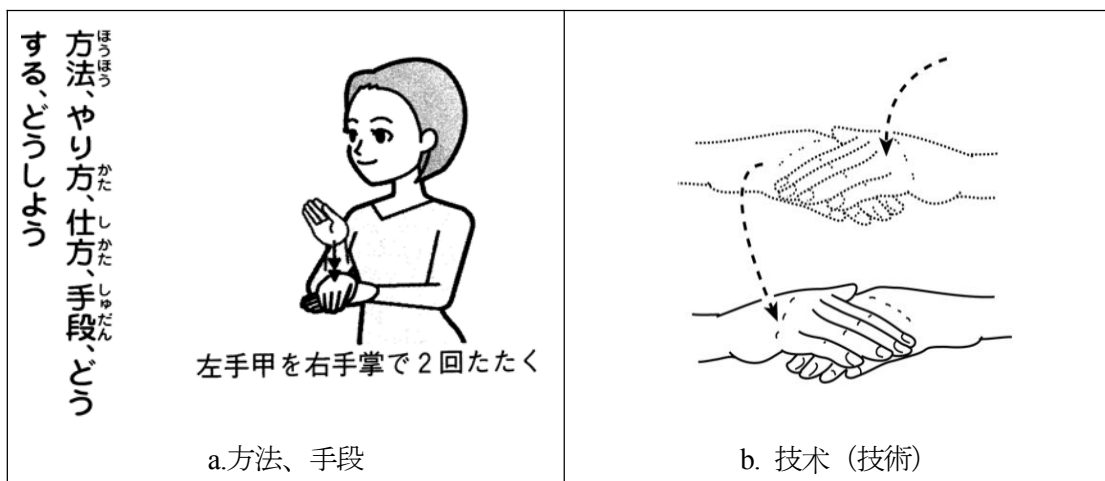


図3-9 「方法・技術 (技術)」

上記の表3-6を基に、手の手話に関しても、以下、日本語と日本手話の場合と中国語と中国手話の場合に分けて順に見ていく。

3.2.1 日本語と日本手話の場合

手は人体の肩から先の部分で、手首やてのひら、指先や動物の前足を指す。電子辞書の『大辞林 第三版』にある例を参考に、「手」の派生的意味は下記のようにまとめることができる。

A 形態的な特徴が似ている：

①手の形をしたもの：急須の手、鍋の手、取っ手

B 機能：

②能力：手に余る

③手段、方法：いい手、最後の手

④手数：手を抜く

⑤世話：手が焼ける

⑥技量、腕前：手が上がる (腕が上がる)

⑦方向：山手、横手、手前

⑧傷：手を負う、痛手

⑨所有領域：手に入れる

C 機能の派生：

⑩力、助力：手を借りる

①人：助手、歌手、聞き手

①は、手の形状と位置の類似に基づくメタファー表現である。「主体—機能」の関係はメトニミーと考えられるが、②④⑤⑥⑩は、手の機能によるメタファー表現と考えることもできる。③⑦⑧⑨⑩は、隣接関係のメトニミーによる意味拡張である。③は、「主体—機能」に基づくメトニミー表現と考えられる。⑦は、手が指す方向を表す空間的隣接関係のメトニミー表現である。⑧は、手に「傷を受ける」を意味する空間的隣接関係のメトニミー表現である。⑨の所有領域への写像は意味拡張の隣接関係のメトニミー表現である。⑩は、手と人の関係に基づく部分と全体によるメトニミー表現である。以上のように、「手」に関する意味拡張は日本語に数多く存在している。

しかし、日本手話には、図 3-9-a を示しているように、手と手段が、主体と機能のメトニミー関係になっている事例も存在する。音声言語の「手遅れ、手抜き、手配する」等の語は手話に使われているが、主に「日本語を日本語対応」的に手話に置き換えたものである（矢沢(2013)を参照）。

手遅れ

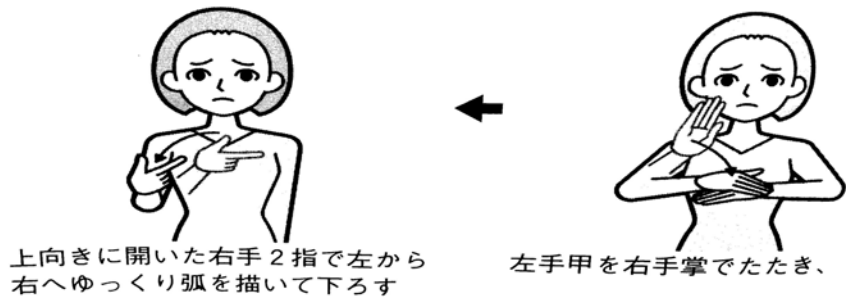


図 3-10 「手遅れ」

「手」で「指令」を組み合わせた表現
回す「す」
手配「す」
手配「す」
手配「す」
手配「す」
手配「す」
手配「す」

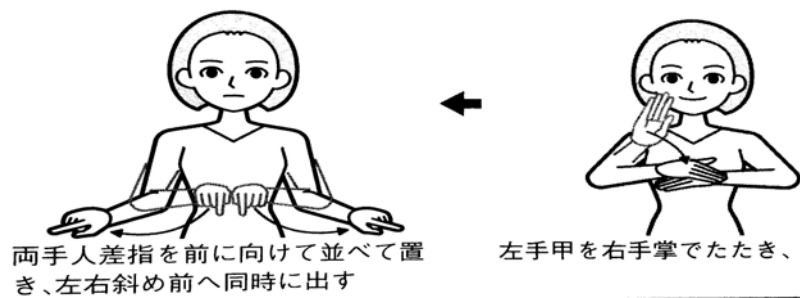


図 3-11 「手配する」

「手遅れ」、「手配する」の例は、意味的に拡張しているが、日本語と対応的な考え方によるものである。手話では、「手+遅れる」、「手+命令」の形で表現している。手話でのメタファーやメトニミーによる意味拡張とは考えにくい。

日本手話では、手に対する認知に基づき、どのような働きをしているかに関し、日本の手話辞典から以下のようにまとめられる。

表 3-7 日本手話：手の機能に関する手話表現

i. 形をつくる		モノへの写像：ピーマン、家、飛行機、など	
ii. 動作をまねる		物事、行為への写像：運動（相撲、スキー、柔道、ゴルフ）、煮る、ほる、釣り、つくる、など	
iii. 掌：境界	イメージス キーマ	起点—経路—終点：まだ、最後、途中	
		容器	内—外：内側、裏側、外側
			容器—中身：内容
iv. 指		親指：男、父、良い、偉い、主な 小指：女、母	
v. 腕		技術、時	

表 3-7 は、手の機能に関する手話表現を示している。手で形をつくり動作をまねることは、手の基本的な機能である。手話では、この機能から、対象物の形や動きの特徴をイメージ化することにより、手話語彙が形成される。換言するならば、イメージ操作に基づき類像性の写像を経てモノ、行為を表現する。

例えば、ピーマンの形のイメージや家の屋根のイメージ化して、普遍的なイメージを抽出して、手で表現する。このプロセスによって、多くの手話語彙が形成される。「物の性質で物を指す」、「部分で全体を指す」のような表現は、メトニミーの認知プロセスに基づいている。

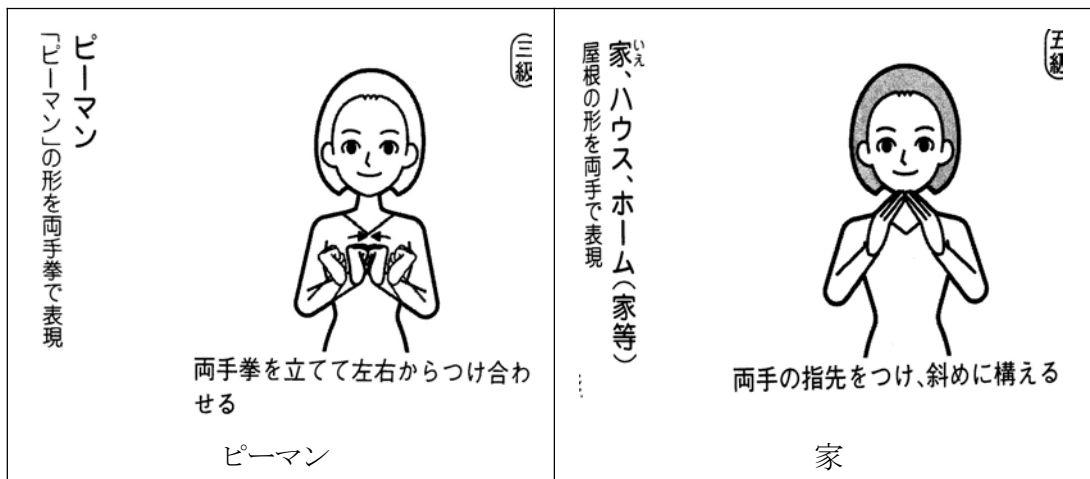


図3-12 < i. 形をつくる >

物事や行為の動きや動作のイメージをまねる表現は、「動作で物事、行為を指す」のメトニミー表現である。

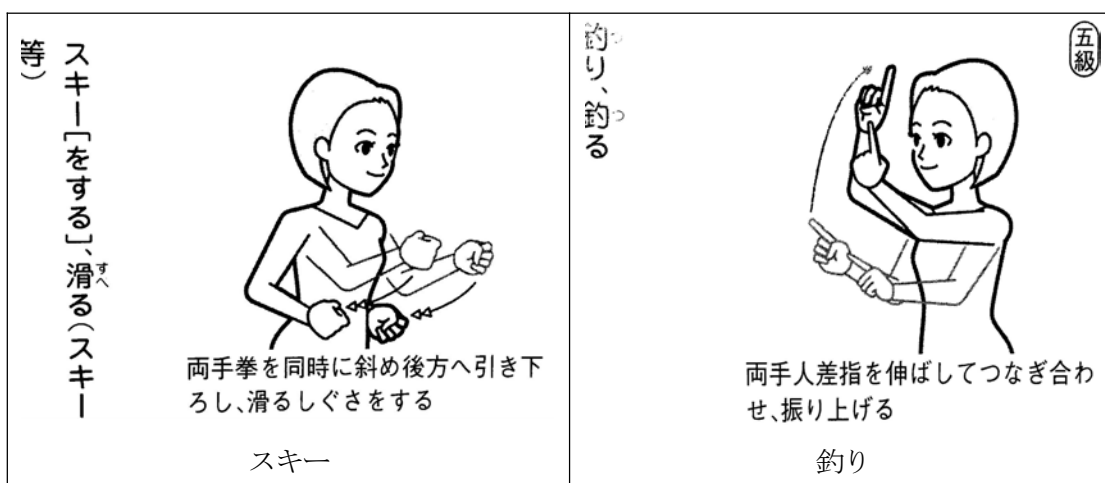


図3-13 < ii. 動作をまねる >

また、掌に関わる「起点—経路—終点」、「容器」のイメージスキーマが見られる。これらのイメージスキーマによって、方位、時間、内容物の概念領域へ写像することができ、メタファーによる意味拡張が可能となる。この種のイメージスキーマの役割は、手話表現では、図3-13のように明らかである。

<p>等)、究極 まで、最後、終わり、終点(駅)</p>  <p>指先を前に向けた左手掌に右手の指先を直角にあてる</p> <p>途中</p> <p>(五級)</p>	<p>途中、中途、挫折、挫折「す る」、諦める(途中で等)</p>  <p>指先を前にした左手掌に右手指先を近づけ、途中で指先を下に下ろす</p> <p>最後</p> <p>(二級)</p>
<p>内、内側、内部</p>  <p>胸前の空間を左手で仕切った内側を右手人差指で指差す</p> <p>内側</p> <p>(五級)</p>	<p>内容、中身</p>  <p>胸前の空間を左手で仕切った内側で下に向けた右手人差指を回す</p> <p>内容</p> <p>(二級)</p>

図3-14 <iii.掌：境界>

さらに、日本手話の「手」に関する意味拡張は、手より、むしろ掌、指、腕で表現される。手と掌、指の関係には、部分と全体の近接関係が存在する。手と腕には、位置の隣接関係があり、メトニミーによる意味拡張が可能となる。

例えば日本手話では、右手の親指を男、小指を女で意味する。これは、メトニミーに基づくメタファー表現であると考えられる。また、腕を技術、時間を示す。腕と手は、位置の隣接関係があるので、メトニミーによる表現である。腕時計をつける位置は時間と関わっている。この場合には、位置の近接関係により時間領域への写像も成り立つので、メタファーとメトニミーが関わっていると考えられる。




<p>男、男の人、彼、雄、人 性別がわからない時や一般的な「人」の意味でも使われる表現</p>  <p>右手の親指を立て、胸前に置く</p> <p>男</p>	<p>女、婦人、彼女、雌</p>  <p>右手の立てた小指を胸前へ置く</p> <p>女</p>
<p>技術、技法 右手が二本指になることもある表現</p>  <p>左腕を右手人差指で2回たたく</p> <p>技術</p>	<p>時 (五級)</p>  <p>左手首(腕時計の位置)を右手人差指で指差す</p> <p>時</p>

図3-15 < iv. 指・v. 腕 >

3.2.2 中国語と中国手話の場合

中国の辞典『現代汉语大词典』によると、手是指人体上肢腕以下持物的部分，也指动物前肢或动物前部伸出的感触器官（手は人体の上肢腕以下、物を持つ部分。動物の前足や前部を伸ばした感触器官である）と説明されている。日本語の「手」の意味も、ほぼ同じである。

中国語の「手」に関する意味拡張は以下のように分類されている。

A：形態的な特徴が似ている

①代替手工的器械（手の代わりに使う機械）：把手（取っ手）

B：機能

②能力：眼高手低（求めるレベルは高いが、実際の能力は低い）、心灵手巧（頭の反応がはやく、手先も器用である）

- ③手段、方法：束手无策（為す術もない）、心狠手辣（心が残忍で手口が悪辣である）
- ④自由：放开手脚（制限から自由にする）、束手束脚（用心しすぎるため、思い切った行動できない）
- ⑤参加する：袖手旁观（手をこまねいて傍観する）
- ⑥経済状況：大手大脚（金遣いが荒い人を指す）
- ⑦位置、方向：手边（手元）、西手（西側）

C：機能の派生

- ⑧人（ある種の技術を持っている人）：一把手（やり手）、扒手（すり）

①は、手の位置の特徴に類似するものである。②③④⑤⑥は、「主体—機能」のメトニミーと考えられるが、②④⑤⑥は、手の機能によるメタファーと考えることもできる。⑦は、空間的隣接関係に基づいたメトニミー表現である。⑧は、部分と全体に基づいたメトニミー表現である。

中国手話の「手」に関する意味拡張は、手で「技術」を示す。手自体のメトニミーである。手話の「手」の意味拡張の特徴は、主に手の外部特徴、動き、機能、位置、及び外部世界との関係に基づく意味拡張である。しかし、手話の例から見れば、手より、掌、指、腕の表現の意味拡張が多い。特に、指に関する意味拡張が多い。例えば、中国手話の手に関するメタファー表現は、指の区別によって男、女（親指は男性、小指は女性）、優劣（親指はよいを示す、小指はよくない意味を示す）、地位（親指はリーダー、尊敬する対象を示す；小指は学生を示す）、序列（親指から小指まで順序を示す）、時間（まず、次、最後は親指、人差し指、小指をそれぞれ意味する）、などの意味を表す。指と手は、部分と全体の隣接関係があるので、メトニミーに基づくメタファー表現と考えられる。

中国手話では、手の機能に関する手話表現は以下のようにまとめられる。

表 3-8 中国手話：手の機能に関する手話表現

i.形をつくる	モノへの写像： 家、飞机、月亮、など
ii.動作をまね る	物事、行為への写像： 饺子、帽子、订书机、编、摘、抗议、帮助など
iii.掌：境界	容器のスキーマ： 内-外： 内、外； 容器-中身： 内容
iv.指	男/女、好/坏、地位（师傅/学生）、时间（春/夏/秋/冬； 初期/结尾）、 顺序（步骤、依次）など
v.腕	分钟、小时

以下では、表 3-8 を示している例を挙げる。

(i) 手で形をつくる：手話の「家」、「月亮」は、家の屋根と月の満ち欠けのイメージを選択し、そして抽出したイメージで形をつくる。このようなイメージ操作の認知プロセスによって、家と月の手話語彙が形成される。屋根と家は部分と全体の関係であるので、メトニミーによる表現である。満ち欠けの月は月の一時の形なので、ここには時間的な隣接関係が関係するメトニミー表現と考えられる。

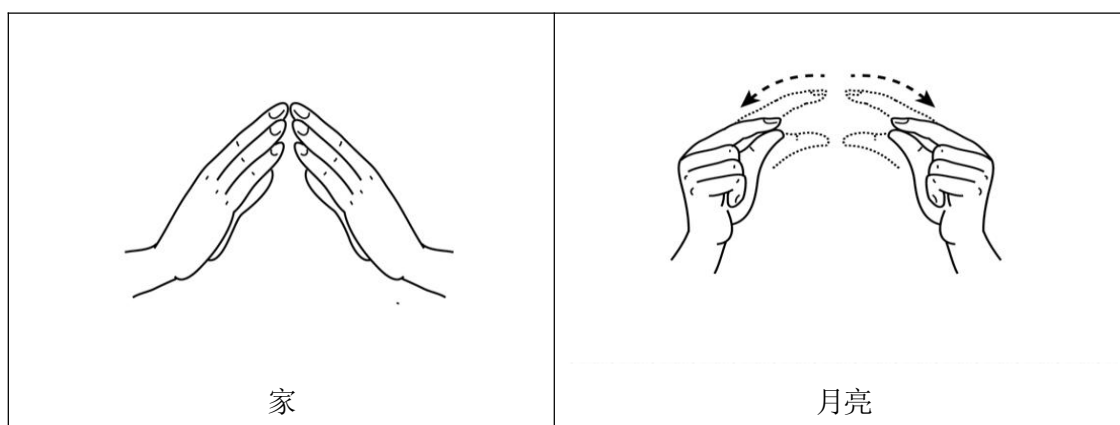


図 3-16 < i.形をつくる >

(ii) 動作をまねる：餃子を包む動作で餃子を指す。この場合は、抗議するとき伴う動作で抗議の行為や事件を示すメトニミー表現と考えられる。

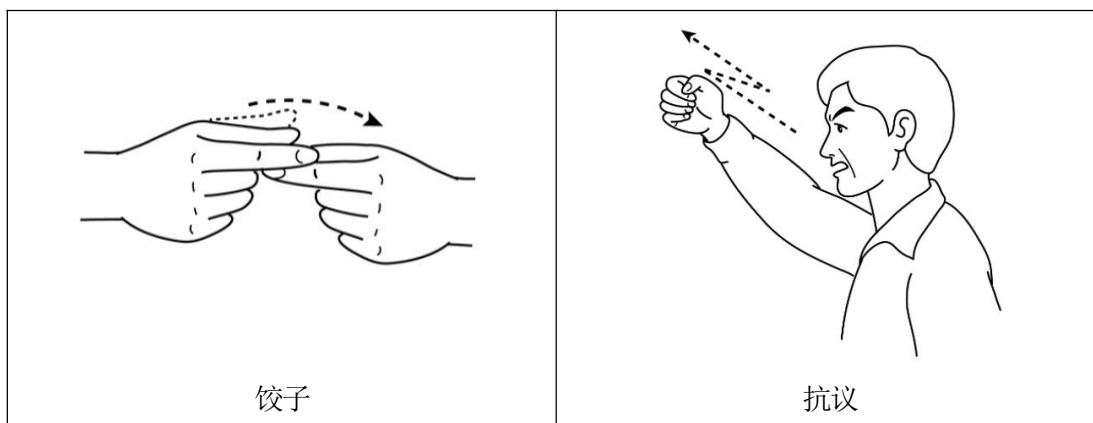


図3-17 < ii.動作をまねる >

「(i) 手で形をつくる」と「(ii) 動作をまねる」の機能によるメトニミー表現は、手話の語彙構成において普遍的な現象である。また、(iii) 掌を境界とする容器のイメージスキーマも存在する。このイメージスキーマによって、方位と内容物の概念領域への写像によるメタファーによる意味拡張が可能となる。

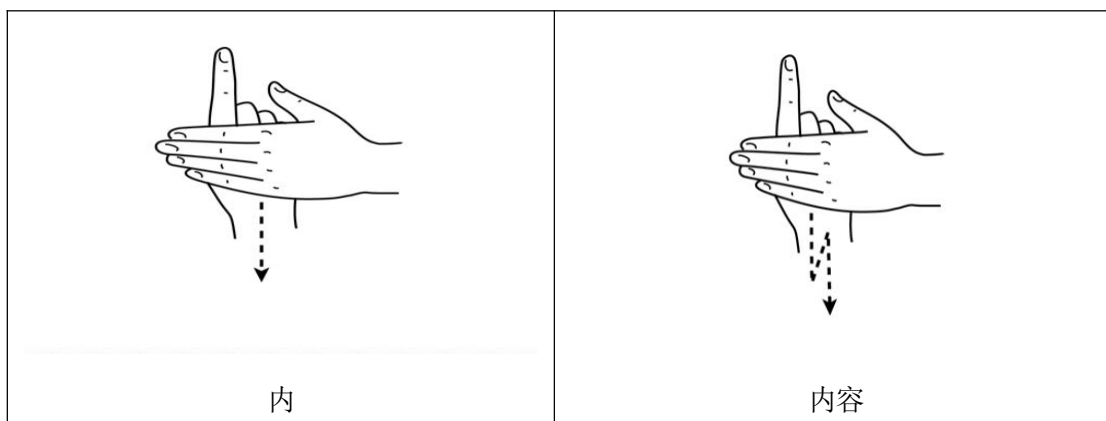


図3-18 < iii. 掌：境界 >

(iv) 指の機能に関しては、貴妃と終始の二つの例が挙げられる。地位と時間の概念への写像はメタファーによる意味拡張である。

貴妃（皇后に次ぐ位）は、左手の親指と人差し指で丸を作り、右手の人差し指を丸に基づき図3-19のように描き、漢字の貴妃の貴の上部を写像する。そして、左手の親指と右手の小指を立たせ、お辞儀のように左手の親指に向かって曲げる。中国手話の「妾」は下線のように表現する。下線の部分は「妃」を意味する。この手話では、親指を男性、小指を女性として表現する。中国の古代の時代では、妾の地位が低いので小指で表す。

始終（終始）は、左手の親指と小指を立てて、右手の人差し指で左手の親指から小指まで弧を描く。（この場合、最初から最後まで時間の終始を意味する。）

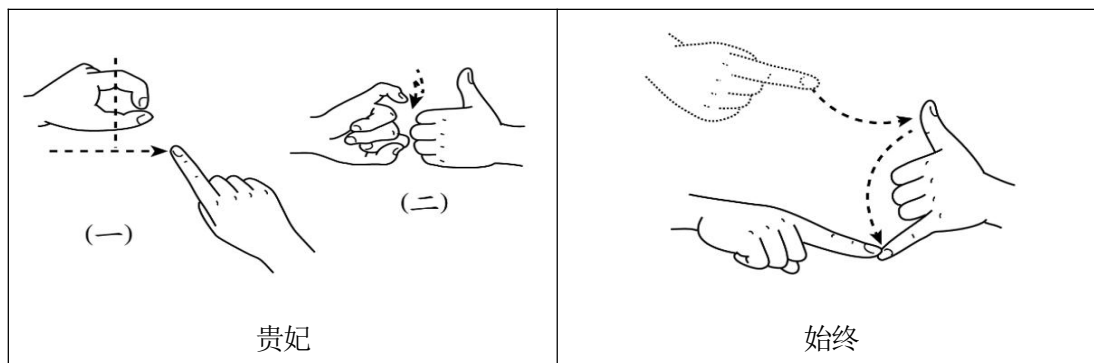


図3-19 <iv.指>

最後に、中国手話では、手に近い腕で時間を指すことができる。腕時計をつける位置は時間と関わっている。位置の近接性と時間領域への写像は、メタファーとメトニミーの両方が関わっている。

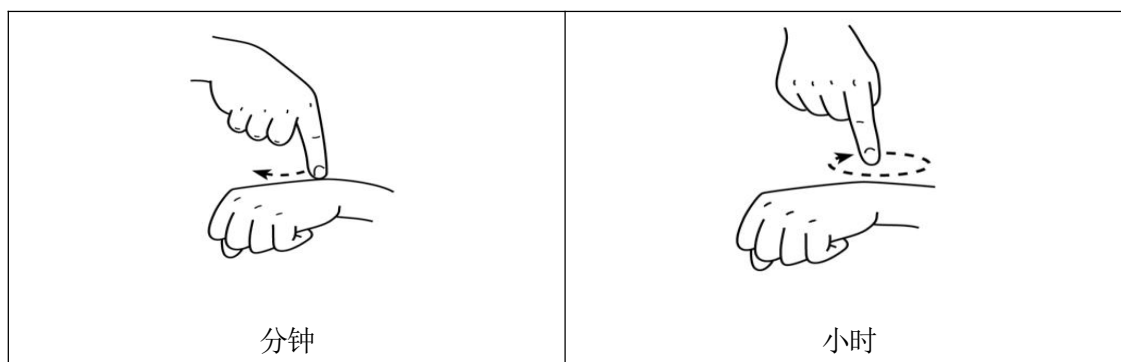


図3-20 <v.腕>

3.2.3 比較とまとめ

表3-6の比較から、手話の「手」に関する意味拡張の仕方は、音声言語とかなり異なっていることが明らかになる。日本手話と中国手話の「手」に関するメタファー表現は、主に手の外部特徴、動き、機能、位置、及び外部世界との関係に基づくメタファー表現である。この種の表現は、手の機能によるメタファーと考えられる。また、掌を境界とする容器のイメージスキーマによるメタファー表現は日中手話で共通しているが、日本手話の「起点—経路—終点」のイメージスキーマによるメタファー表現は、中国手話の中には存在しな

い。手の指に関する意味拡張は、日本手話より中国手話に多く見られる。日本手話は指で男、女を示す。中国手話では、指の区別により優劣、地位、順序、時間への概念拡張が可能でなる。腕の表現は、中国手話の場合には時間の意味しかないが、日本手話の場合には、技術も腕で表現する。以上の掌、指、腕のいずれも手との隣接関係が認められるので、メトニミー表現の一種と考えられる。

3.3 「足」に関する意味拡張

身体部位に関する意味拡張の続きとしての「足」に関する手話表現は、以下のようにまとめられる。

表 3-9 「足」に関する意味拡張

言語	日本語	日本手話	中国語	中国手話
語形	足	下に向けた 左指を右手 人差し指で 指差す	足/脚	「6」の指文字の 小指を 右手人差し 指で指差す
1 形が似ている	かんざしの足	/	動物の足: 亀足, 蟹足	/
2 形態的な特徴が似ている	物の下の部分: 山の足、ストーブの足	/	物の下の部分: 床脚(床の足), 山脚(山の足), 脚注(ページ の下に付けた注)	露马脚(馬脚 を現す)
3 機能	足を踏み入れる、 足がはやい	支える 移動する	轻足(歩くスピードが速い 人)、健足(歩くのが得意人)	支える 移動する
4 機能の派生	交通手段: 通勤 の足	ボランティア、 病気、 ためらう	亲如手足(兄弟のように親 しい)、泥足巨人(見かけ だおし)、补足(補足す る)、捷足先登(先に到着 する)、开脚(はじめ)、插足(足 を踏み入れる)	弱(弱い) 猶豫(ためら う)

3.3.1 日本語と日本手話の場合

日本語と日本手話の「足・脚」は、動物の胴に付き、歩行や体を支える部分。特に足首から先の部分を指すが、日本では、以下の図 3-21 の意味拡張が一般的である。



図 3-21 日本語の「足」

日本語の「足」に関する意味拡張は、以下の通りである。

- ①足の形に似た物：かんざしの足
- ②足の形態的な特徴に似ている：(物の下の部分)：山の足 ストーブの足
- ③機能（歩くこと、支える）：足を踏み入れる、足が速い
- ④機能の派生（交通手段）：ストライキで足が奪われる、通勤の足

①のかんざしの足は、日本語の「足」が形に似ているメタファーによる意味拡張である。②の二つの例は、物の下の部分の位置が足の基本義の胴体の下の部分に類似している。また、支える機能も果たしている。この事例は、メトニミーが関わるメタファー的な拡張である。③は、身体的行為の領域から物事との関与の領域へのメタファーによる意味拡張である。「足を踏み入れる」は「ある世界・分野に関与する」ことを表す。「足がはやい」は「物に関与する」ことを表すメタファーによる意味拡張と考えられる。④は、足の基本的な機能（「歩くこと」）によるメタファー表現である。



図 3-22 日本手話の「足」

日本手話の「足」に関する意味拡張は、以下にまとめられる。

- A: 機能 (歩くこと、支える): 散歩する、歩く、乗る、降りる、踊る、滑る、正座する、
倒れる①、サッカーする
- B: 機能の派生: ボランティア、病気、躊躇う

日本手話では、体の「足」を2指で示して、「散歩する、歩く、踊る、滑る、正座する、倒れる①、サッカーする」の動作を表現する(足の基本的な機能)。この場合は、「主体—機能」の関係によるメトニミー的拡張と考えられる。そして、足を通して拡張する意味は「倒れる②」、「ボランティア」の二つの表現がある。「ボランティア」は、足の人へ写像する。この場合には、類像性に基づくメトニミー表現が可能となる。「倒れる②」は、病気で人が倒れる様子を表現する。この場合には、病気と倒れるの間に、因果関係のメトニミーが成り立つと考えられる。

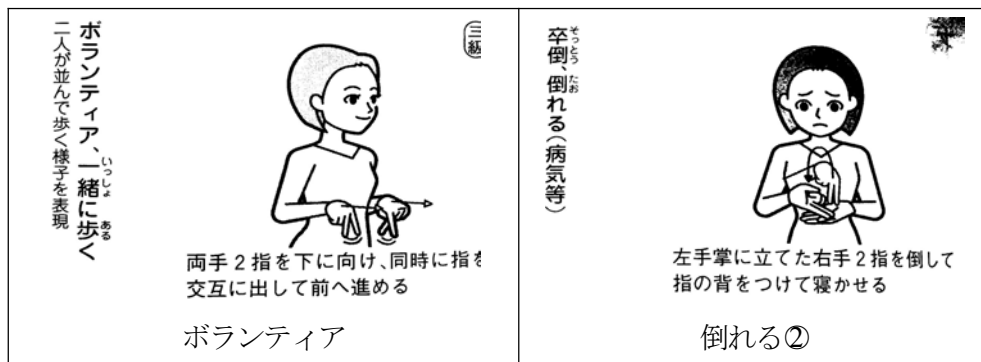


図 3-23 「ボランティア・倒れる②」

手話の「躊躇う」は、人が躊躇うとき、足踏みをして足が前へ出ない様子を指で示す。困っている顔の表情に伴い、足の動作行為を「迷う・揺れる気持ち」へ写像する。この種の類像性の写像は、メタファーによる意味拡張と考えられる。



図 3-24 「躊躇う」

3.3.2 中国語と中国手話の場合

『現代汉语大词典』によると、中国語の「脚」の基本義は「人与动物腿的下端，接触地面，支持身体和行走的部分（人と動物の下半身の下、地面と接触する、体と歩くことを支える部分）」である。中国では、以下のような身体部位の関係が考えられる。

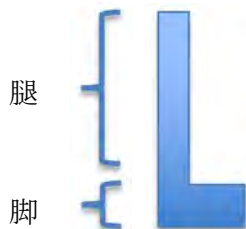


図 3-25 中国語の「足」

中国語の足の語義は、以下のように展開していく。

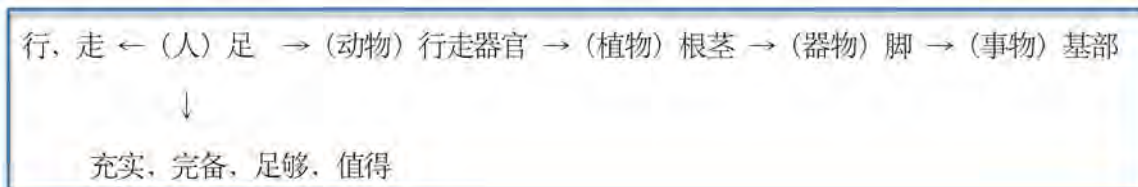


図 3-26 (関 2011: 10)

中国語の「足」の拡張としては、人の足の部分→動物、植物、器物の下の部分→物事の土台の部分の関係が存在する。人の足の器官として動くという特徴には、踏む、歩くという機能が認められる。

さらに、中国語の「脚」のメタファーによる意味拡張は、「歩く、踏むなど、動作の機能」と「位置、支える機能」の二つの機能から「範囲、描写、感情、特徴、程度」の抽象的な領域への写像ができる、という事実が指摘されている（張・卢 2013）。

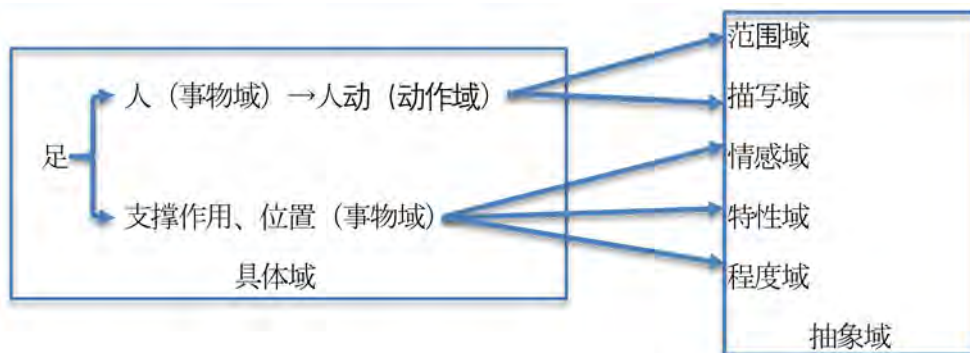


図 3-27 (張・卢 2013: 3)

中国語の「脚・足」に関する意味拡張は以下のとおりである。

①足の形に似た物：亀足、螯足

②足の形態的な特徴に似ている：(物の下の部分、支える機能)：床脚、山脚

③機能(歩くこと)：軽足、健足、

④機能の派生：②→亲如手足(兄弟のように親しい)、泥足巨人(見かけ倒し)、补足(補充する)

③→捷足先登(先に到着)、开脚(はじめ)、插足(足を踏み入れる)

中国語の「脚・足」に関する意味拡張は、主にメタファーの意味拡張である。①は、足の形に似た物や動物の足と類似しているメタファーによる意味拡張である。②の「床脚、山脚」は、足の形態的な特徴、身体の下部分を物の下の部分へ写像するメタファーによる意味拡張である。足には体を支える機能があるので、足の認知領域とする「全体一部分」の関係が見られるメトニミー的拡張と考えられる。この事例の場合には、メタファーとメトニミーの認知プロセスが関わっている。③の「軽足」は、歩くスピードが速い人を指す。「健足」は、歩くのが得意人を指す。「足一人」は「部分—全体」の関係であるので、「足」の機能によるメトニミーの意味拡張である。④「支える機能」の派生としては、「亲如手足(兄弟のように親しい)、泥足巨人(見かけ倒し)、补足(補充する)」の例がある。この三つの例は、感情、特徴、程度概念へ拡張していくメタファーによる意味拡張と考えられる。また、「歩く、踏む」のような「動作の機能」の派生とする「捷足先登(先に到着)」の例は、速いスピードで先に到達することを意味する人の動作が機敏であることを示す。「开脚(はじめ)」は、「足の動き、踏み出す」で「物事のはじめ」を意味するメタファーによる意味拡張である。また、「插足(足を踏み入れる)」は、身体的行為の領域から物事との関与の領域へのメタファーによる意味拡張であり、「ある世界・分野に関与すること」を意味する。

しかし、中国手話では、中国語の足のような意味拡張は存在しない。

日本の「足」に対して、中国手話の足の場合には、以下のような三つの表現が可能である。



図3-28 中国手話の足

中国手話の「足」に関する意味拡張は以下のようにまとめられる。

①足の形に似た物：/

②足の形態的な特徴に似ている：(物の下の部分、支える機能)：露马脚（馬脚を現す）、
三脚架、三足鼎立

③機能（動作、支える）： 踩、迈、踮、跌倒、翻越、蹲、立、散步

④機能の派生： 弱、犹豫

中国手話では、「足」の表現は、主に足の基本的な機能を表現している。例えば「踩、迈、踮、跌倒、翻越、蹲、立、散步」の例では、動作は異なる手の形で表現するが、「主体—機能」の関係によるメトニミ的拡張と考えられる。脚①の表現は、中国語の「脚」の定義に基づいたもので、地面と接触する部分に焦点を当てている。脚②の表現は、親指を頭、小指を足のように写像する点が注目される。また、「腿」の表現には、支える機能が見られるが、中国語では、「脚」と「腿」を分けて考える場合が多い。

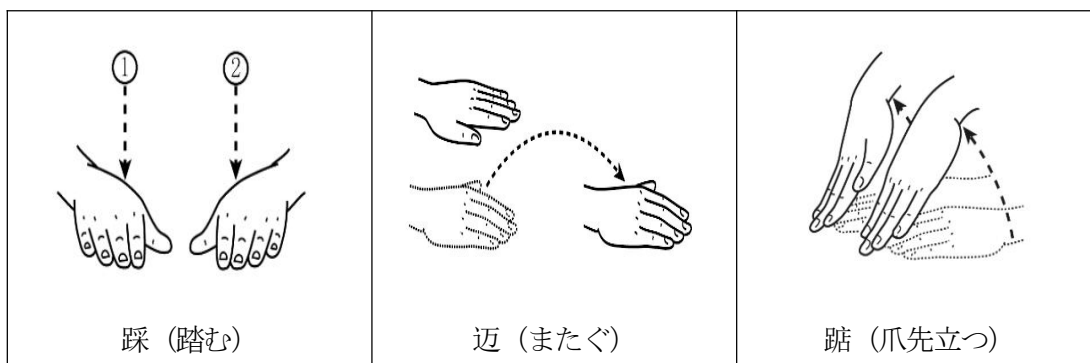


図3-29 「脚①」による動作

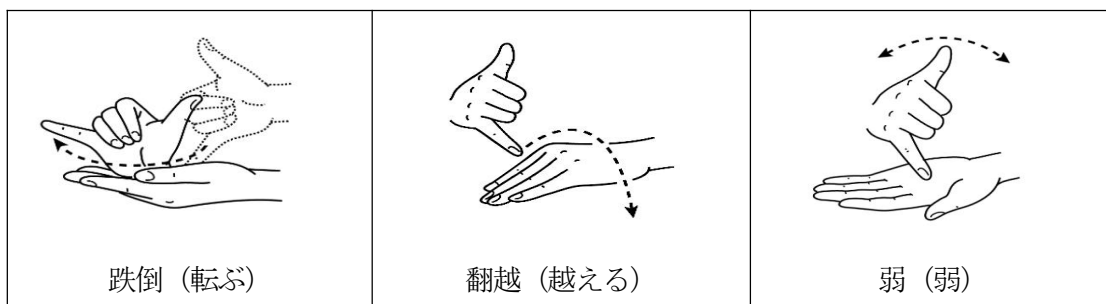


図 3-30 「脚②」による動作

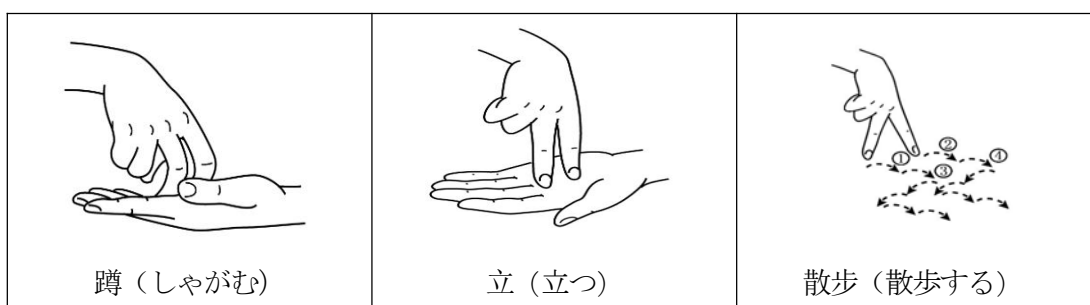


図 3-31 「腿」による動作

②足の形態的な特徴に似ている手話の例「露马脚 (馬脚を現す)」は、左手の下に隠されている右手を拳になり人差し指を出す。この表現は、体の隠している部分が現れることを意味し、一般的に悪いことを意味するメタファーによる意味拡張である。「三脚架 (三脚)」は、身体部位の足を物の足へ写像する、位置の類似と支える機能に基づくメタファー表現と考えられる。「三足鼎立」は、鼎は三本足で立っていることから、三つの勢力が並び立つことを意味するメタファー表現である。

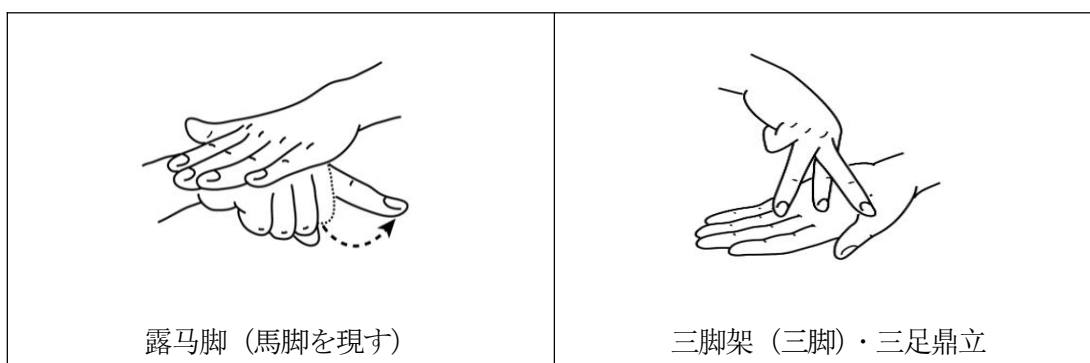


図 3-32 「露马脚・三脚架」

足の機能による派生的表現としては、「弱（弱い）」(図 3-30・弱)と「猶豫（ためらう）」(図 3-33)の表現が存在する。手話の「弱（弱い）」は、身体の揺れる状態で抽象的概念の弱い状態を写像するメタファーによる意味拡張と考えられる。猶豫（ためらう）」は、思考の表情に伴い、ためらうときの揺れる状態を手で表現する。この場合には、物理的に揺れる状態から、感情の迷う状態へ写像するメタファー表現である。

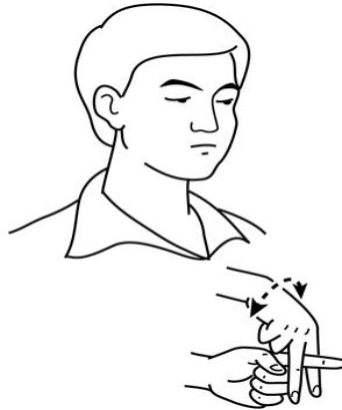


図 3-33 「猶豫（ためらう）」

3.3.3 比較とまとめ

本節では、「足」に関する意味拡張を、日本語と中国語を手話の比較対照として考察した。「足」の意味に関しては、日本と中国の手話における「足」の表現が異なる。また、音声言語に対して、手話では、主に「足」の機能による意味拡張が可能である。日中手話の「足」に関する意味拡張に関しては、抽象的な概念への写像は少ないが、両者において精神状態や感情への拡張は類似している。

3.4 「口」に関する意味拡張

本章の最後に取り上げる身体部位の「口」の手話に関する意味拡張は、以下の表にまとめられる

表 3-10 「口」に関する意味拡張

言語	日本語	日本手話	中国語	中国手話
語形	口	右手人差し指で口に沿って円を描く	口	右手人差し指で口に沿って円を描き、口を開ける
1 形が似ている	/	/	/	/
2 形態的な特徴が似ている	傷口、瓶の口、登山口、	出口、入り口、非常口	口子 (裂け目)、瓶口 (瓶の口)、入口 (入り口)、口岸 (港)	出口 (出口)、入口 (入り口)
3 機能	話す：口が悪い 食べる：口に合う	話す、黙る、食べる、味わう	話す (言葉) : 開口、夸海口 食べる：口味 (味)	说 (言う) 吃 (食べる) 品尝 (味わう)
4 機能の派生	量：人口、口を減らす *評判：口が煩い *嗜好：行ける口	感情：欲しい、恥ずかしい 味覚：甘い、など 顔色：赤、白	量：三口人 (三人の家族) *刀口 (刀の刃) *寸口 (手首の脈) *馬の年齢	感情：貪婪 (貪欲な)、羨慕 (羨ましい) 味覚：苦 (苦い)、辣 (辛い) 顔色：红 (赤)、白 (白)

3.4.1 日本語と日本手話の場合

『大辞林 第三版』によると、「口」の基本義としては、動物が飲食物を取り入れる器官を意味する。この器官は、高等動物では頭部の下方にあり、唇・歯・舌があり、下あごによって開閉し、音声や鳴き声を発する器官ともなり、鳥類では嘴となる。

以下では、「口」の基本義に基づき、「口」に関する意味拡張を次のように分類して考察していく。

A. 形態的な特徴に似ている

①通り抜けることができる空間： i. 傷口、ii. 瓶の口、iii. 登山口、

↓

消化器官のはじめであるから物事のはじめへ：序の口、就職口、宵の口、

B. 機能

②話すこと：口が悪い

③飲食すること：口に合う

C. 機能の派生：

②→評判：口が煩い、世の口を気になる

③→量：口を減らす

日本語の「口」に関するメタファーとメトニミーによる意味拡張は非常に豊富である。まず、形態的な特徴に似ている類似性に基づく意味拡張としては①の例が挙げられる。傷口は、「穴や隙間の形」と「顔にある穴状の隙間という口」が類似している。「物の出し入れ口」(瓶の口)と「人の出入りするところ」(登山口)は、口の形態的な特徴(「体内に入る場所の位置」)が類似している。また、消化器官のはじめであることから物事(序の口、就職口)や時間(宵の口)への写像となるメタファーによる意味拡張と考えられる。また、「話すこと」と「飲食すること」は、口の二つ機能に関わる表現である。「口が悪い」の言葉遣いは「口」という道具で話し方を表すメトニミー表現である。「口に合う」は、食べ物の嗜好性は、食べる道具である口で食べた結果として食物に対する嗜好を表すメトニミー表現である。さらに、「口が煩い」、「世の口を気になる」の例の場合には、「口→評判」は、「手段→目的」のメトニミーによる意味拡張と考えられる。「口を減らす」は、口を通して飲食し、その飲食を必要とする人数を意味するメトニミーによる意味拡張である。この種

の事例では、量的概念への写像も関係しているので、ここにはメタファーの認知プロセスも認められる。

これに対し、日本手話の場合には、口に関する意味拡張として「出口」、「入り口」、「非常口」の表現があるが、主にメトニミーによる意味拡張と考えられる。

日本手話の「出口」、「入り口」、「非常口」は、下の図3-34に示される。この種の事例の意味拡張は、「身体部位の口」で「ある場所の出入りところ」を意味するメタファーによる意味拡張である。

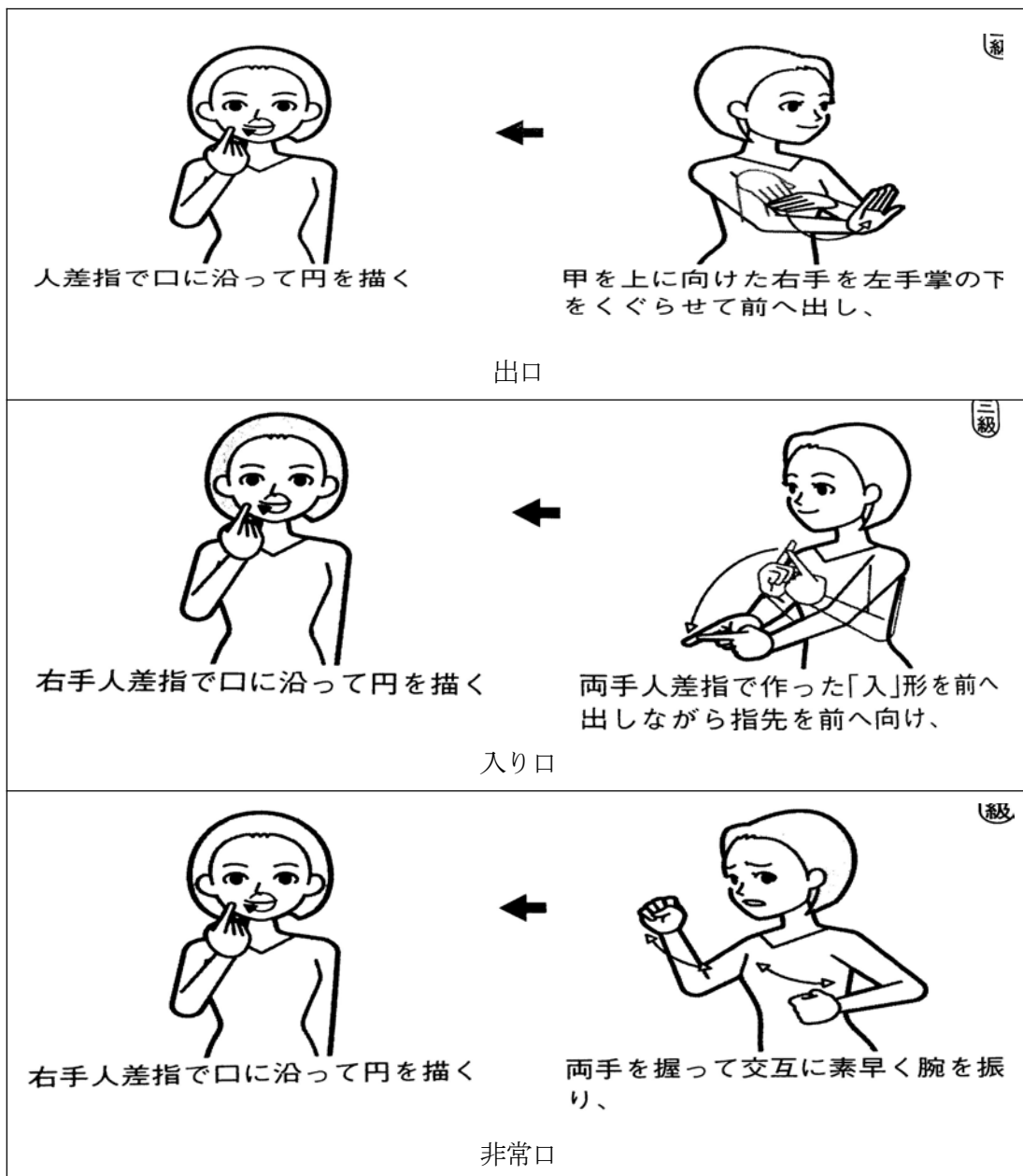


図3-34 「出口・入り口・非常口」

なお、日本手話の「口」に関する表現は、以下のようにまとめられる。

表 3-11 日本手話の「口」に関する意味拡張

メ ト ニ ミ ー	手段—目的	話すこと	話す、命令する、述べる、黙る→静かにする→秘密、
		飲食する こと	食べる→ご飯、飲む→スープ、
			味わう→体験する、味覚（甘い、しょっぱい、辛い、 苦い、酸っぱい）
	全体—部分	唇	赤い→恥ずかしい、紫色（赤+「ム」の指文字）
		歯	白い→塩
		喉	欲しい、好き、のぞみ、嗜好
		よだれ	欲しい
		舌	味覚

日本手話では、「口」に関する意味は「主体—機能」、「全体—部分」のメトニミーによって拡張していく。「口」の機能としては、「話すこと」と「飲食すること」の二つの基本的な機能が考えられる。ここには、メトニミーによる意味拡張が関わっている。「話すこと」に関しては、「口を開ける」と「口を閉じる」二つの状態によって、「声を出す」の「話す」と「声を出さない」の「黙る」の意味が存在する。日本手話の「黙る」は、「静かにする」、「秘密」の意味にも使われる。



図 3-35 「言う・黙る」

「飲食する」行為は、「食べる」、「味わう」の意味を拡張していくことができる。ここで特に興味深いのは、手話の味覚の表現である。一般に「甘い、しょっぱい、辛い、苦い、酸っぱい」食べ物を食べる時、異なる生理現象が生じる。例えば、甘い物を食べると口元で微笑む顔、しょっぱい物を食べると口を窄めて、目を細めてしょぼしょぼとする顔をするなど、手話の味覚表現は、「口+刺激を受ける顔の生理的現象」で表現する。この場合には、「原因—結果」のメトニミーの機能が関係している。

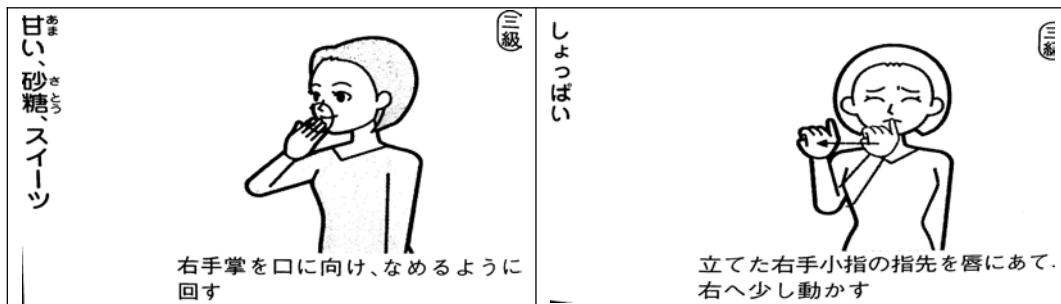


図3-36 「甘い・しょっぱい」

さらに、「口」は、この器官と近接関係がある「唇」、「歯」による概念とつながる。例えば、歯磨きにおける「歯」と「塩」の関係は、塩が日本の昔の生活で歯磨き剤として使われたため、両者がメトニミーの連想関係になる。(したがって、例えば、口に塩をつけている動作で、歯磨きの行為を意味することも可能である。) もう一つの「口」に関する意味拡張は「欲しい」の意味である。日本手話の「欲しい」は、「喉」と「よだれ」と関わっており、「食べる意欲」を「欲しい、好き、嗜好」へメトニミー的に拡張する。また、「食べたくてよだれを垂らす」という表現で「手に入りたいと熱望する」ことを指すことも可能である。この種の事例には、メトニミー的意味拡張が認められる。



図3-37 「赤・恥ずかしい」



図3-38 「白・塩」



図3-39 「欲しい」

3.4.2 中国語と中国手話の場合

中国の辞典『現代汉语大辞典』は、「口」の基本義について、「人类用来发声和进饮食的器官（人間が声を発する、飲食をする器官）」と定義している。

以下では、中国語の「口」の基本義に基づき、「口」に関する意味拡張を次のように分類して考察していく。

A. 形態的な特徴に似ている

①通り抜けることができる空間：

i. 口子（裂け目）、ii. 瓶口（瓶の口）、iii. 口岸（港）、

↓

消化器官のはじめから物のはじめへ：袖口（袖口）

B. 機能

②話すこと：改口（話が変わること、呼称を変えること）、口信（メッセージ）

③飲食すること：口味（味）

C. 機能の派生

③→計口售粮（人の数を計算して穀物を売ること）、三口人（三人の家族）

中国語の「口」の形態的な類似性に基づく意味拡張としては①の例が挙げられる。口子（裂け目）は、「穴や隙間の形」と「顔にある穴状の隙間という口」が類似している。「物の出し入れ口」（瓶口（瓶の口））と「人の出入りするところ」（口岸（港））は、口の形態的な特徴「体内に入る場所の位置」が類似している。また、「袖口（袖口）」は、消化器官のはじめであることから物のはじめへ、位置の類似に基づくメタファーと考えられる。そして、「話すこと」と「飲食すること」は、口の二つ機能として、「手段—目的」のメトニミー表現と考えられる。「改口（話が変わること、呼称を変えること）」、「口信（メッセージ）」は、「口」を手段で話し方とメッセージを伝える目的という「手段—目的」のプロセスを表すメトニミー表現である。「口味（味）」は、食べる道具である口で食べた結果として食物に対する嗜好を表すメトニミー表現である。さらに、「計口售粮(人の数を計算して穀物を売ること)」、「三口人（三人の家族）」は、メタファーによる量的概念へ写像を示す表現である。また、中国語の中に、「刀口（刀の刃）」、「寸口（手首の脈所）」、「口小（馬の年齢）」の意味拡張も存在する。

中国手話の場合、「口」に関する意味拡張は、以下のように整理される。

表 3-12 中国手話の「口」に関する意味拡張

メ ト ニ ミ ー	手段—目的	話すこと	说（言う）、发言（発言する）、命令（命令する）、 と 沉默（黙る）→秘密（秘密）、など
		飲食すること	吃（食べる）→米饭（ご飯）、喝（飲む）→水、 消遣（暇をつぶす）
	品尝（味わう）→体验、经历（体験する）、 味覚: 苦（苦い）、辣（辛い）、咸（しょっぱい）→盐（塩）		
	全体—部分	唇	红色（赤、「H」の指文字）、紫色（赤+「ZH」の指文字） 顔色（色）、
		歯	白色（白い）
		よだれ	馋（口が卑しい）→羡慕（羨ましい）、贪婪（貪欲な）
		舌	味覚

中国手話では、「口」に関する意味は日本手話と同じように、「手段一目的」、「全体一部分」のメトニミーの認知プロセスによって拡張していく。「口」の意味としては、「話すこと」と「飲食すること」の二つの基本的な機能によるメトニミーによる意味拡張と考えられる。「说（言う）」、「沉默（黙る）」は、「口を開く」と「口を閉じる」で表現する。中国手話の「黙る」と「秘密」は同じ手話で表現してないが、類似している手話で「口を閉じる」を意味する。



図3-40 「说・沉默・秘密」

「口」で「食べる」、「飲む」、「品尝（味わう）」ことができるので、「手段一目的」のメトニミー表現も可能である。また、「经历（体験する）」、味覚の「苦（苦い）」、「辣（辛い）」の意味拡張はメタファー表現と考えられる。「消遣（暇をつぶす）」は、ゆうゆうと食事後の爪楊枝を使うこと満腹のさまを写像して表現する類像性に基づくメタファー表現である。



図3-41 「经历・苦・消遣」

「口一唇」、「口一齒」、「口一よだれ」は、全体と部分、空間の近接性の関係にあり、顔色と感情への写像が可能である。この場合には、メトニミーに基づくメタファーの認知プ

ロセスが認められる。なお、手話の「白」は、手の形で歯を写像して表現する（図3-43）。
 「咸（しょっぱい）」から「塩」への拡張は、塩の性質より、調味料と使う時の動作で表現するメトニミー表現である。

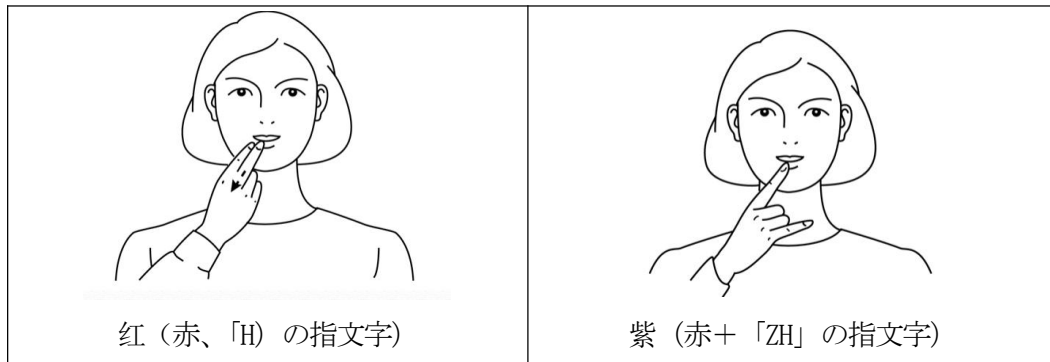


図3-42 「紅・紫」(唇)

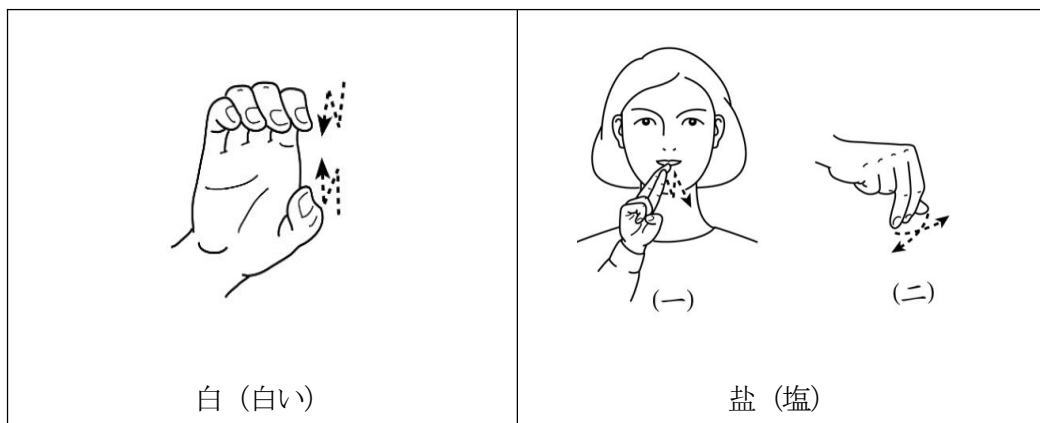


図3-43 「白・盐」(齒)

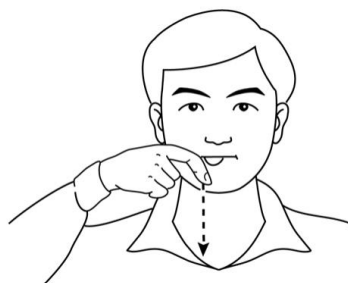


図3-44 「饑（口が卑しい）・羨慕（羨ましい）」(よだれ)

3.4.3 比較とまとめ

中国語と日本語の「口」の基本義はほぼ同じである。ただし、中国語の辞典には、「人間の～器官」という定義があり、動物の発音器官と飲食器官の意味も含んでいる。また、基本義、話すこと、食べること、味わうこと、人口、出入り口、容器の出し入れ口、物事のはじめの部分、傷口の意味は、日中両言語に共通している。就職口、評判の意味は、日本語しかない派生的な意味である。刀口（刀の刃）寸口（手首の脈所）の意味は、中国語に認められる意味であり、日本語には認められない。

手話の「口」に関する意味表現の場合、話すこと、食べること、色、味わう、味覚、感情への意味拡張は、日本と中国の手話はほぼ同じである。日本と中国の手話では、唇によって赤、紫を意味する場合には指文字を使う。手話では、「口」と「食べる」、「話す」、「味わう」の意味は異なる手話で表現するが、身体部位の「口」を中心として意味を伝え、類似している手話で表現し、そこには口と話す、口と味わう、手段と目的の隣接関係が認められる。

3.5 日中手話の身体部位に関する意味拡張の比較

本節では、音声言語と手話の身体部位の「頭」、「手」、「足」、「口」の意味拡張に関する日中の手話の対照的な考察を行った。以下では、日中の手話の意味拡張の方向とメタファー、メトニミーの認知プロセスを表3-13にまとめて検討していく。

表3-13 日・中手話の身体部位に関する拡張の方向

拡張の方向	頭		手		足		口	
	日本	中国	日本	中国	日本	中国	日本	中国
形が似ている	○	○	×	×	×	×	×	×
形態的特徴	×	○	×	×	×	○	○	○
機能	●	●	●	●	△	△	△	△
機能の派生	●	●	△	△	●	●	●	●

表3-13には、本章で取り上げた身体部位に関する意味拡張の方向と意味拡張の認知プロセスを示している。「×」は意味拡張がないことを示す。それ以外は意味拡張があり、メ

タファーとメトニミーの認知プロセスを区別している。「○」はメタファーによる意味拡張の認知プロセスが存在する。「△」はメトニミーによる意味拡張の認知プロセスが存在する。「◎」は、メトニミーに基づくメタファーの意味拡張の複合の認知プロセスであることを示す。

まず、拡張の方向は表 3-12 を示しているように、主に、機能と機能の派生に拡張していく。形と形態的な特徴が似ている類似に基づくメタファーの写像は存在するが、実際の手話の例は少ない。「形が似ている」という拡張の方向は、日本手話と中国手話の「頭」しかない。「頭」と「足」の「形態的な特徴が似ている」という拡張の方向は日本手話の中に存在しないが、中国手話の中に存在している。中国手話では、指で頭と足への写像があるからである。

また、身体部位としての基本的な機能には、「主体—機能」、「手段—目的」の関係が認められるので、ここにはメトニミーによる意味拡張が存在する。

「頭」の機能と機能の派生は、脳との隣接関係と考えをモノに概念化する表現から拡張していき、メトニミーに基づくメタファーの認知プロセスを可能としている。

また、「手」の機能の意味拡張に関しては、全体と部分の隣接関係を介して拡張していき、メトニミーに基づくメタファーの認知プロセスが可能となっている。「足」の機能の意味拡張は、日中の手話でも「主体—機能」の関係によるメトニミーの意味拡張である。

因果関係に基づき精神状態への拡張には、メトニミーに基づくメタファーの認知プロセスが認められる。さらに、「口」の機能の意味拡張は、「道具—目的」によるメトニミーと考えられる。また、他の概念への拡張は、メトニミーに基づくメタファーと考えられる。以上の考察から、「頭」、「手」、「足」、「口」の身体部位に関する意味拡張は、基本的にメトニミーの認知プロセスが基盤となる事実が明らかになった。

なお、身体部位の「頭」と「口」の意味拡張は、＜容器＞のスキーマが関わっている。この種の拡張は、＜容器＞のスキーマに基づくメタファーの意味拡張である。「頭—考え/気持ち」は「容器—内容物」に概念化され、「出入り口」と「開閉できる」の意味は「容器」と「口」の意味機能に関わっている。この点に関し、山梨 (2000: 146) は、「具象的な意味の世界から抽象的概念への転移のかなりの部分は、イメージスキーマの比喩的な拡張によって可能である」と指摘している。

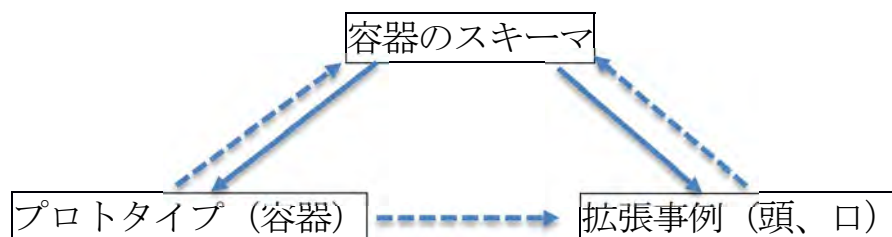


図 3-45

以上、日中の手話における身体部位の「頭」、「手」、「足」、「口」に関する意味拡張が、メタファー、メトニミーの修辞プロセスにより起動される認知のメカニズムの一面を明らかにした。

3.6 手話の身体部位表現の身体性と修辞性

日常言語の概念体系は、人間の身体に関わる様々な経験を反映している。そのかなりの部分は、身体的な経験の修辞的な拡張によって特徴付けられている。伝達の対象となる意味のかなりの部分には、文字通りの言語表現によって直接的に表現することは不可能である。特に、抽象的な概念、知・情・意に関わる主観的な概念の直接的な伝達は不可能である。手話も視覚空間言語であるため、抽象的な概念を直接的に表現することは難しい。

しかし、この種の内容を、我々の身体部位に関わる具体的な経験に基づき、修辞的な表現によって伝えることは可能である。音声言語だけでなく、手話にも、身体部位に基づく言語表現が広範に見られる。例えば、山梨 (1995: 76) は、主観的な意味や抽象的な意味が、身体部位に基づくメタファーとメトニミーによって表現される注目すべき事例を挙げている。その典型例は、表 3-14 に示される。

表 3-14 (山梨 1995: 76)

<身体部位の慣用表現>	
<場所/空間>	河口、登山口、山の背
<部位>	杭の頭を打つ
<方向>	先頭 背後 尻目
<順序関係>	頭から否定する
<態度>	へそ曲がり

<感情>	腹が立つ
<知性>	頭の回転が速い
<知覚機能>	{目/鼻}が利く

表 3-14 では、空間、部位、方向、順序関係、態度、感情などの概念が、身体部位に基づいて比喩的に表現されている。この種の表現には、根源的にメタファーやメトニミーの修辭機能が認められる。

本章で考察した「頭」、「手」、「足」、「口」に関する手話表現の意味拡張にも、この種の修辭的な意味拡張が認められる。手話においても、空間、時間、順序、感情、などの概念が身体部位によって修辭的に表現される。ただし、このような修辭的な表現は、生活の言語文化的な背景がなければ理解できない。例えば、日本手話の歯磨きにおける「歯一塩」の連想は、日本と中国で昔、塩を歯磨きとして使ったことから理解しやすいが、アメリカ手話では通じない。アメリカ手話では、歯から塩（ないしは塩から歯）への連想は難しい。

山梨 (2012) は、身体部位表現の意味拡張の基本的な方向性は図 3-46 に示している。ただし、異なる言語や文化においては、この意味拡張の関係において抽象的な概念が、常に時間の次に位置するとは限らないと述べている。

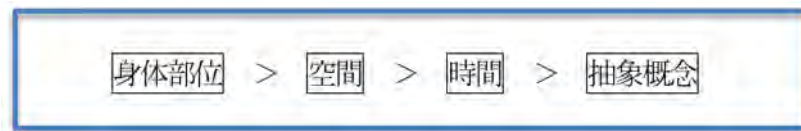


図 3-46 (山梨 2012: 104)

手話では、抽象的な概念への意味拡張（例えば、感情概念への拡張）は、本章の「頭」、「足」、「口」の身体部位からの拡張であるが、この種の拡張は、身体的経験に反映される生理現象や動作行為にも関わっている。本章の考察から明らかなように、手話の身体部位表現の意味拡張は、根源的には記号の身体性と修辭性に根ざしている。日常生活における伝達的手段としての手話の創造性は、この種の記号の身体性と修辭性によって可能となる。

第四章 日中手話の感情表現

4.1 手話の感情表現

人間の感情に関わる感覚は、抽象的で表現しにくい感覚であるが、身体感覚に基づく比喩によって表現することが可能である。視覚空間言語である手話は、抽象的な概念のような非視覚的な概念をどのように表現するのか。一般的には、手話で抽象的な概念を表現する場合、自分自身を原点として外部世界を了解し、既知のことから未知の世界を理解していく。その場合、具体的な対象との間の似ている部分を見つけ関連性を作っていくが、この場合には、特にメタファーとメトニミーが利用される。本章では、手話における感情表現のメタファーやメトニミーの認知プロセスのメカニズムを解明していく。

4.1.1 日中手話の感情表現

まず、川口 (2017) では、日本手話の漫画語源感情表現を表す手話表現は、基本的に以下の四つに分類される。

- 1：身体内の動きによって表す手話単語（楽しい、苦しい、怒る）
- 2：感情が目に見える動作になって表す手話単語（悲しい、びっくり、困る）
- 3：絵本や漫画などの空想的な世界を表す手話単語（やる気まんまん）
- 4：日本語から借用された手話単語（頭にきた）

李・呉 (2013) は、中国手話の 10 のタイプの感情的メタファーを表現する手の形、位置、動きの三つの音系パラメーターを統計的に分析している。この 10 のタイプとその分析要素は、表 4-1 に示される。

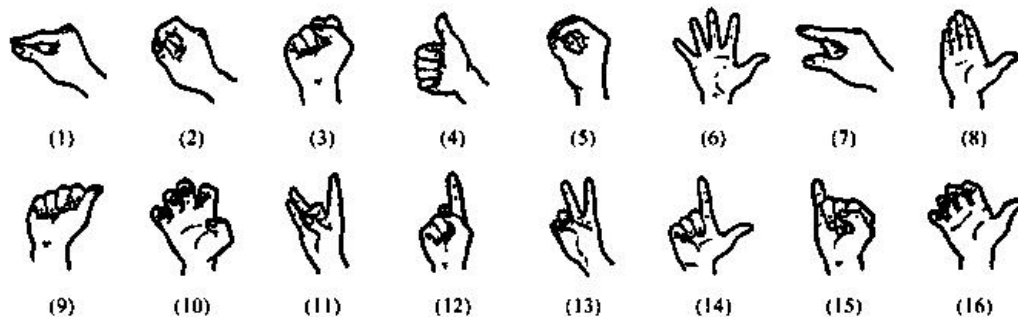


図 4-1 手の形(李・呉 2013 : 56)

表 4-1 (李·吴 2013 : 57)

情感类型	词汇	手形	运动	位置
喜欢	兴趣、有趣	(1)	手指捻动	嘴巴, 鼻子
	喜欢	(2)	由外向内	下巴
	酷爱	(3)	由内向外	鼻子
	好奇、奇怪	(2)	由内向外	眼睛
骄傲	骄傲	(4)	由外向内	鼻子
	荣誉	(5)(6)	掌内运动	脸
烦恼	烦恼、苦恼	(7)	(掌心向内)	额头
	无精打采	(3)(6)	从上向下	胸前
	孤独	(7)	由内向外	鼻子—胸前
	厌倦	(8)	由外向内	脸
	辛苦、疲倦	(9)	由外向内	胳膊
急躁	焦急、着急	(10)	上下	心, 胸
	焦虑	(11)	由内向外	眼睛, 太阳穴
羡慕	羡慕	(12)	由上向下	嘴巴
	嫉妒	(13)	手指运动	眼睛
尴尬	窘、尴尬	(5)(10)	从下向上	脸
害怕	胆怯	(14)	上下运动	心
	受惊	(10)	上下运动	心
羞耻	不道德、羞耻	(12)	由内向外	脸
可怜	可怜	(2)	由外向内	胸
	自卑	(12)(15)	由外向内	胸
	内疚	(11)(15)	从上到下	额头—心
	痛苦	(14)	由内向外	胸
生气	愤怒	(5)(6)	从上到下	胸—头
	敢怒不敢言	(16)	内外	胸
	怒不可遏	(5)(6)(8)	上下, 内外	胸
	恼怒	(5)(12)(16)	从下向上	脸, 胸
	暴怒	(5)(6)	从下向上	头

表 4-1 が示すように、中国手話の感情表現には、身体部位と空間運動が関わっている。この場合、日中手話の感情表現の分類仕方は異なるが、日中手話の感情表現がどのように表現するかが理解される。

本章では、日中の手話辞典から感情表現のデータを収集し、このデータをメタファーとメトニミーが関わる認知的アプローチによって分析を行う。

感情表現の分類については、古代から様々な説が存在する。中国では、人間の感情に関し、五情「喜、怒、哀、楽、怨」、六情「喜、怒、哀、楽、愛、憎」、七情「喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲」の説がある。また、中国医学には、「喜、怒、憂、思、悲、怖、驚」の七情があり、「思」は考えの意味である。これらの感情が過剰となると病気になるとされる。また日本では、中村（1993）の感情表現辞典で、感情が「喜、怒、哀、怖、恥、好、厭、昂、安、驚」の 10 感情に分類されている。さらに、心理学的な感情の分類も様々な形で行われている。

本研究では、日中の手話辞典に挙げられている感情を表す語彙を認知的に分析をしていく。

表 4-2 日・中手話の感情表現

感情の種類	日本手話	中国手話
喜	愉快、楽しい、ほっとした、満足、期待する、興奮する、幸せ	高兴、喜悦、安心、満足、期待、兴奋、幸福
怒	怒る、むくれる	愤怒、恼火、
哀	残念、悲しい、悔しい、がっかり、苦しい、	遗憾、伤心、懊悔、失望、痛苦、
厭	嫌い、恨み、飽きる、軽蔑、	厌恶、恨、厌烦、鄙视、不满、
恥	恥ずかしい、	害羞、
不安・怖	不安、焦る、慌ただしい、心配する、怖い、	不安、着急、慌、担心、害怕、紧张、
驚	驚く、ショック	惊讶

4.1.2 日中手話の感情表現の分析

「喜」

楽しい・高兴

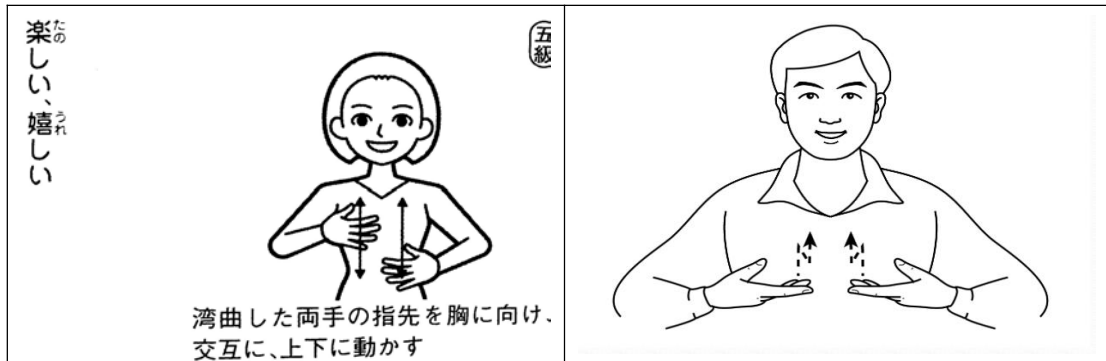


図 4-2

人が楽しかったり嬉しい時は、心が弾むという生理変化が起こる。日本手話では、微笑みながら、心の動きを手を上下にはずむように動かすことで表現する。中国手話にも、嬉しい表情を表現しながら、手で心の動きを写像する。「楽しい・嬉しい」を原因、「微笑みながら、心の動きを手で写像する」表情と生理変化を結果として、「原因-結果」の隣接関係によって表現する。このようにして、目に見えない生理変化を目に見えるように表現する。

また、日中手話には、下の図 4-3 のような「楽しい」を示す表現がある。日本手話では、腹を抱えて笑うほどのおかしさの表現で表す。中国手話は、「喜悦」（「好き（気になる）」の行動+「楽しい」の生理変化）の手話表現で表す。両者とも、時間的な隣接関係により直接的に目に見える形で表現する。

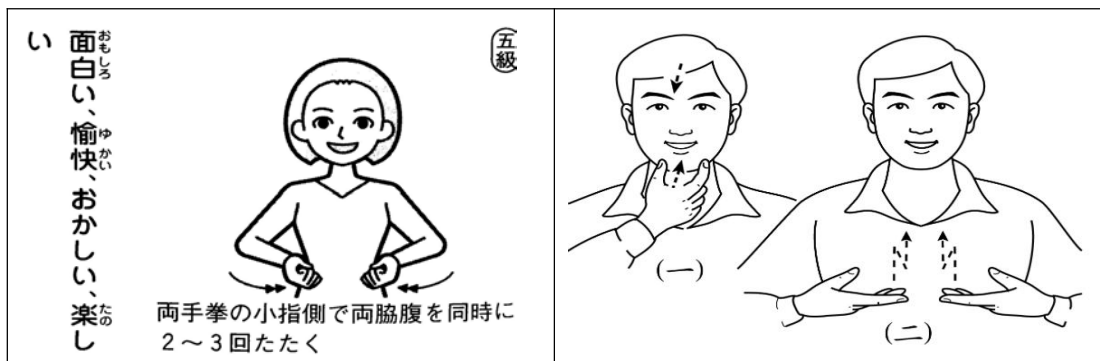


図 4-3

ほっとした・安心

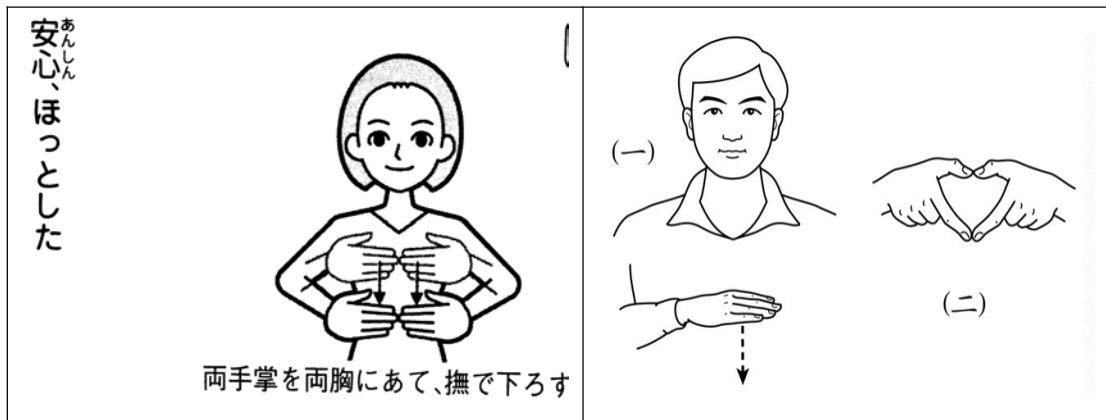


図 4-4

図 4-4 で示しているように、日中手話の表現は異なるが、心を落ち着かせる様子でほっとした安心の気持を表現する点では類似している。この場合、下への動きで心の落ち着くことを写像する。ほっとした気持と心が落ち着く状態には、「原因—結果」の時間的な隣接関係が認められる。この場合には、目に見えない生理変化を視覚的に表現している。

満足・満足

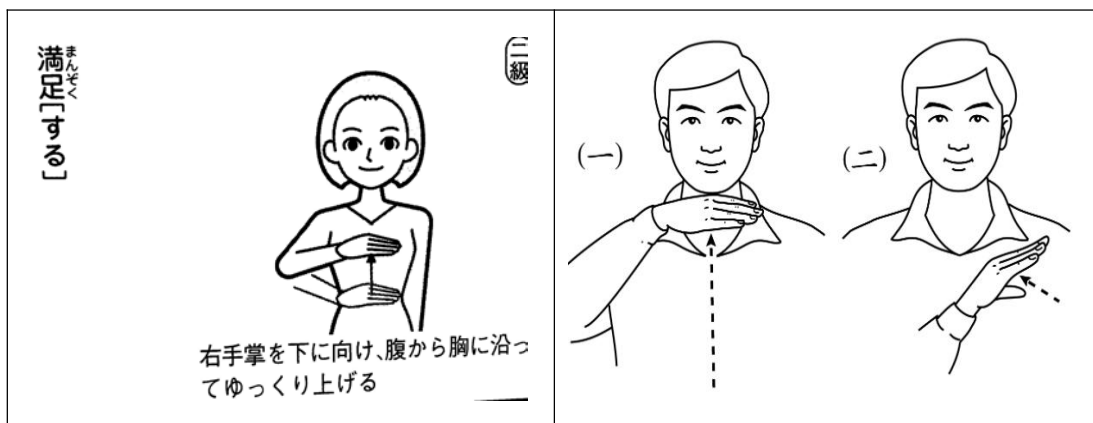


図 4-5

「満足」の手話表現は、日中で類似している。心が満たされる表現は、胸を容器、満足の気持を液体としてみなし、容器のメタファーによる概念化を通して表現する。これは、メタファーの写像による視覚表現である。

期待する・期待

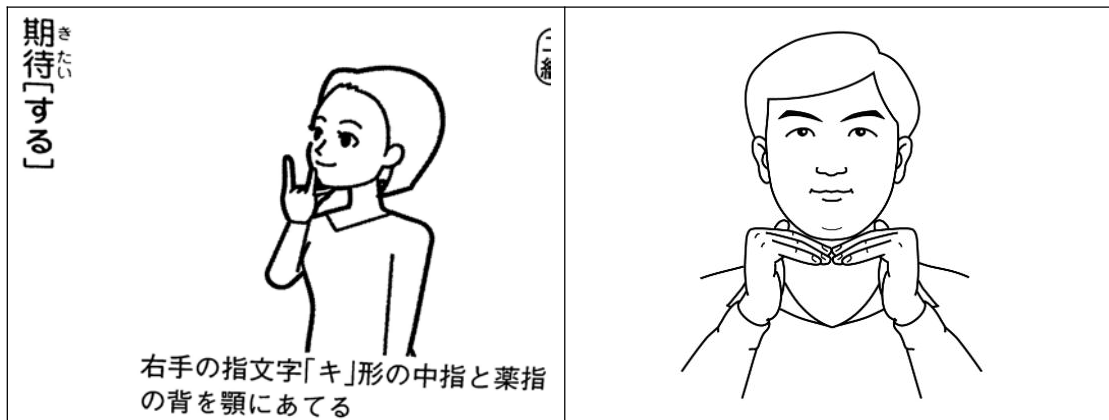


図 4-6

日本手話の「期待する」は、「キ」の指文字を顎にあてて「まつ」の意味を含めた表現で表す。中国手話の「期待」も、「等待（待つ）」の意味を含めた表現で表す。これは、「待つ、期待する」の動作を写像して表現する手話である。期待の気持ちと待つという無意識的な動作表現には時間的な隣接関係が存在する。この場合には、類像性に基づくメトニミー表現により、動作を目に見える表現にして「期待」の気持ちを表す。

興奮する・興奮

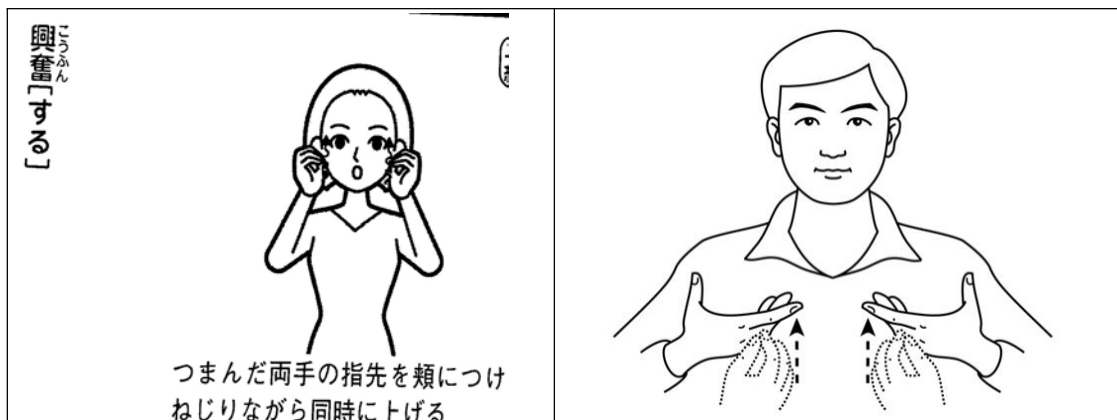


図 4-7

日本手話は、つまんだ両手の指先を頬につけ、ねじりながら同時にあげる表現で「興奮」を表す。喜び過ぎて興奮することは、頭に血が上って、頬が赤くなる生理変化が起こることを示す。日本手話には、「原因—結果」のメトニミー表現が見られる。この場合には、目に見えない生理変化を視覚的に表現する。中国手話は、胸を容器として捉え、喜びが容器

の底から湧き上がる液体の様態で表現する。これは、容器のメタファーによる概念化を通して理解されるメタファーの写像による視覚表現である。

幸せ・幸福

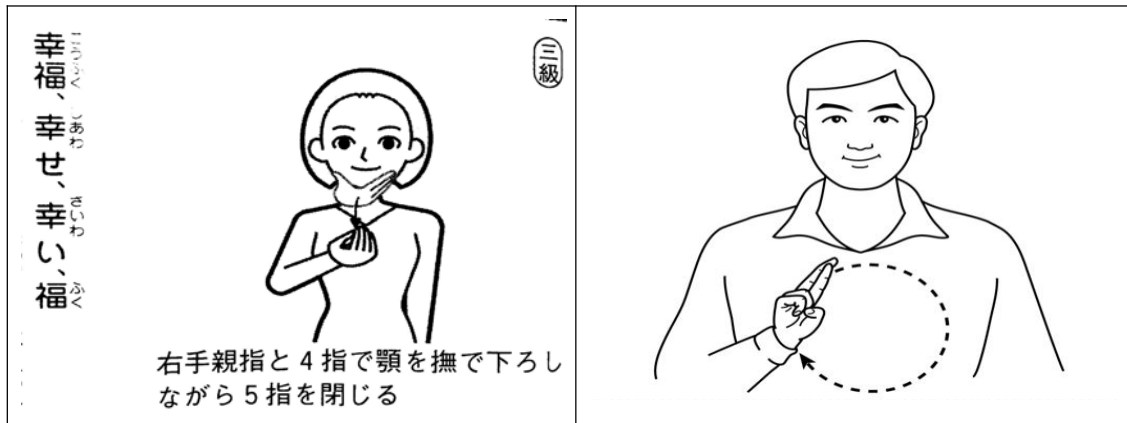
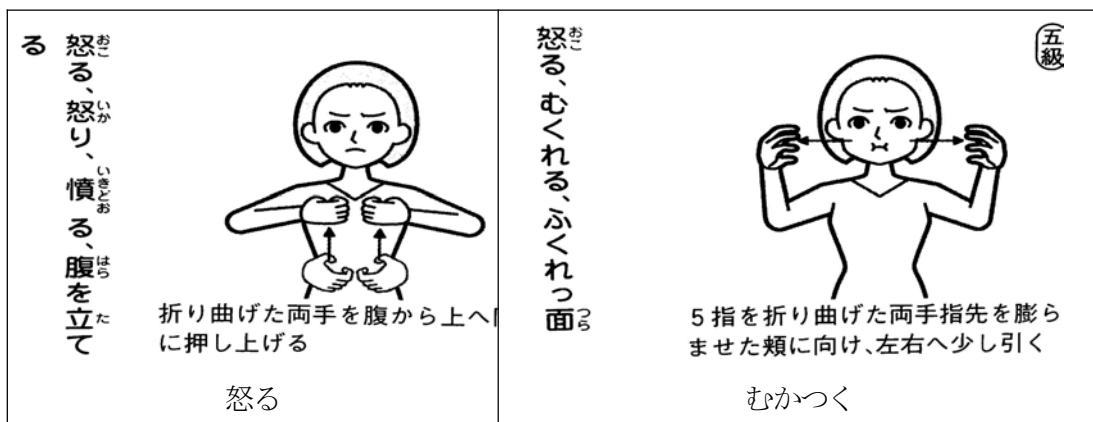


図 4-8

日本手話は、幸せで顎をなでる動作で「幸せ」を表現する。この表現は、伝統的な日本人の身振りの表現である。日本では、得意気な様子、自慢げな様、満足した心持ちなどを表現する場合には、顎を撫でる動作を伴うことが多い。この種の手話は、直接的に目に見える感情表現である。中国手話は、指文字の「X」で胸の前に円を描く表現で「幸福」を表現する。この場合は、胸の中に、幸福が満たされる様子を写像する容器のメタファー表現と考えられ、目に見えない内的感情を視覚的に表現する手話の一種である。

「怒」



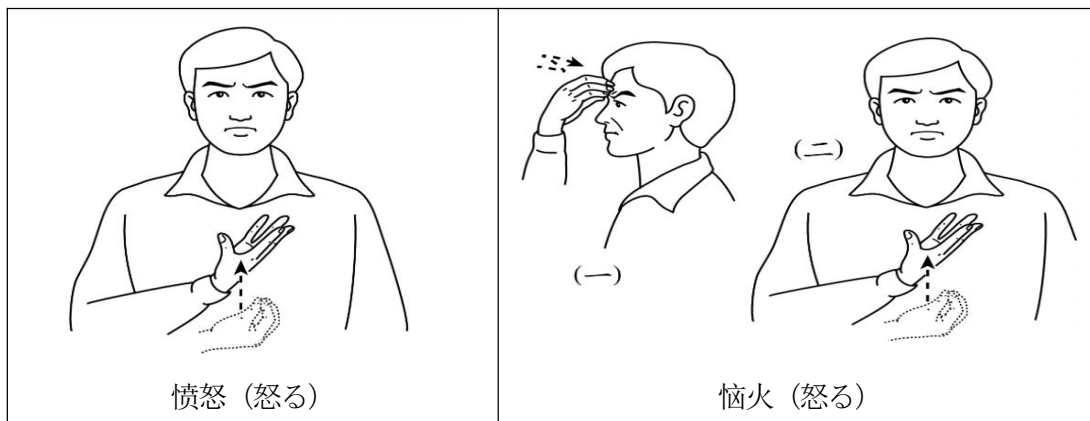


図 4-9

日本手話と中国手話では、怒る表情を通して、腹を立てるイメージを表現する。人が怒る時、眉間にしわがよる、目つきが悪くなる、口角が下げるなどの表情が現れ、体温上昇、心拍上昇などの生理変化が起こる。この場合には、「怒る」を原因、「怖くなる表情と生理変化」を結果とする「原因-結果」の隣接関係が成り立つ。一方、胸（腹）を容器、怒りを液体、気体として捉えるメタファーの写像も認められる。この種の手話は、メタファーの写像による視覚表現である。

「哀」

残念・遺憾



図 4-10

残念な気持ちのときには、掌に拳を叩く動作が無意識に伴う場合が多い。日中の手話表現には、残念そうな表情をしながら、メトニミー的な動作で表現する。「感情-伴う動作」

は、時間的な隣接関係が認められるメトニミー表現であり、これは直接的に目に見える感情表現の一種である。

悲しい・难过

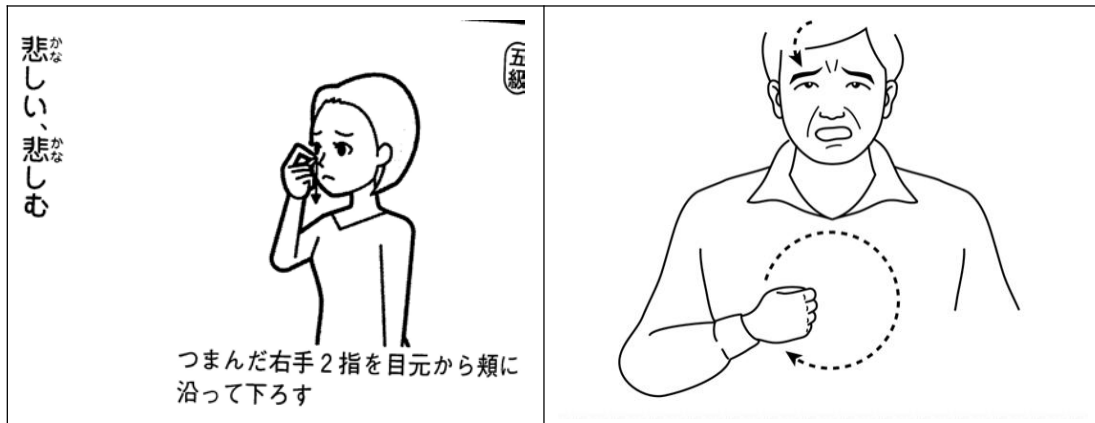


図 4-11

人が悲しむ時、涙が出るという生理変化が起こる。日本手話には、「悲しい」は悲しい表情をしながら、手で涙が流れる様子で表現する。「悲しい」は原因で、「涙が出る生理変化」を結果として、「原因-結果」の隣接関係が成り立つ。これは、直接的に目に見える感情表現である。中国手話には、拳を胸にあてて円の形に回す。「悲しい」は原因で、「悲しい表情と苦しくて胸が締め付けられる身体的感覚」を結果として、「原因-結果」の隣接関係が成り立つ。

悔しい・懊悔

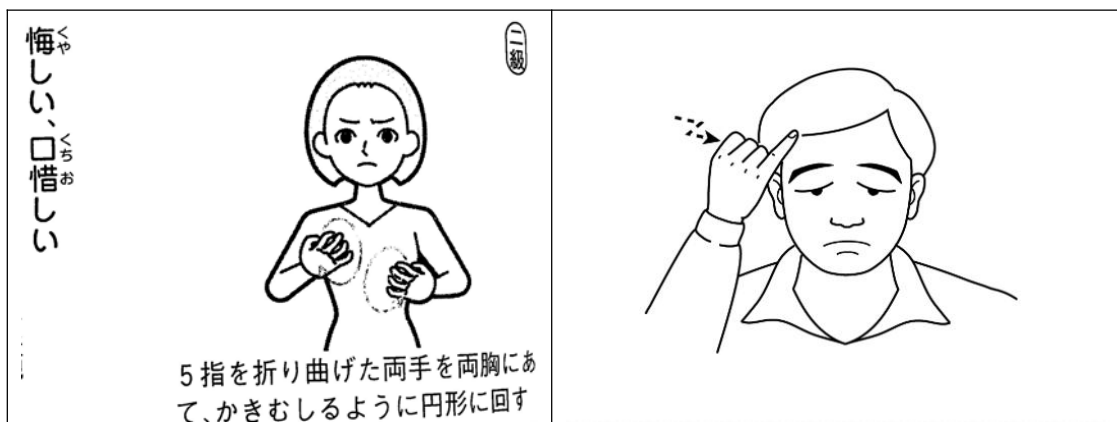


図 4-12

悔しいという意味に関する日本手話には、起こった生理変化と胸をかきむしるような苦しみに伴う動作が伴う。中国手話には、この種の感情は、小指で頭を叩く動作で表現する。中国手話では、マイナスの意味を表す小指の表現はメタファーと考えられる。メタファーの写像を通して意味を伝えるこの種の手話は、間接的な感情表現の一種である。

がっかり・失望

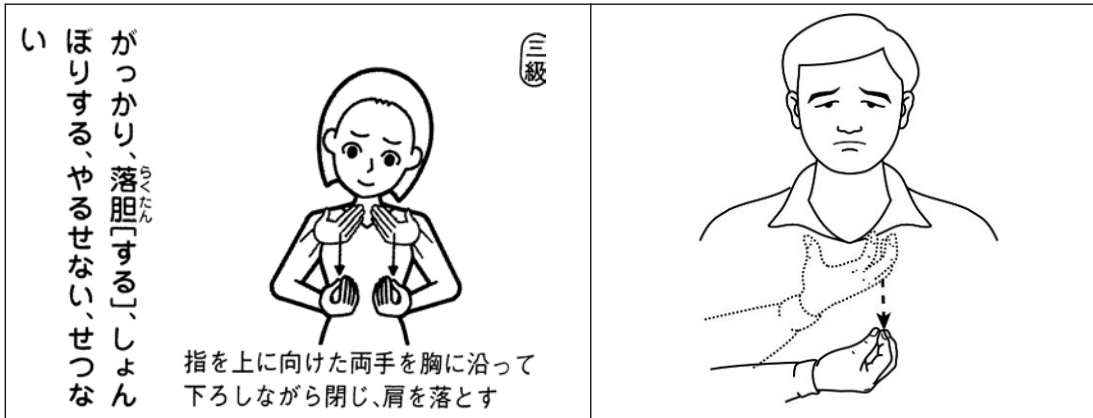


図 4-13

「がっかり」という手話表現の場合には、日中手話のいずれにおいても、手を下への動かし、肩を落とすしぐさで表現する。下への空間運動は、「HAPPY IS UP, SAD IS DOWN」のメタファーを通して理解される。

苦しい・痛苦

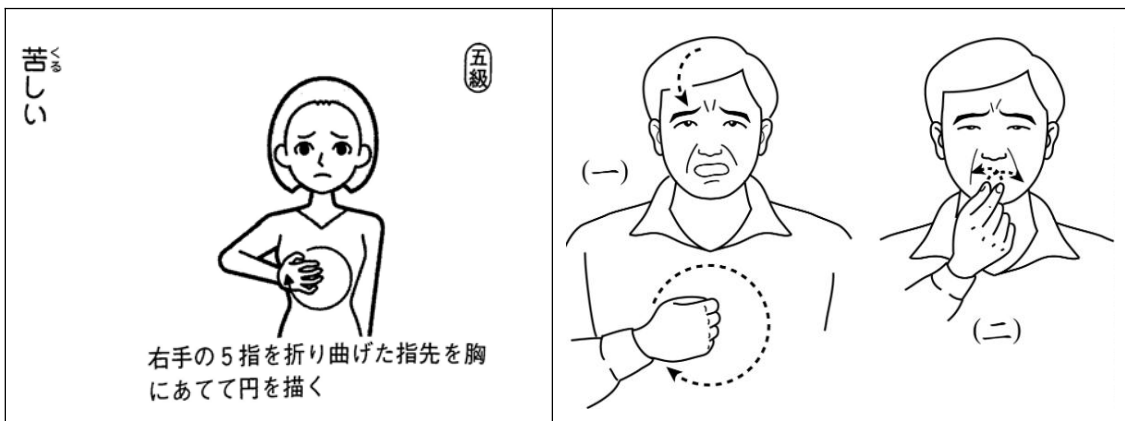


図 4-14

日本手話の「苦しい」の表現には、「原因—結果」の隣接関係が認められる。この場合には、苦しくて胸をかきむしる動作で表現する。また、身体的感覚から感情への写像は、メタファーと考えることもできる。中国手話の「痛苦」は、身体内の感覚を表現しながら、味覚の「苦い」を感情への転移も含めて表現する。この場合には、目に見えない苦しみを視覚的に表現する。

「厭」

嫌い・厌恶

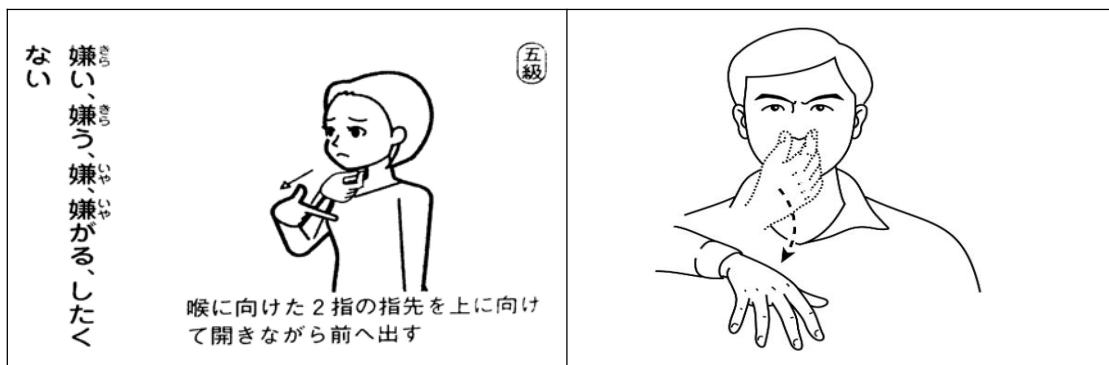


図 4-15

日本手話の「嫌い」は、喉に向けた2指の指先を上に向けて開きながら前下へ出すという仕草で表現する。喉の不快から感情への拡張はメタファーによる拡張である。「嫌い」の鼻をつねって、外へ捨てる動作は、中国手話で「厌恶 (嫌い)」の意味を表す。これは、嫌な匂いの嗅覚から感情への拡張のメタファーと考えられ、抽象的な概念を具象的な感覚によって表現している。

恨み・恨

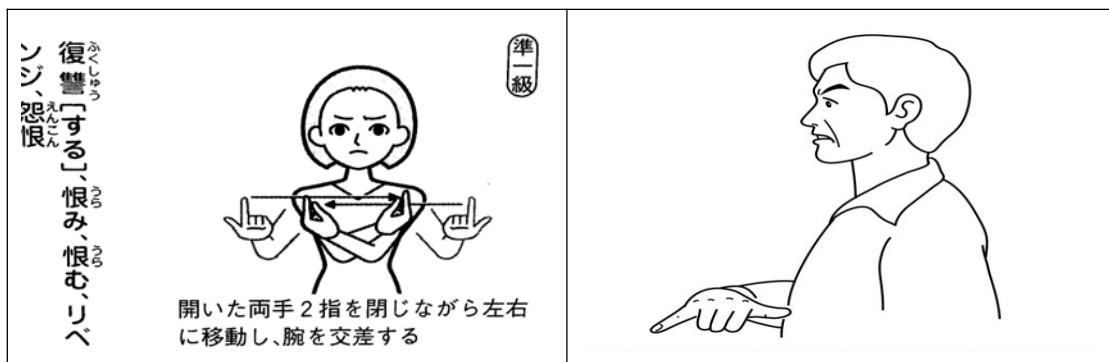


図 4-16

図4-16を示すように、恨みの手話表現は日本手話と中国手話がそれぞれ異なるが、断る、対立、抵抗の意味を表現する。

飽きる・厌烦

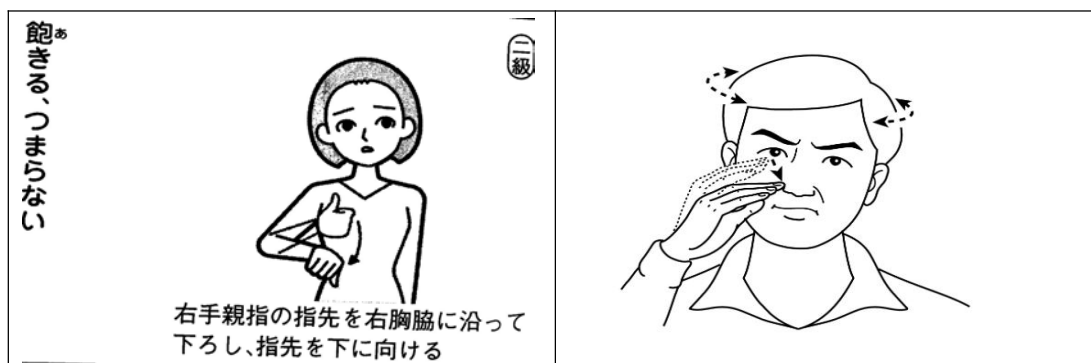


図4-17

日本手話では、指先を下に向ける動きによって「飽きる」を意味する。この場合の方向（上・下）によって感情を意味する写像には、メタファーの認知プロセスが関わっている。中国手話には、嫌な匂いから「飽きる」感情への写像により、メタファーの手話表現が可能となる。

軽蔑・鄙视

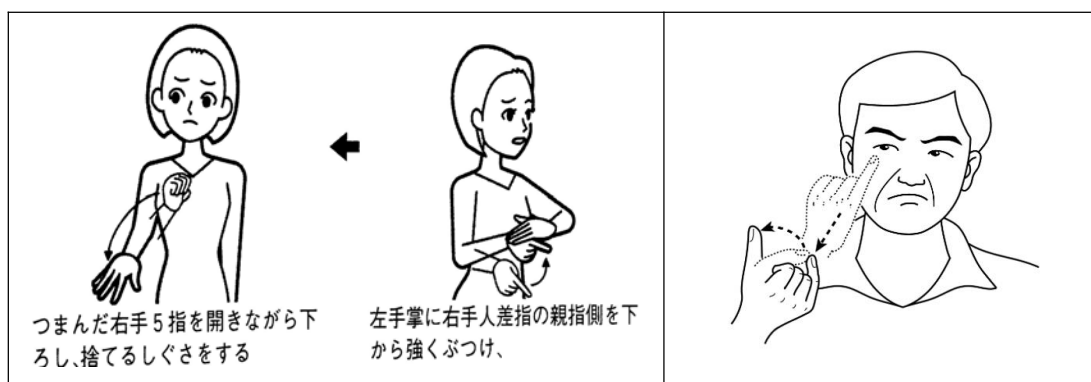


図4-18

日本手話の「軽蔑」は、「ぶつける」、「捨てる」といった動作によって表現する。この場合、「ぶつける、捨てる」のような動作から「軽蔑」の感情への変換を可能とする写像は、類像性に基づくメタファーと考える。これに対し、中国手話の場合には、軽蔑の表情をし

ながら、小指で目を指し、前へ動きながら親指を小指で弾く動作を行う。この種の手話表現は、身体部位で抽象的な意味への写像を行うメタファーの手話の一種と考えられる。

「恥」

恥ずかしい・害羞



図 4-19

人が恥ずかしい時には、顔が赤くなるという生理変化が起こる。中国手話では、「恥ずかしい」は、頭を少し下げて、顔は血が上る様子を手で下から上にゆっくり開く動作で表現する。日本手話でも、右手掌を顔に向け、一周させる動作で表現する。この種の例では、「恥ずかしい」感情が原因で、「手で顔に血が上る、顔が赤くなる表現」を結果とする、「原因-結果」の時間的な隣接関係が成り立つ。

「不安・怖」

不安・不安

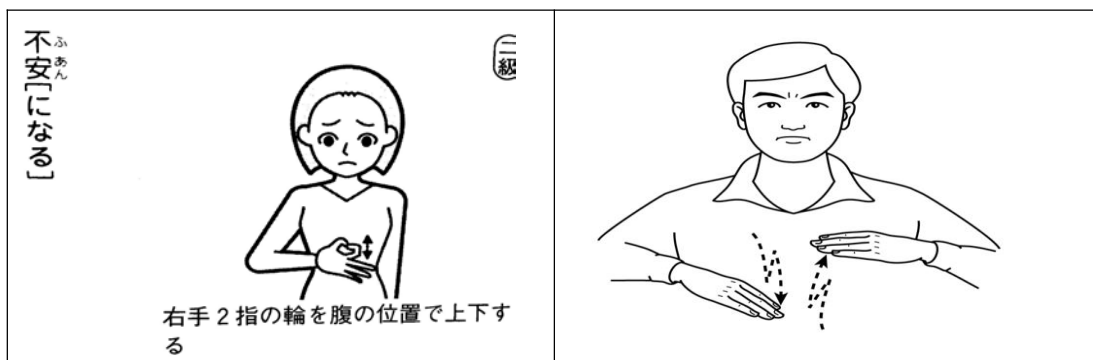


図 4-20

日本手話では、不安の感情を持つとき2指の輪を腹の位置で上下させて不安を表現する。この場合には、不安の感情は原因、縮み上がる生理変化の動作は結果という「原因—結果」の時間的な隣接関係が成り立つ。中国手話には、不安の表情をしながら、手を胸の前に上下に動かし、心の動くことを手で表現する。この種の手話は、類像性に基づくメトニミーの一種と考えられる。

焦る・着急



図 4-21

「焦る」を表現する場合、日本手話は、両手を胸に沿って素早く上げる。この場合、素早く手の空間運動で焦る気持ちを表す写像は、起点領域から感情の概念を目的領域へメタファー変換するプロセスと考えられる。中国手話の場合には、手の指先を胸にあてて、交互に上下する動きはかきむしるような様子で焦る気持ちを表現する。この場合、焦る気持ちとこの感情によって引き起こされる動作は、時間的な隣接関係によって関連づけられている。

慌ただしい・慌



図 4-22

日本手話の「慌ただしい」は二つの表現がある。一つは、あれこれと右往左往する動作で慌ただしい感情を表す。もう一つは、バタバタする動作で表現する。慌ただしいときには、混乱な状態が起こり出来事との時間的な隣接関係が成立する。中国手話の「慌」は、手の5指を胸にあてて、交互に上下する動作をすることにより、心の生理現象を表現する。これは、「原因—結果」のメトニミー表現であり、目に見えない生理現象を視覚的に表現する手話の一種である。

心配する・担心

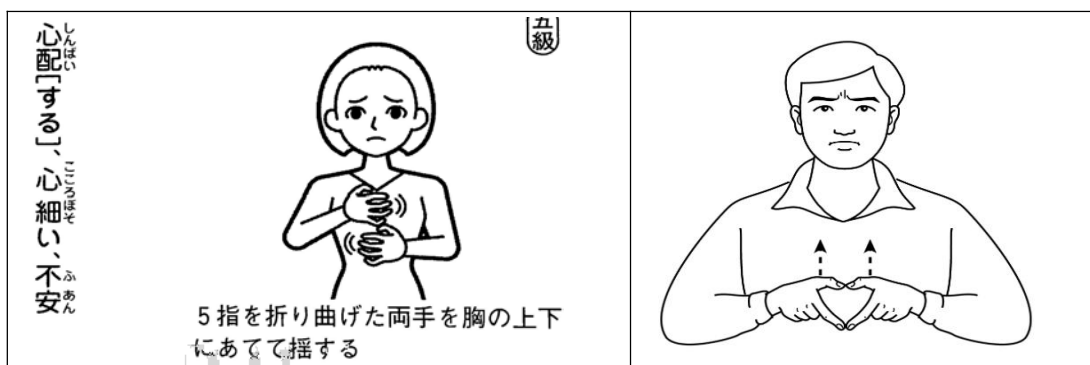


図 4-23

日中手話で「心配」を表現する場合、日本手話は心が揺れる不安感を手で写像して表現する。中国手話は、心を引き上げ、ぶら下がっている様子で気にかかっている気持ちを表現する。「心配の感情—これに伴う表情と生理変化」には、「原因—結果」の隣接関係が認められる。

怖い・害怕

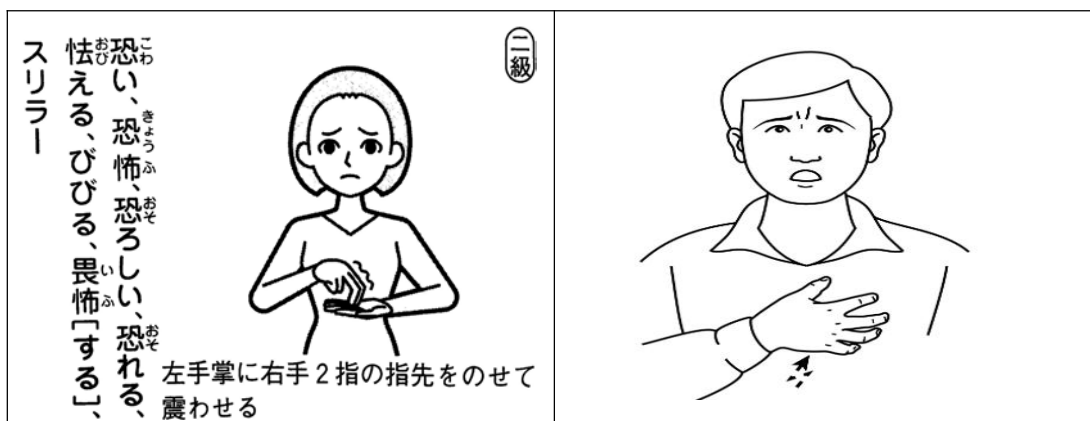


図 4-24

人がびっくりした時には、目は大きくなるという生理変化が起こる。中国手話では、「びっくりした」表現は、口を開いて、手で目を突然的に開く様子を表現する。この場合、「びっくりした」は原因で、「口を開いて、手で目を突然的に開く」を結果として、「原因-結果」の隣接関係が成り立つ。日本手話には、びっくりする表現は四つあるが、いずれも異なる生理変化の写像で「驚く」を表現する。この表現にも、感情と生理変化は時間的な隣接関係が存在する。

本節では、日中手話の感情表現の語彙を分析し、手話語彙の意味の伝達のメカニズムの一面を考察した。手話語彙の基本的な表現は、基本的にメタファー表現とメトニミー表現に分類される。以下の考察では、さらにこの種の手話表現を特徴とする日中手話の共通点と相違点を分析していく。

4.2 手話の感情表現からみるメタファー

メタファーは認知手段の一つとして、言葉の創造や意味拡張に重要な役割を担っている。手話話者は、抽象的で視覚化できない意味をメタファーによって表現することができる。このメタファーの使用が、手話の語彙を豊かにしている。

近年、動詞を中心として中国手話のメタファー研究が盛んになされている。刘・曹・付の『中国手语动词隐喻调查研究』(2018)は、手話の動詞構文のメタファー表現は、基本的にA 構造のメタファー、B 存在のメタファー、C 方位のメタファー、D 容器のメタファー、E 数量のメタファー、F 距離のメタファー、六つある、と報告している。

表 4-3 手話の動詞の中にメタファー類型の頻率統計 (刘・曹・付 2018: 31)

	频率	举例
结构隐喻	31.25%	通知、讨论
本体隐喻	20.31%	交流、忘记
方位隐喻	21.88%	高兴、发展
容器隐喻	14.06%	暴怒、生气
数量隐喻	6.25%	哭、嚎啕大哭
距离隐喻	6.25%	拒绝、离婚

手話動詞構文の使用度からみて、構造のメタファーの使用度が一番高い。すなわち、構造のメタファー（通知する、話し合う）、次は存在のメタファー（交流する、忘れる）、方位のメタファー（楽しい、発展する）の順になる。容器のメタファーは、主に感情表現には顕著である（怒る、激怒する）。数量のメタファーは、程度が異なる意味の表現に使用されている（泣く、泣き叫ぶ）。距離のメタファーは、手と体の遠近（受ける、断る）と物体の遠近を関係の親疎を意味する（結婚、離婚）。上記に挙げられた例には、中国手話の感情表現とメタファーの深く関わりが見られる。

4.1.2 節で日中手話の感情表現の事例研究によって、日中の感情を表す手話語彙と手話の感情表現のメタファーには、主に容器のメタファー、身体部位の機能によるメタファーと空間のメタファーの三つが存在することがわかった。

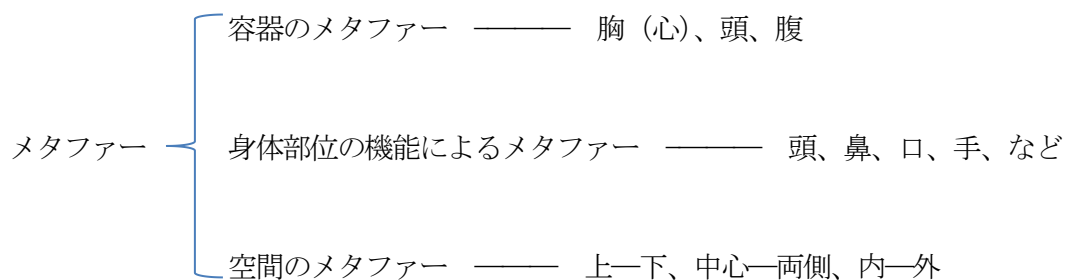


図 4-26

A 容器のメタファー：手話で「満足・満足」、「怒り・生气」、などを表現する場合、頭、胸、腹を容器として捉え、容器のメタファーによる概念化を通して理解される。例えば、「怒り」を表現する場合、手を胸のところに持っていく。手の形は、気体の圧力を意味し、五指の開く程度は怒りの程度を表現する。また、胸は、怒りを満たす容器を意味する。

B 身体部位の機能によるメタファー：手話で感情を表現する場合、身体部位の頭、鼻、口、などの経験を通して抽象的な概念の理解が成り立つ。例えば、中国手話の「厌恶（嫌い）」を表現する場合、嫌いな匂いの嗅覚から嫌い感情の理解が成り立つ。また、日本手話の「嫌い」は、喉の不快から嫌いの感情への意味拡張に基づいている。

C 空間のメタファー：手話で感情を表現する場合、手の空間運動の方向から見て、上一下、内一外、遠一近、中心一両側の空間方位の概念から感情を理解することができる。例

えば、「がっかり」を表現する場合、手は、上の五指の開く状態から下へ動いていく。消極的な感情は、下への方向で示される。

4.2.1 容器のメタファー

容器のメタファーは存在のメタファーの典型的な事例である。Lakoff and Johnson (1980) は、身体、視界、出来事、行為、活動、状態を容器や内容物として概念化している。「怒り」の概念は、この容器のメタファーによって表現される。例えば、「身体は容器である」、「怒りは容器の液体の温度である」などの概念メタファーが存在する。この場合、怒りの程度によって、怒りを容器の中の液体、気体、圧力として喩えていく (Lakoff 1987)。Matsuki (1995) は、日本語の怒りの分析を行って、日本語にも英語と同じように「怒りは容器の中の熱い流体である」というメタファーが存在するが、生理以外の要素（社会文化）を考え、異なる部分も存在する（例えば、「腹が立つ」、日本では腹という概念の使用）ことを示している。また、Yu (1998) は、中国語の怒りを表現するメタファーは「気」という概念と密接に関わっていると指摘している。

上記の音声言語の感情表現からみる容器のメタファーには、日中英の言語でそれぞれの特徴が見られる。日本語は英語と同じように「怒りは容器の中の熱い流体」と考えるが、社会文化の原因で、異なる部分で概念化される場合もある。中国語には、英語と同じように「ANGER IS HEAT」のメタファーが存在するが、英語の場合には、「火」と「液体」のイメージが選択され、概念化されている。中国語の場合には、「火」と「気体」に概念化される。この違いの原因は、中国の哲学に「陰陽五行説」の背景があるからである。以上の点から、異文化の言語によりメタファーの具体的な見立てに相違が存在することが明らかになる。

手話の場合にも、言語によりメタファーの見立てが異なる。日本手話の場合、「満足」と「怒り」の例から見て、怒りを液体と考える。

「満足」は、「右手掌を下に向け、腹から胸に沿って上げる」という動作で表現する。心が満たされる表現は、胸を容器、満足の気持ちを水（液体）として考え、容器のメタファーによる概念化を通して理解する。

「怒り」は、折り曲げた両手を腹から上へ同時に押し上げる様子で表現する。水（液体）を押し上げる様態を写像して、「身体—怒り」を「容器—水（液体）」と考える。この表現

の分析は ASL (～the concept of anger is constructed as a surge within a container) と類似している。

中国手話の場合には、「満足 (満足)」、「幸福 (幸せ)」、「憤怒 (怒り)」、「恼火 (怒り)」、「难过 (悲しい)」、「痛苦 (苦しい)」の表現は、容器のメタファーと考え、感情を液体より、気体として捉えることが多い。

「満足 (満足)」の手話表現は日本手話と類似している。胸を容器、満足の気持ちを水 (液体) として考え、容器のメタファーによる概念化を通して理解する。

「幸福 (幸せ)」、「难过 (悲しい)」、「痛苦 (苦しい)」の表現は、手の形が異なるが、「胸にあてて円を描くように動かす」という動作で表現する。幸せ、悲しい、苦しいという気持ちで心が満たされることを示し、感情が比喩的に表現される。

「憤怒 (怒り)」、「恼火 (怒り)」の5指をぱっと開く表現は、興奮、怒りの程度を表し、高い圧力で爆発することを意味する。

感情が気体に喩えられる表現は、中国の「気 (気)」の文化的背景に関係している。李・吴 (2013) は、精神は、気の主導的な役割を担い、気の最高の表現であり、感情は精神の直接表現であることを指摘する。中国語と中国手話では、気が感情を喩える表現として使われる。

4.2.2 身体部位の機能によるメタファー

音声言語の場合、五感、共感覚の比喩的拡張に関し多くの研究がなされている。小田 (2003) は、「甘い」は甘い味覚が生み出す快い感覚特性を中心に、聴覚、嗅覚の意味が広がるメカニズムを考察している。また、山添 (2003) は、「苦い」について、苦いものを口にしたときの「不快感」が、心理領域における不快な経験に意味拡張していくことができるとしている。山梨 (2012) は、五感の感覚が、人間の内面、態度、考え、振る舞い、などの叙述に比喩的に使われる事実を明らかにしている。

手話で感情を表現する場合、頭、胸、手などを通して表現するので、身体部位との関わりが重要である。感情を表す手話表現には、身体部位の機能による感情への意味拡張が認められる。

日本手話の場合には、「嫌い」を表現するとき、喉に向けた2指の指先を上に向けて開きながら前下へ出すというしぐさで表現する。喉の不快が感情表現へ拡張する。喉の不快は

口を飲食する器官として食べ物を飲み込むという機能による表現である。喉の快い感覚は好き、欲しいという感情を表現する。

中国手話の場合には、「痛苦（苦しい）」の手話表現は、胸が締め付けられる身体的感覚を表現しながら、味覚の感覚から感情への理解が成り立つ。味覚は口の「食べる」という機能によるものである。また、中国手話の「厌烦（飽きる）」、「厌恶（嫌い）」は、嫌な匂いの嗅覚から感情へ拡張していく。嗅覚は鼻の基本的な機能である。

音声言語でも、手話でも、生理的な基盤に基づき身体的経験を通して意味を拡張していくが、身体部位の機能によるメタファーの認知プロセスを介して感情への拡張表現は手話の独特の表現手段と考えられる。

4.2.3 空間のメタファー

方位のイメージスキーマは、メタファー表現の根本的な基盤とみなされる。山梨（2012）が指摘するように、場所・空間の距離関係の具体的な経験に基づく「遠—近」、「中心—両側」のスキーマにより、主観的な意味の比喩的な拡張が可能となる。さらに、場所・空間の認知に関わる次元は物理的な世界の位相空間を特徴づけるだけでなく、われわれの心理的、感情的な内面世界、能力、性格、社会的な役割関係、対人関係、等の主観的概念を特徴づけている（山梨 2012: 70）。

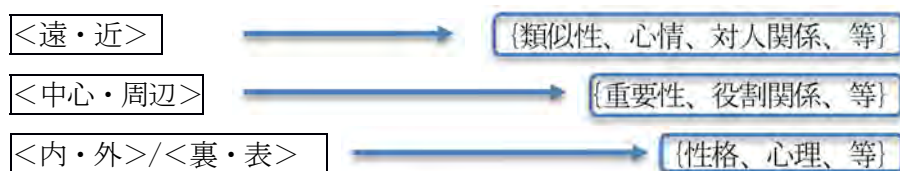


図 4-27 (山梨 2012: 70)

この認知のアプローチは、手話の中にも適用される。手話では、「上—下」、「遠—近」、「中心—両側」、「内—外」のスキーマで関係、感情を表すことができる。特に、「上—下」の空間運動を利用して表現する。例えば、「上—積極的感情、下—消極的感情」の表現は、上・下の空間運動によって、楽しい、満足、がっかり、残念の感情を表現する。また、「中心—両側」、「内—外」のスキーマから関係・感情に関わる比喩的な意味拡張も成り立つ。

なお、手話では、下への運動は、必ずしも消極的な感情を表すことではない。「安心」、「ほっとした」の感情を表現する場合も下への運動を伴う。「下」は、家を建てる、植物の根の成長、などの経験から定着、安定の概念も意味する。

4.3 手話の感情表現からみるメトニミー

日常生活の中で、自分の感情を伝える時、無意識的に生理変化が起こる。手話の感情表現は顔の表情を表現しながら、手で生理変化を写像して感情を伝える。手話では、感情表現は「伝えたい感情—顔の表情とその感情から伴う生理変化の写像」という「原因—結果」のメトニミー表現が成り立つ場合がある。

手話の感情表現に基づくメトニミー表現は、主に「原因—結果」(感情—表情と伴う生理変化)の時間的な隣接関係による表現である。さらに、この「原因—結果」の隣接関係から目に見える生理変化と目に見えない生理変化の二種類に分け、感情を直接表現することができるかどうかを判断する。

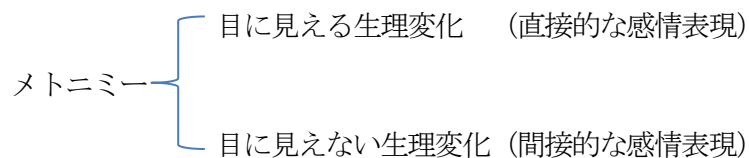


図 4-28

また、手話のメトニミー表現には、二重の写像 (double mapping) が存在することを李・呉 (2013) が指摘している。メトニミーの二重の写像の説明は以下のようになる。

例：「无精打采」(しよげで元気のない様子)

中国手話で「无精打采」(しよげで元気のない様子)を表現する場合、まずは身体全身を手/拳で表現する、全体に対する部分の表現は、認知の経済性を示している。拳を下に向ける動作は、人が疲れた時、無力、つらい気持ちが生じるという因果関係を表現する。①全体一部分の隣接関係。②生理状態によって気持ちを生じるという因果関係の成立には、メトニミーによる二重の写像が認められる。

李・呉 (2013 : 58 (筆者訳))

手話では、メトニミーの二重の写像においては、李・呉（2013）が指摘しているよう、「部分—全体」の空間的近接性と「生理変化—感情」の時間的近接性が同時に存在する場が多い。これは、中国手話だけでなく、日本手話にも見られる。例えば、怖い、驚きを感じた時、体全身の震えと跳び上がる様子を足の写像を通して表現する。「足—体」は「部分—全体」の関係であり、「感情—生理変化」は時間的な隣接関係である。この関係は、メトニミーによる二重の写像と考えられる。

4.3.1 直接的な感情表現

日中手話の感情表現に関する「原因—結果」のメトニミー表現の場合、身体への反応によって直接的に目に見える生理変化の表現は、手話による感情表現と考えられる。日中手話の直接的な感情表現を以下の表 4-4 に示す。

表 4-4

日本手話	愉快、期待、幸福、むくれる、残念、苦しい、悔しい、慌ただしい、怖い、驚く
中国手話	喜悦、期待、遗憾、着急、害怕、

日本手話の場合には、「愉快（腹を叩く）、期待（手を顎にあてる）、幸福（顎を撫で下ろす）、むくれる（頬を膨らむ）、残念（左手掌に右手拳を叩きつく）、苦しい・悔しい（手を胸にかきむしる様子）」の手話表現は、感情は原因、起こった動作表現の生理変化は結果として、直接的に目に見える時間的な隣接関係により表現される。「慌ただしい」は、慌ただしい気持ちを感じた場合、混乱な状態になる手の表現によって表現される。「怖い」は、怖くて足が震え、直接的に目に見える動作表現の生理現象を手で表現する。「驚く」は、飛び上がる様子を手で表現する。また、身震いの表現も、生理変化を示す表現である。このような自然的な反応の動作表現で感情を伝えるのは、手話の直接的な感情表現の特徴と考えられる。

中国手話の場合には、「喜悦（頷く）、期待（手を顎にあてる）、遗憾（左手掌に右手拳を叩きつく）、着急（胸をかきむしる動作）、害怕（心を手で抑える表現）」の手話表現は、感情に伴う自然的な反応の動作で表現される。基本的に、中国手話より、日本手話の方が直接的な感情表現は多い。

4.3.2 間接的な感情表現

直接的に目に見えない生理変化の表現は、手話による間接的な感情表現と考えられる。日中手話の間接的な感情表現は下記の通りである。

表 4-5

日本手話	楽しい、ほっとした、興奮、悲しい、不安、心配、恥ずかしい、ショック
中国手話	高兴、安心、难过、痛苦、不安、担心、惊讶

日本手話の場合には、「楽しい、ほっとした、不安、ショック」の手話表現は、心の動きを手で示し、目に見えない身体内の生理変化を表現する。「悲しい、興奮、恥ずかしい、驚く」の手話表現では、涙が出る、頭に血が上る、顔が赤くなる、目が大きくなるという生理変化は、身体部位と手を通して拡大する表現で間接的に表すので、手話の間接的な感情表現と考えられる。

中国手話の場合には、「高兴、安心、难过、痛苦、不安、担心」の手話表現は、日本手話と同じように、心の動きを手で表現し、目に見えない身体内の生理変化を視覚的に表現する。「惊讶」の手話表現の目が大きくなるという生理変化は、手を通して拡大する表現で感情を表す手話の間接的な感情表現と考えられる。

ちなみに、メタファーの認知プロセスによって、感情が間接的に伝えられることもある。例えば、「満足・満足」の手話表現は、容器のメタファーへの写像によって、感情を間接的に表現する。「飽きる・厌烦」の手話表現は、空間のメタファーと身体部位の機能によるメタファーを通して感情を伝える。このように、メタファーの認知プロセスを介して、間接的に感情を伝えることは、手話の感情表現の特徴と言える。

4.4 手話のメトニミーと参照点構造

参照点構造は、手話の多義性や意味変化などのプロセスを分析するモデルである。本節では、手話語彙を参照点構造の分析を通して、日中手話の認知プロセスの差異を考察し、日中手話の語彙にみられる意味拡張の特徴の考察を試みる。

4.4.1 手話の多義性

多義性とは、ある対象が複数の意味で用いられることである。一つの語の意味は、基本的な意味から、拡張された意味に類似性のリンクを介して分布している。手話表現の場合にも、多義的な表現が広範に認められる。

本節では、日中手話の感情表現の事例を取り上げ、手話の多義的表現を分析する。

(1) 「好き」

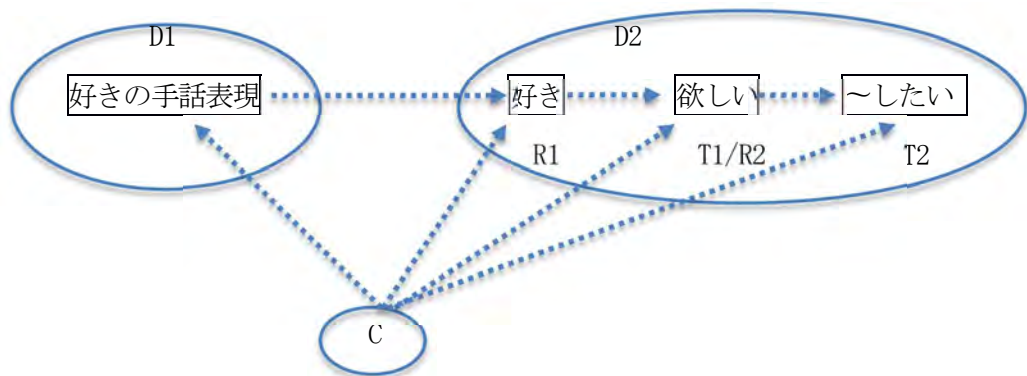


図 4-29

日本手話の「好き」は、喉から手が出るしぐさで表す。この一連の現象には、時間的な隣接関係による意味拡張が認められる。「好き」から手に入れたくなる「欲しい」、そして行動を起こしたい「～したい」の意味を拡張していく。

「喜欢」

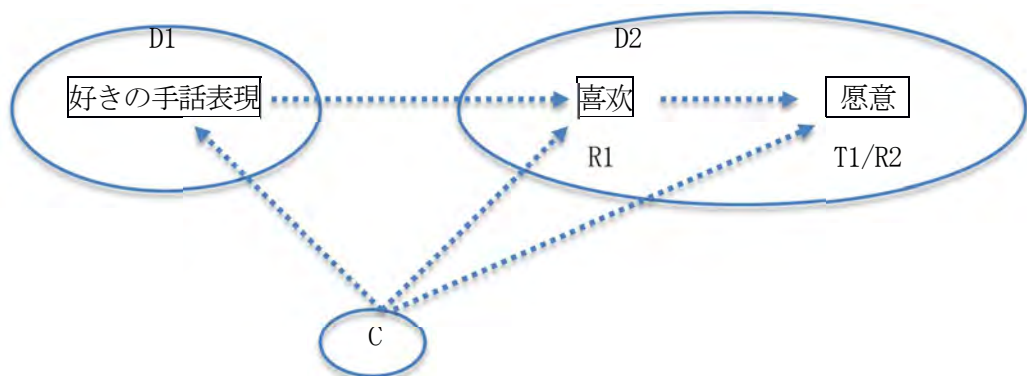


図 4-30

中国手話の「喜欢」は、親指と人差し指の指先を口の下に叩き、頷く動作で表現する。口の機能を抽象的な概念へのメタファーと考え、好き、同意のような意味を、因果関係に

よる意味拡張によって表現する。時間の隣接関係による意味拡張は存在するが、拡張した意味は日本手話と異なっている。

(2) 「难过」

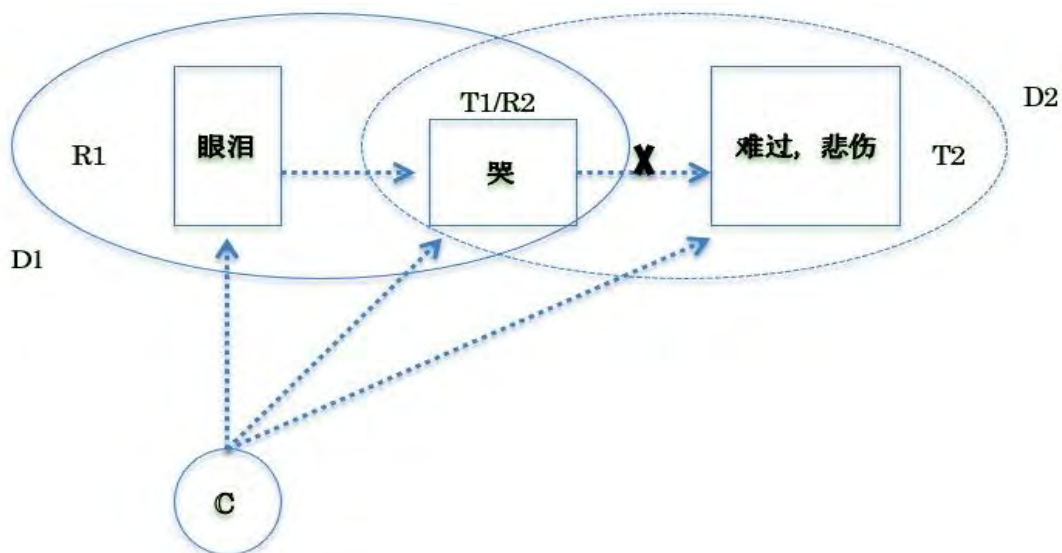


図 4-31

事例(2)の日本手話の「悲しい」の参照点構造は、先行研究にて既に取り上げられているので、ここでは省略する。以下では、中国手話の参照点構造を提示して、日中手話の比較を行う。

中国手話の「难过 (悲しい)」という表現の場合には、涙がこぼれる様子は泣くことを意味する。涙と泣くことの関係は、部分と全体の関係である。しかし、日本手話と異なって、中国手話では、哭 (泣く) と难过 (悲しい) はそれぞれの手話語彙で表現する。难过 (悲しい) を表現する場合には、右手の拳を胸にあてて円を描き、苦しくて胸を掻きむしる様子を表現する (日本手話の苦しい表現とほぼ同じである)。眼泪 (涙) と哭 (泣く) は部分と全体の隣接関係によって次のように規定される。すなわち、「眼泪 (涙)」を参照点 (R1) としてターゲット (T1) 「哭 (泣く)」を指示し、次に「哭 (泣く) が参照点 (R2) となるが、ターゲット (T2) で `ある「悲伤 (悲しい)」「难过 (苦しい)」を指示することはできない。(上の図の「×」の印は、前の参照点から次のターゲットへの指示は拡張できないことを意味する)。中国手話には、日本手話のように一連の意味拡張の現象は存在しない。

(3) 「怖い」

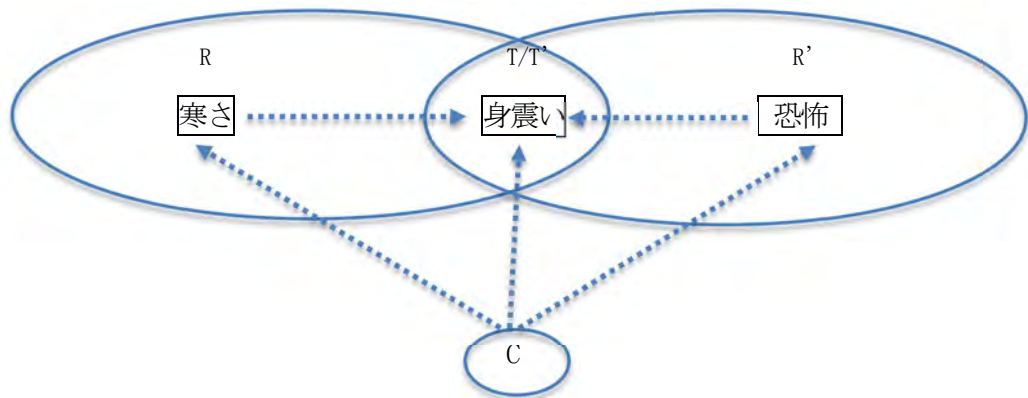


図 4-32

日本手話では、「寒さ」と「恐怖」の手話表現が身震いのしぐさで表現される。寒さ、恐怖を感じるという意味の場合、両者とも体が震える生理変化によって表現される。この場合、「寒さ」と「恐怖」の間には直接的な因果関係が成り立たないので、問題の意味はメトニミー的拡張によって表現される。

「害怕 (怖い)」

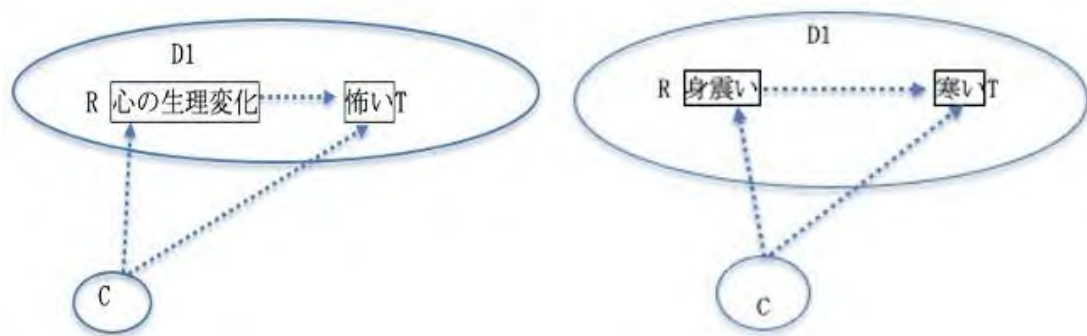


図 4-33

中国手話では、手で心の生理変化の怖いという意味を表現し、身震いで寒い意味を表現する。この場合には、寒いと身震いの間に因果関係が成り立つが、日本手話のような多義性は生じない。

(4) 「羨ましい」

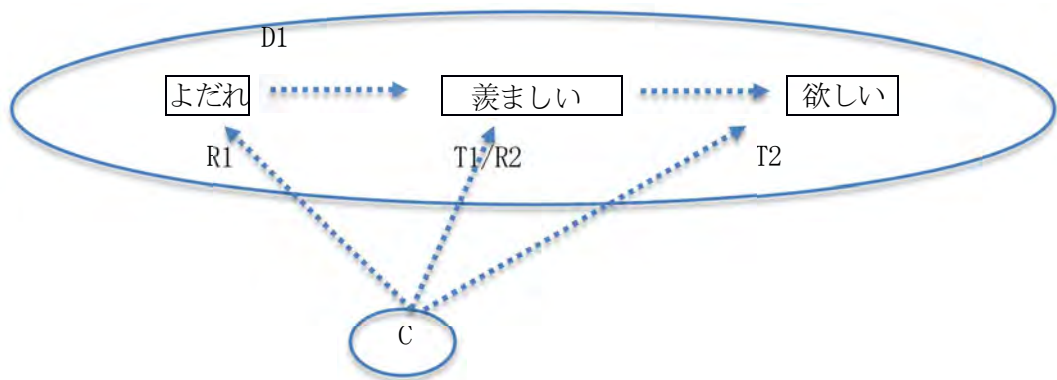


図 4-34

日本手話では、よだれを垂らす表現は羨ましいと欲しいを意味する。「羨ましい」と「欲しい」は、時間的な隣接関係によるメトニミー的拡張である。

「羨慕（羨ましい）」

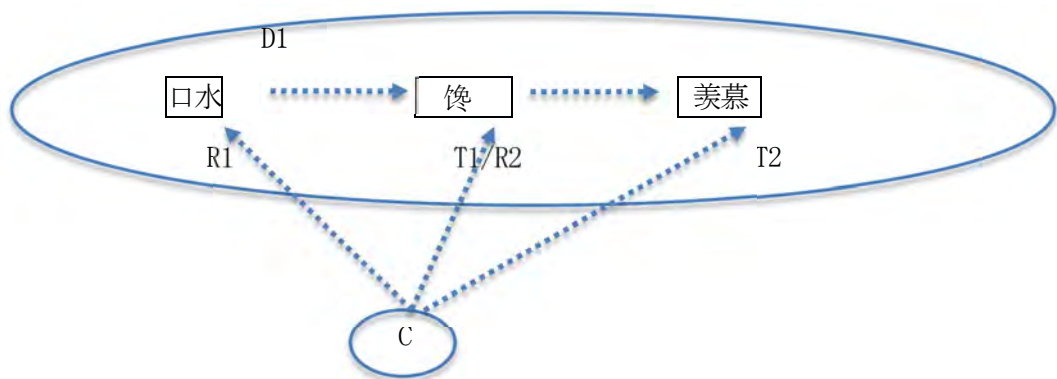


図 4-35

中国手話でも、よだれをたらす様子を手で表現する。この場合、「流口水（よだれを垂らす）」、「馋（口惜しい）」、「羡慕（羨ましい）」の因果関係による意味拡張が成り立つ。

本章では、日中の手話表現の語義の拡張のプロセスを、認知言語学視点からメトニミーとその認知的機能の根底にある「参照点能力」に関わる認知機能の観点から明らかにした。日本手話の場合には、基本的に参照点とターゲットを相対的に変化させ、概念的支配域を拡張することによって、語義を拡大していく。これに対し、中国手話は、日本手話より参照点とターゲットを相対化して変化させることは少ないので、概念支配域は日本手話より

狭く、語義の拡大も限られる。本章では、さらに修辭的な認知能力に基づく日中の手話表現の意味拡張の諸相を明らかにした。日中の手話表現の意味拡張の差異や一致の根底には、メタファーとメトニミーに関わる修辭的な認知能力が重要な役割をになうことが実証的に裏づけられた。

第五章 手話の空間運用について

手話は、コミュニケーション中で長い時間を経て発展してきた複雑な視覚空間言語である。音声言語と比べて、手話は手を通して空間でメッセージを伝える、視覚的な空間構造に基づく表現手段である。それゆえ、手話話者にとって、空間の利用は非常に重要である。本章では、先行研究を参考にしながら、手話における空間関係に基づく意味の創造性の問題を考察する。特に本章では、日中手話の比較により、音声言語と手話の空間認知とメタファーによる意味拡張の諸相を明らかにしている。

5.1 手話の空間認知と意味の創造性

手話に関する空間認知の問題について関し、Liddell (1995) は、アメリカ手話の心的空間を、real space (現実空間)、surrogate space (借用空間)、token space (象徴空間) の三つに分けている。real space (現実空間) は、現在と過去の二つアスペクトに関係する。surrogate space (借用空間) は、代理空間の視点変換 (ロール・シフト) に関係する。token space (象徴空間) は、指示対象は現場にいないときに使う空間であり、借用空間と類似する。また、McNeill & Pedelty (1995) は、ジェスチャー⁶の空間を concrete space (具象の空間)、referential space (参照の空間)、structural space (構造的空間) の三つに分類している。concrete space (具象の空間) は、現実世界の物理関係を描写する。referential space (参照空間) は、異なる空間を構築して指示対象のシフトを示し、同一空間の連続性を示す。structural space (構造的空間) は、新しいジェスチャーによる主題の転換であり、古いジェスチャーで主題の継承を表す。

また、Sutton-Spence & Woll (1999) は、イギリス手話で使う空間を topographic space (トポロジー空間) と syntactic space (統語空間) に分けられる。topographic space (トポロジー空間) は、位相的空間に関係し、現実世界の空間を手話で構築する空間である。syntactic space (統語空間) は、文法的機能をになっている。

王・張 (2012) のアメリカ手話の空間特性及び運用の研究では、現実の空間表現は現実世界の位置と空間関係を規定し、非現実の空間的運用は、主に手話の文法特性を反映する事実を明らかにしている。

⁶ ジェスチャーは、言語とは考えないが、私たちのスピーチや言語の中の一部と認められる。また、ジェスチャーの空間の特徴と運用も手話と類似している。

以下では、基本的には欧米の手話研究の成果に基づき、認知言語学における空間認知の観点から、日中手話の空間認知の諸相を分析し、主に空間の文法的機能と視点の問題を考察する。

5.1.1 日中手話の空間認知と意味の創造性

市田 (2005a) は、日本手話の空間には二つ異なる空間のフォーマットがあるとし、それらは「図式的空間フォーマット (diagrammatic spatial format)」と「観察者空間フォーマット (viewer spatial format)」の二つ概念に対応すると主張している。図式的空間フォーマットでは、表現主体の視点は固定され、俯瞰式の形で機能する。観察者空間フォーマットは、特定の場面に存在する個人の視点から描写する機能をにやう。両者の違いは、指示対象が同じ次元にあるかどうかで区別される。市田 (2005b) は、「話し手の身体は、聞き手と向かい合い、話している“話し手自身”のものであると同時に、描写された出来事に関する指示物と向かい合っている“観察者”のものであるという二重性を持つ」と指摘する。

また坊農 (2008) は、手話談話における視点概念と空間使用に着目し、手話に関するテキスト教材、ビデオ教材などをデータとして分析を行ない、手話話者が空間に登場人物を配置することを明らかにしている。視線と身体の方角変化は、表現者のロール・シフトを達成し、同時に表現者がイメージする表現空間の回転も引き起こす。しかし、空間の回転があるにもかかわらず、それまでに構築してきた登場人物の座席位置関係が変わってない状況も存在する。また、手話表現における同一単語の表現形態の差異は、表現主体の表現空間管理の度合いによるものであり、それらが表現者の所持している視点の現れである事実も存在する。また、表現空間 (発生したことを空間で再現する) に会話空間 (現時点の手話で語っている現実空間) を融合する状況も考えられる。

一方、中国手話の空間認知の諸相に関し、李・呉 (2015) は、2 人の手話話者を研究対象にして、手話で六つの文章の表現を研究データとして実験を行なっている。またこの研究では、「空間の参照」は、空間の運用と視点の転換を利用して、文章の内容をどのようにつながっているのかの分析がなされている。

データの分析からみて、中国手話話者は、まず体の前に、一つないしは一つ以上の空間を構築して、異なる指称対象を表現する。例えば、手話話者は、体の前に二つの空間をつくって、右の空間は兄、左の空間は弟を指す。手話話者は文章の中に、兄と弟を 2 回目言及したとき、その対応的空間を手話で表現し、指示語を再び説明する必要はない。聞き手

には、その動作がどの指示対象から発話することがわかる。さらに、中国手話話者は同一空間を利用して、異なる概念を示すことができる。ここには二つ状況が存在する。①一つは、同一空間をいくつかの部分空間に分ける状況である。例えば、指で空間を分けて、順序と方向を示し、指で文と文の意味関連を示す。②もう一つの可能性は、中国手話の文章の中に、回転空間が存在する場合である。この場合には、目、眉、体の動きなどの非手指要素が、文法の働きを担っている。この文法の働きは、実験の中で登場人物の転換は目つきの変化によって規定される。

手話話者は、常に多くの指示概念を異なる空間で表現する。ただし、文章の中で異なる内容のつながりが緊密になり、登場人物同士の行動が顕著な場合は、異なる指示対象を同一空間で表現する。中国手話では、「話題-説明」の構造の中に明らかな文法標記はない。しかし、話題と説明の関係は間をとって表現する。ある場合には、非手指要素の特徴によって、「話題-説明」を完成する。(例えば、眉を上げる、首を傾げる、といった表現による。)

李・呉(2015)は、中国手話の空間運用とロールシフトについて、以下の三つの結論を提示している。

- (1) 中国手話における空間の運用には二つの状況がある。一つは、同一空間をいくつかの部分空間に分けられる状況であり、もう一つは回転空間が存在する状況である。前者は、固定の視点で指示対象に特定の空間を割り当てる。後者は目つき、体の移動など文法標記によって心理空間の変化を表現し、異なる指示対象を識別する。
- (2) 中国手話の「空間指示」の場合、登場人物の視点と観察者の視点は、二つの基本的な視点が存在する。この場合、前者の視点の方が使用頻度は高い。なぜならば、この視点は、表現主体を文章の重要性や表現効果と密接的に関わっているからである。
- (3) 文の主語と時間枠組みを話題要素として文章の中に存在する場合、「空間の指示」は指示対象の導入や時間場面の設置などを通じて、文章のつながりを完成する。

登場人物の視点は、手話話者(発話者)が自分の体で叙述対象の動作と行為を模倣する。登場人物の視点は指示対象の転換だけでなく、特徴(人物の感情、態度、表情)の転換も含んでいる。観察者の視点は第三人称で指示物を客観的に叙述する。

以上の日本手話と中国手話の先行研究には、それぞれ空間の特徴が見られる。手話の空間特徴と運用の研究(Liddell(1995)、McNeill&Pedelty(1995)、Sutton-Spence&Woll(1999)、

王・張 (2012)、小藺・木村・市田 (2003)、市田 (2005a)、李・呉 (2015)) では、空間の種類に関する分類は必ずしも一致しないが、基本的には、手話に関わる空間は、現実空間と非現実空間の二つに分けられる事実を明らかにしている。現実空間は、現実世界の物理的空間関係を描写し、非現実空間は、空間で指示し文法の意味を表現する。視点概念の表現に関しては、日本手話には、図式的空間フォーマットと観察者空間フォーマットが存在する。中国手話には、固定の視点と回転の視点以外に、登場人物の視点と観察者の視点も存在する。また、日中手話で存在する観察者の視点は、同一空間で観察者の視点から、対象世界や登場人物の叙述を行う。この二つの概念は、Mcneill (1992) が指摘している「観察者の視点」(observer view point, OVPT)と同じ種類の表現であると考えられる。

また、日本手話で、話し手自身と観察者の二つが同時に表現できるのは、視点の二重性に拠るものと考えられる。一方、中国手話には、二重の登場人物の視点が存在する。日中手話の視点概念は類似しているところもあるが、相違も認められる。なお、視点概念に言及した場合、文法的機能を持っている非手指要素の表現も重要である。

5.2 日中手話の空間認知

手話は、空間を利用して表現するものなので、位置づけと空間運動を通して表現する空間のメタファーも広範に存在している。本節は、手話における空間の認知の問題を考察して、日中手話の比較から、音声言語と手話の空間認知の問題と空間のメタファーによる意味拡張について考察する。

空間メタファーは、空間概念を起点領域から他の領域への写像する変換プロセスである。例えば：上下、左右、前後の空間概念から時間領域への写像はその典型例である。中国では、内外の空間関係から呼び方の親疎を表現する。以下の図 5-1 のようなメタファーによる表現は、われわれの一般的な空間の認知のメタファーによる意味拡張と考えられる。

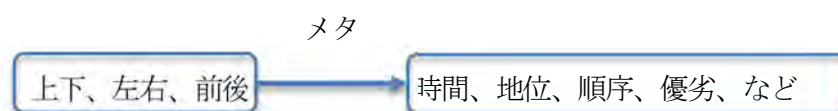


図 5-1

基本的に、空間は時間を比喩的に構築する。時間の認知は空間のメタファーで表現することが多い。Liddell (1990) は、時間領域への写像は空間認知に基づいている事実を指摘し

ている。また、空間から時間への比喩的な写像を考察した李 (2014) の研究では、中国語母語話者が使うジェスチャーを研究対象として、時間と空間のメタファー表現を、①過去は前、未来は後 ②過去は後、未来は前 ③過去は左、未来は右 ④過去は上、未来は下、四つのタイプに区分している。中国語の空間のメタファーによる時間領域への写像は、前後関係に基づく例が一番多く、次は上下、そして左右である。

以下、本節では、手話における空間のメタファーによる意味拡張（特に、時間領域への意味拡張）を、日中手話の時間の認知の差異と音声言語と手話の時間認知の差異との関連で考察していく。

5.2.1 <上・下>の認知と意味拡張

山梨 (2012) では、空間に関わる経験が、認知主体の主観的な解釈を反映する様々な次元によって分類されている。特に、上・下の次元は、日常言語の意味の比喩的な拡張を可能とする経験的な基盤として重要な役割をになっている。Lakoff and Johnson (1980) は、上・下の次元が量、質、感情、等の意味を比喩的に特徴づけると指摘している。手話の中にも上・下の方向を利用して、増減、優劣、感情などの意味を比喩的に特徴づける表現が存在する。

山梨 (2000) は、上・下の次元から抽象的な概念への写像を、以下の表 5-1 のようにまとめている。

表 5-1 (山梨 2000 : 169)

<上>	増	良	幸	理性	支配	繁栄	尊大
<下>	減	悪	不幸	感情	被支配	没落	謙虚

日本語では、<上・下>のメタファーによる抽象的な概念への拡張は次の例に見られる。

例：収益が上がっている

製品の質は下がっている

彼は上機嫌だ

話を知的レベルまで上げよう

彼は山田氏の支配下にある

商売が上向きになった

(山梨 2000 : 169)

中国語の<上・下>に関する研究としては、張 (2001) は、時間、数量、社会的地位と等級、質的レベル、抽象的位置の五つを分けている。

例：時間：上午-下午（午前-午後）、早上一晚上（朝-夜）

数量：犯罪率不断上升/下降（犯罪率が上がる/下がる）

社会的地位：上级-下级（上級-下級）、上等人-下等人（上流の人-下流の人）

質的レベル：老李的水品在我之上（李さんのレベルは私より上である）、上品-下品（上等品-低級品）

抽象的位置：他心理上对此难以接受（彼は心理的にこのことを受け入れがたい）

(張 2001 : 52)

日本語と中国語の場合、<上・下>に関する物理的認知や経験はほぼ同じであるので、メタファー表現も類似している場合が多い（例えば：時間、数量、質的レベル、社会関係などへの写像）。

以上は日本語と中国語の<上・下>の関係に基づくメタファー表現の事例である。手話の場合、上・下の位置と空間運動を通して、意味はどのように拡張していくのだろうか。日中手話の例を挙げながら、この意味拡張の問題を考察していく。

日中手話の辞典は、上・下の表現を図 5-2、5-3 のように示している。

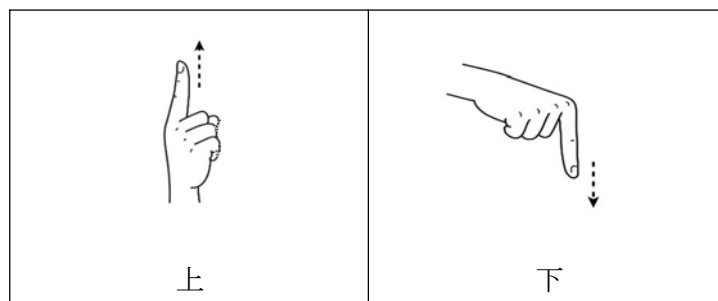


図 5-2 中国手話の「上・下」

1、主に人名、地名等の漢字に対応する表現		
<p>現主^上 主に人名、地名等の漢字に対応する表</p>  <p>右手2指を直角に伸ばし、人差指を上に向けて上げる</p> <p>(五級)</p>	<p>現主^下 主に人名、地名等の漢字に対応する表</p>  <p>右手2指を直角に伸ばし、人差指を下に向けて下げる</p> <p>(五級)</p>	
2、主に年齢、技術、身分が上位であることを示す表現		
<p>主^上 主に年齢、技術、身分等が上位であることを示す表現</p>  <p>右手甲を上に向けて上げる</p>	<p>主^上、先^上 主に年齢、技術、身分等が上位であることを示す表現</p>  <p>右手掌を上に向けて上げる</p>	<p>主^下 主に年齢、技術、身分等が下位であることを示す表現</p>  <p>右手掌を下に向けて下ろす</p>
3、主に方向を示す表現		
<p>主^上、上^上の方^{ほう} 主に方向を示す表現</p>  <p>立てた右手人差指を上に向けて上げる</p> <p>(五級)</p>	<p>主^下、下^下の方^{ほう} 主に方向を示す表現</p>  <p>右手人差指を下に向けて下げる</p> <p>(五級)</p>	

図 5-3 日本手話の「上・下」

以上の図に示されるように、日本手話では、上・下の方向と運動を通して意味を伝えるが、手の形、掌の方向によって上・下に関する意味を区別している。

本節は、日中手話では、空間の方向と運動によって、上・下の認知とその意味拡張を明らかにしていく。また、音声言語と比べて、日中手話の上・下によるメタファー表現はどのように表現しているかを、以下の三つの概念領域への意味拡張との関連で分析していく。一つは、空間領域から時間領域への写像、一つは空間領域から社会関係・地位への写像、

もう一つは空間領域からさらに抽象的な領域への写像である。抽象的な領域における手話表現に関しては、主に知覚表現、感情の観点からの分析を行う。

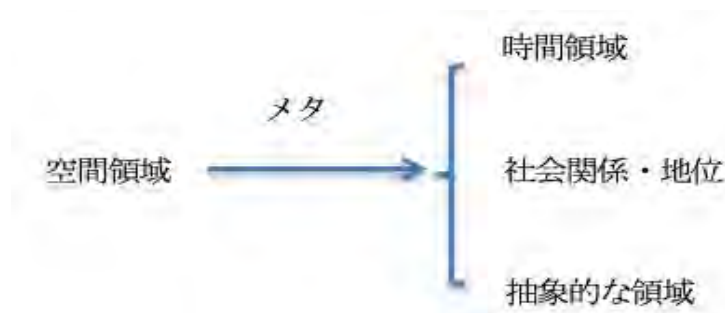


図 5-4

日中の手話では、〈上・下〉の空間運動で時間を認知することができると考えられる。また、空間領域から時間領域への写像は下記通りの三つの形が存在する。

A:時間領域

(1) 時間

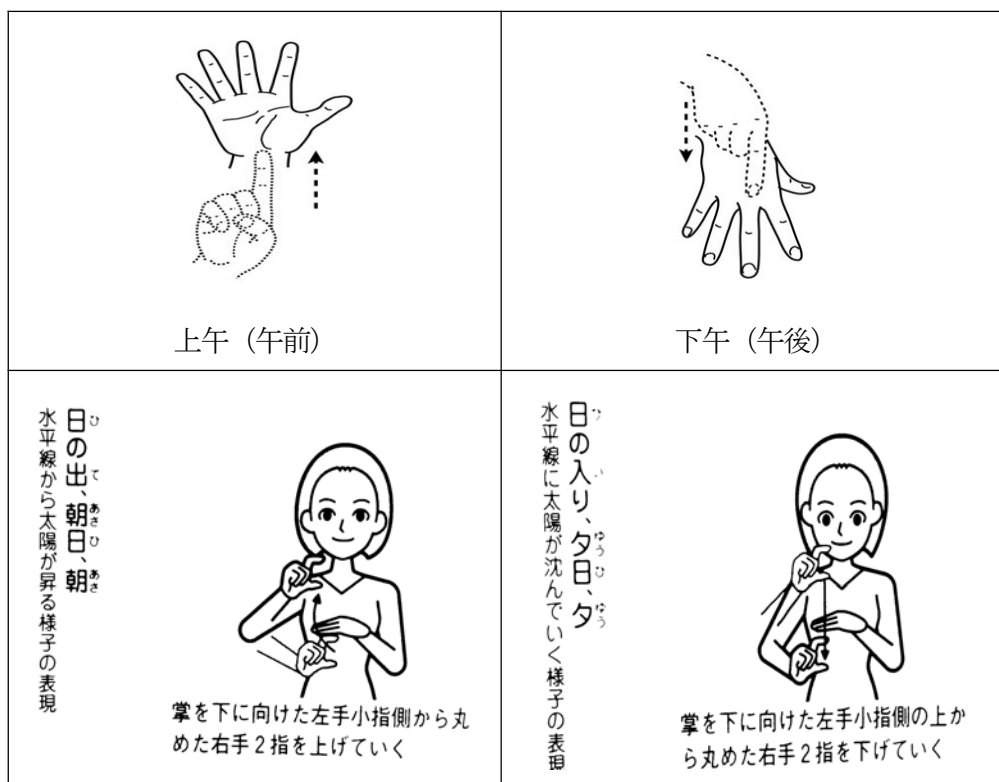


図 5-5 「上午・下午・朝・夕」

日本手話と中国手話では、上・下の空間運動で「上午（午前）、下午（午後）」、「朝、夕」の時間を表現している。太陽が昇る様子と沈む様子を上・下で表現される。空間で過去と未来の時間概念を考えれば、ここには「上午（午前）、下午（午後）」と「朝・夕」の時間から、「過去は上、未来は下」の認知が認められる。

(2) 人の成長に基づく時間の認知



図 5-6 「成長・成長」

日中の手話では、下から上へ上がる動作で成長の意味を表現する。人間の成長は下から上へだんだん高くなる。また、日中手話では、子供、少年、大人の手話表現も成長の経験に基づき、手の上・下の位置によって各段階の高さを表現する。このような成長の経験に基づき、日中手話では、「過去は下、未来は上」の時間概念を示す。

植物の生長に基づく時間の認知

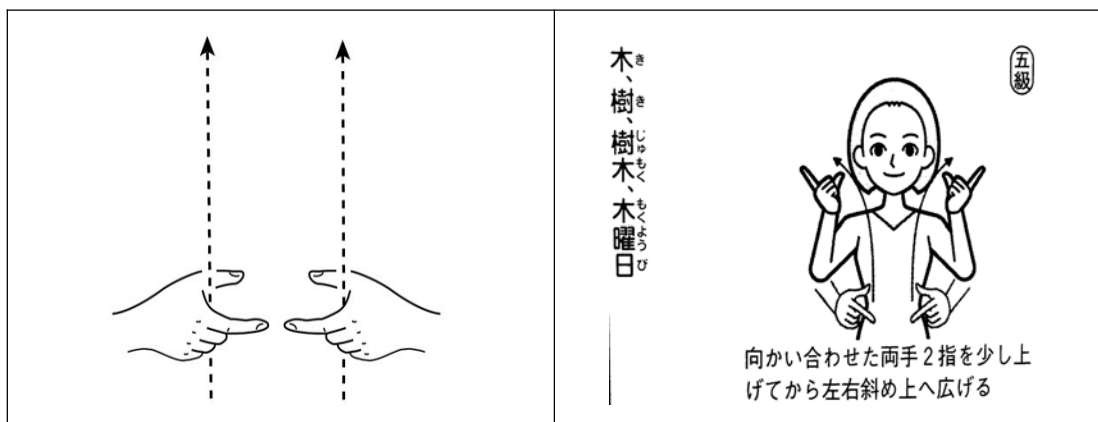


図 5-7 「樹木・木」

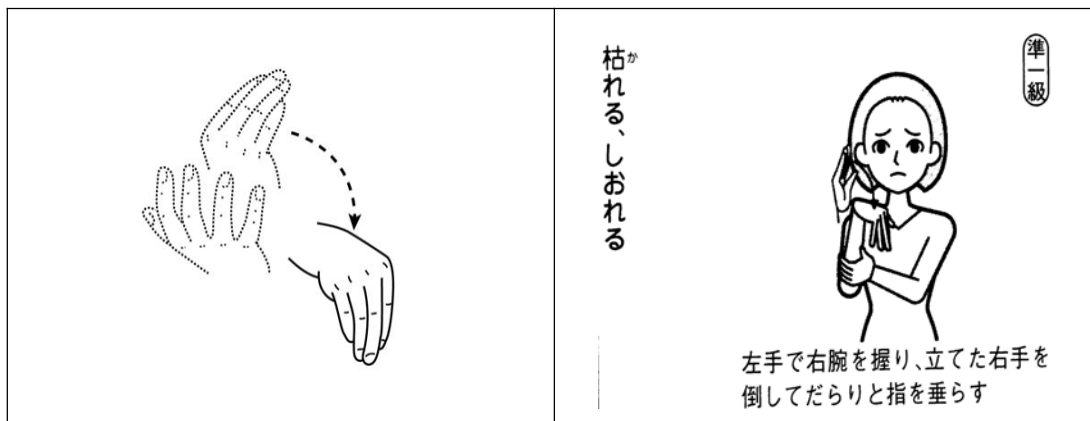


図 5-8 「枯萎・枯れる」

手話では、木の生長や花の生長の最後段階のイメージを写像して、手話語彙を構成する。この場合には、植物の成長経験から、「生長・枯れる」は「生・死」と連想でき、「過去は上、未来は下」の認知が認められる。また「生長」自体から見れば、芽生えという上方への成長は、「過去は下、未来は上」の認知が認められる。

(3) 順序の時間概念

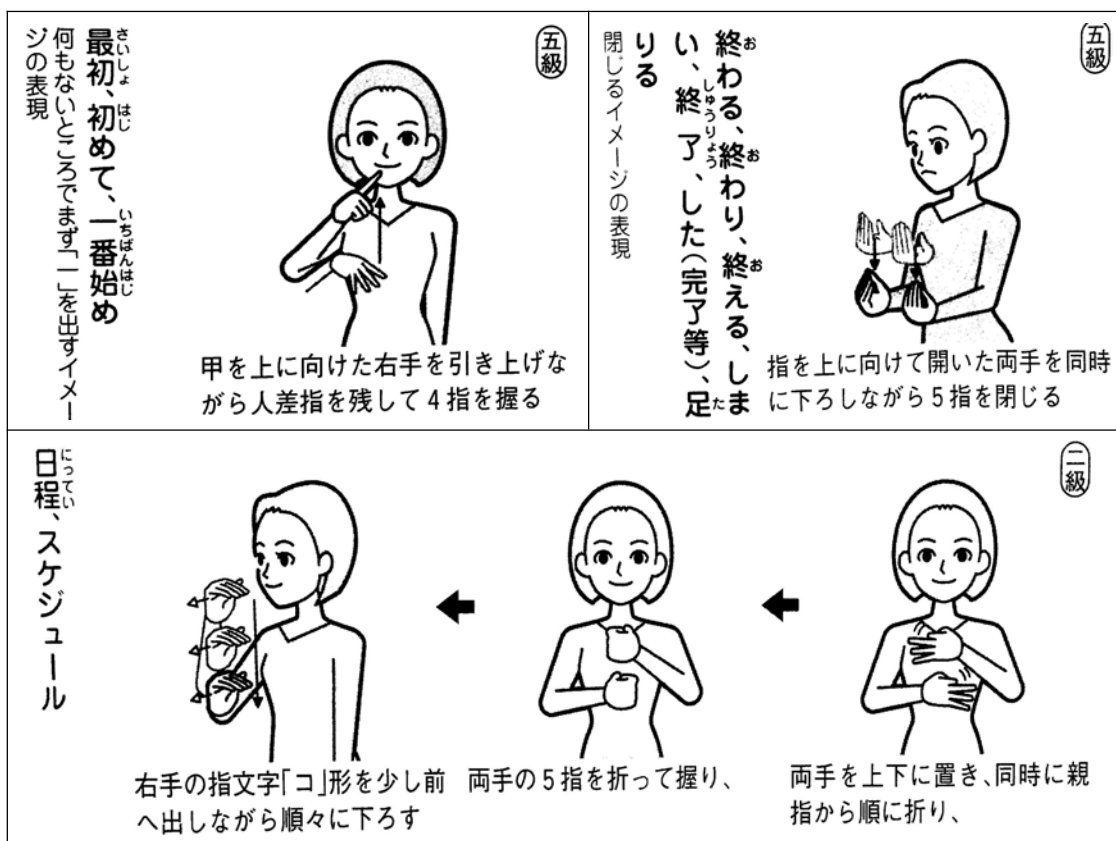


図 5-9 「最初・終わり・日程」

日本手話では、「最初は上、終わりは下」の表現に関し、「過去は上、未来は下」の時間概念が見られる。この例では、日程の手配の順序を上から下への運動で事件発生の時間順序を表現していると考えられる。この場合も、「過去は上、未来は下」と考えられる。

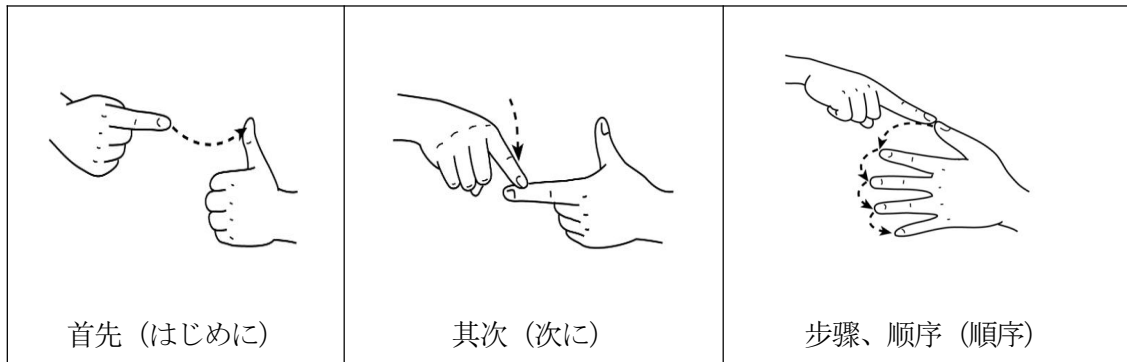


図 5-10 「首先・其次・順序」

中国手話では、親指から小指の順序で上から下への運動を表現する。この種の表現は、時間の順序を表現している。また、中国手話では、年(年)、始終(終始)などの時間表現も上から下への運動で表現されて、この場合にも「過去は上、未来は下」の時間概念が認められる。

B: 社会関係・地位

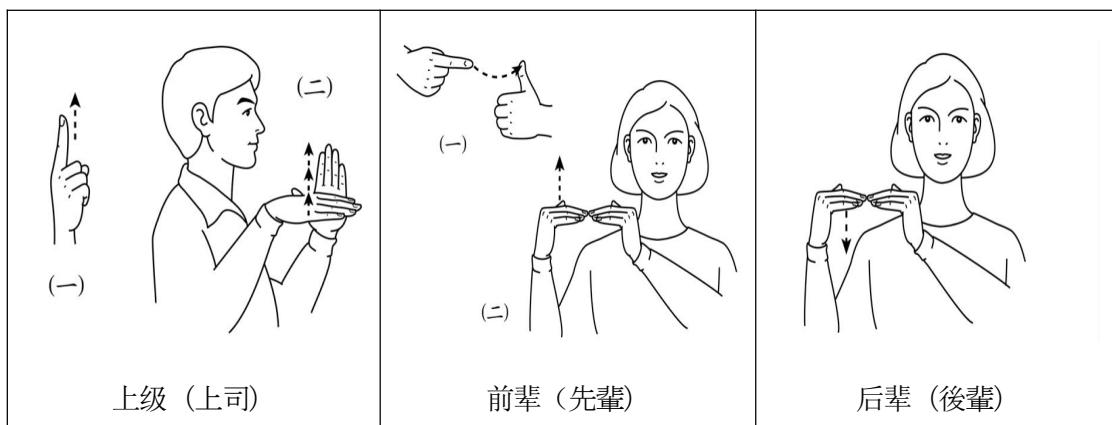


図 5-11 「上级・前辈・后辈」

中国手話では、「上级(上司)」を表現する場合、二つの動作から組み合わせる。一つは「上」の方向と動き、もう一つは級・レベルの動作である。〈上〉は理解しやすいが、階段のように一段一段、上へ上る動作がここでは重要な役割をになう。階段は、会社の組織図

の階層のような等級を示す。上に立つ人は、地位が高い人と考えられる。そして、先輩と後輩の語彙は、音声言語では前・後と考えるが、手話では、上・下と関わっている。身体の肩の部分参照点とする場合、「肩から上への動く」は先輩、「肩から下への動く」は後輩で表現される。この場合、日本手話では「親指を立てる」；中国手話では、「右手の人差し指で親指への指す」は、敬意を表す意味がある。

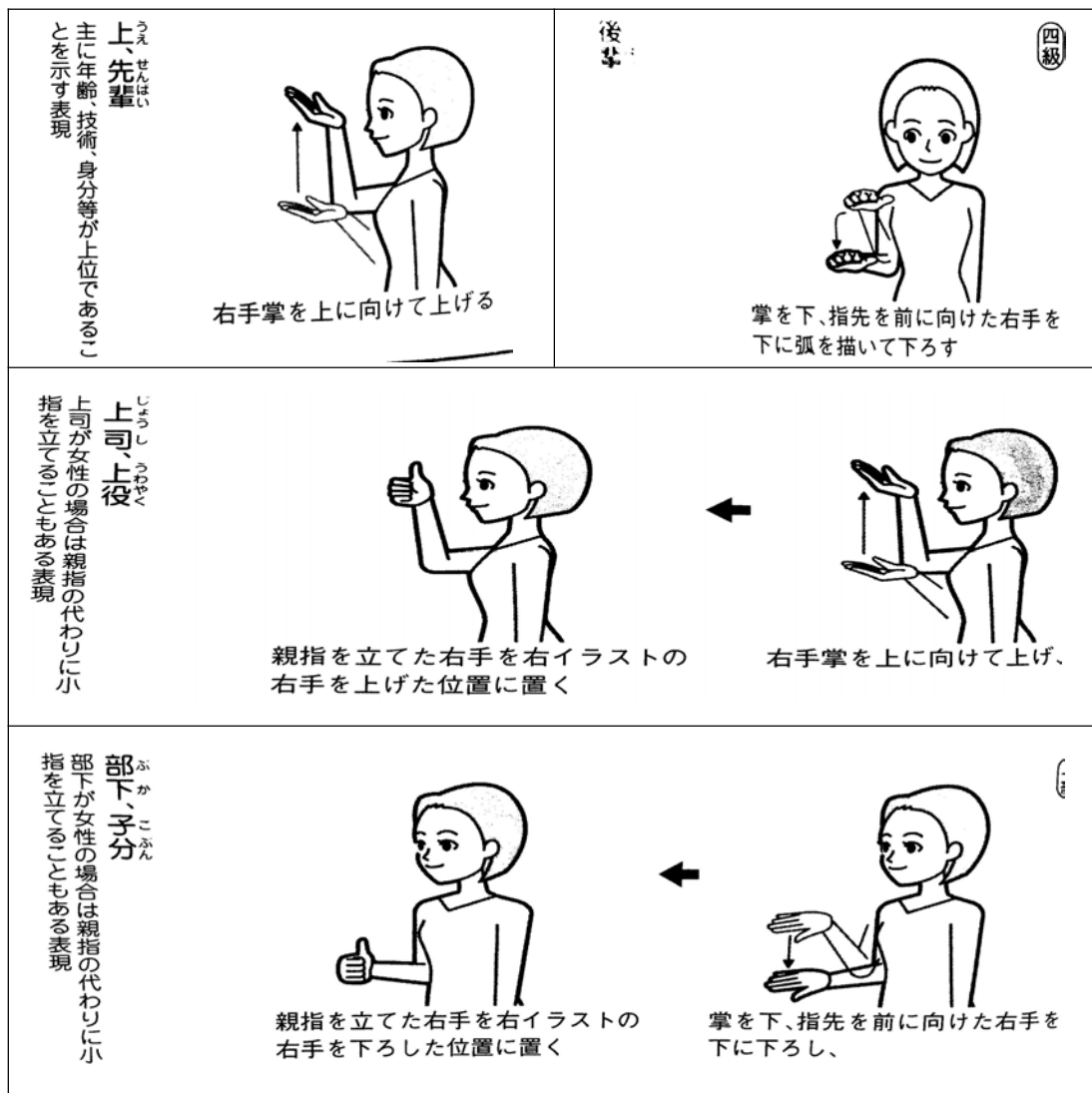


図 5-12 「上司・部下・先輩・後輩」

日本手話の場合は、掌の上・下の向きと上・下の位置・運動での表現は、上司と部下、先輩と後輩を表現する。日中手話でも、＜上・下＞による空間位置・運動を起点領域から社会関係・地位を目的領域とする比喩的写像が認められる。

C: 抽象的な概念 (感情)

<p>偉い、主な、長、親分、ボス 偉い人が女性の場合は親指の代わりに小指を立てることもある表現</p>  <p>右手の親指を立て、上へ上げる</p>	<p>正しい、正直、真面目、正当</p>  <p>つまんだ両手2指の指先を胸で上下につけ合わせ、右手を上げる</p> <p>(三級)</p>	<p>尊敬「する」、尊重「する」、敬う、尊ぶ、仰ぐ(尊敬等)、顔を立てる、リスベクト</p>  <p>左手掌に親指を立てた右手をのせ、頭を少し下げて上へ上げる</p> <p>(準一級)</p>
<p>素晴らしい、すてき、上手、いい、成功「する」</p>  <p>鼻にあてた右手拳を右方斜め上へ素早く動かす</p> <p>(二級)</p>	<p>不良(不品行等)、駄目な人、卑しい、悪い、悪質 手癖をかむ動作、乱暴で理不尽な様子の表現</p>  <p>右手親指で鼻先をはらう</p>	<p>下品</p>  <p>左手掌へ親指を立てた右手を落とす</p> <p>(二級)</p>

図 5-13 日本手話の場合



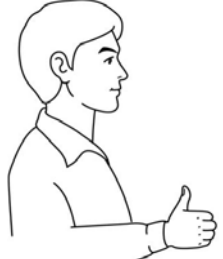
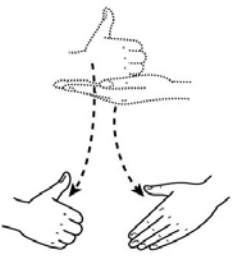
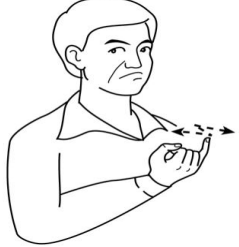
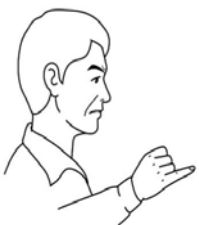
  <p>(二)</p> <p>尊敬 (尊敬)</p>	  <p>(二)</p> <p>崇高 (気高い)</p>	 <p>好 (良い)</p>
 <p>不尊重 (侮辱)</p>	 <p>卑鄙 (卑しい)</p>	 <p>坏 (良くない)</p>

図 5-14 中国手話の場合

日本手話でも、中国手話でも、手の形、位置と方向、動きの〈上・下〉により、良、悪、尊敬、侮辱などの抽象的な概念への写像は多く存在している。抽象的な概念（特に感情、気持ちを抱く場合）、中国手話では、上・下の運動や親指と小指でプラスの意味とマイナスの意味を区別できる。〈上〉は良い、プラスの意味、〈下〉はよくない、マイナスの意味への写像が多い。そして、親指と小指の順序と位置の関係で表す意味が異なっている。例えば、親指を立てる場合、良い、すてき、素晴らしいを意味する。小指を立てる場合、小さい、劣る、低いレベル等を意味する。日本手話では、親指で男性、小指で女性を指すが、他の概念への意味拡張はない。一方、日本では、鼻に関する慣用表現が多い（鼻が利く、鼻が高い、鼻が曲がる、鼻であしらうなど）ので、日本手話では、鼻を参照点として、上・下への動きでいい意味、悪い意味を表現できる。また、「尊敬」の手話は、日中に類似しているが、社会文化の原因で敬意を異なる形で表現している。

5.2.2 〈前・後〉の認知と意味拡張

〈前・後〉の認知の観点からみた場合、日本語と中国語では、時間、順序、社会関係・地位への写像は、前・後の普遍的な意味拡張と考えられる。

中国語の場合：

時間：前天（一昨日）、后天（明後日）、前期（前期）、后期（後期）、

順序：前一个（前の一つ）、后一个（次の一つ）

社会関係：前辈（先輩）、后辈（後輩）

日本語の場合：

時間：直前、直後、以前、

順序：前の方、後ろの方、行列の前/後ろ

社会関係・地位：先輩、後輩、前首

中国語でも、日本語でも、方位を表す以外、主に時間領域への写像の使用度はかなり高いと思われる。また、空間を通して時間概念の理解には、時間を空間移動により捉える概念メタファーは二種の形があり、一つは自己運動モデル (ego-moving model)、もう一つは、時間運動モデル (time-moving model) である (Lakoff 1989)。この二種は共に直線モデル

(Linear Model) と似ている。Yu (1998) では、空間から時間を捉えるメタファーのモデルは直線モデル (Linear Model)、サイクリックモデル (Cyclic Model)、螺旋形モデル (Spiral Model) の三つがあるとしている。また、董 (2018) の研究は、中国語には、時間運動モデル (time-moving model) と自己運動モデル (ego-moving model) 以外に、時間と自己の運動方向が一致しスピードが異なる同時運動モデルがある、という事実を指摘している。また、この研究では、向き、方向によって時間を未来でも、過去でも認知できる事実を明らかにしている。

表 5-2 (董 2018 : 28 (筆者訳))

時間の認知モデル	観察者の向き方向	例
時間運動モデル	将来	将来 (将来)、過去 (過去)
	過去	昨天开会前, 张三打扫了教室。 (昨日、会議前に、張さんは教室を掃除した)
自己運動モデル	将来	前程 (前途)、前途 (将来)、前景 (見込)
	過去	回顾 (回顧する)、回首 (回想する)
(時間・自己) 同時運動モデル	将来	提前 (早めに)、落后 (遅れる)
	過去	追忆 (追憶する)、追溯 (遡る)、追念 (追想する)

以上の先行研究に基づき、前後に関する時間概念の認知を以下のように考えてみる。

時間運動モデル : 人を参照点として静止している状態、時間は川のように流れる動く状態。

(1)

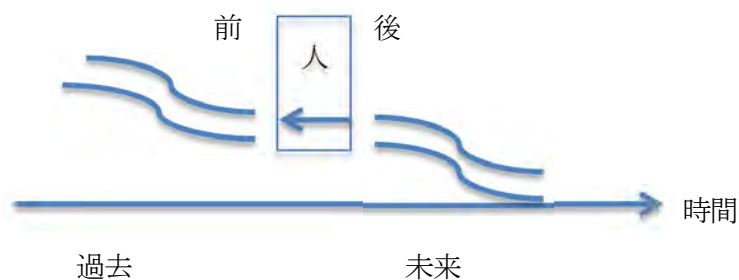


図 5-15

図 5-15 に示されるように、人の身体や思いは過去に向けて、過去を振り返るとき、過去は前、未来は後ろと考える。この場合には、追憶する、追想する、ふりかえるだけでなく、その時点を追う意識がある。時間が流れる間、過去に向かう。董 (2018) は、この二つの例を時間・自己同時運動モデルと考えるが、筆者は、過去に向いている状態の時間運動モデルと考える。

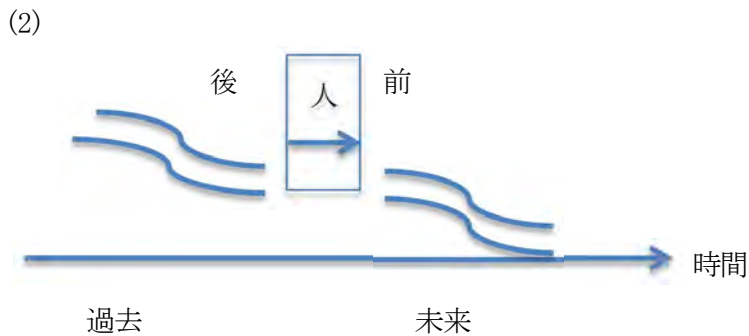


図 5-16

図 5-16 は、人の身体や思いは未来に向けて前向きであり、過去は後、未来は前になる。前述の (1) と (2) は、人の向き方向によって、前後は過去でも未来でも認知することができると思われる。

自己運動モデル：人（主体）が時間軸上を過去から未来へ移動する

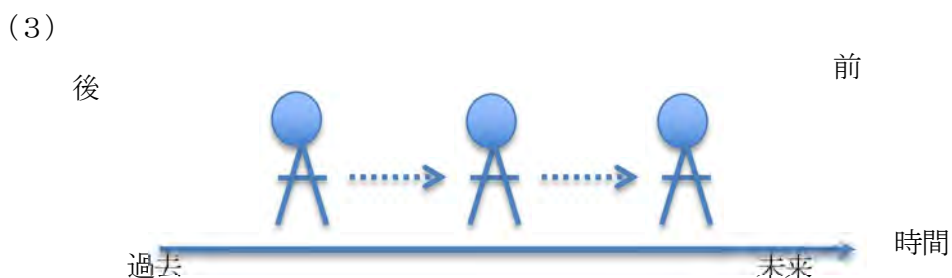


図 5-17

時間を参照点として、人が将来（前）へ移動する。この場合には、前は未来、後ろは過去の時間概念が成り立つ。日本人でも、中国人でも、この二つのパターンで時間概念を捉えていると考えられる。

以下では、日中の手話辞典のデータに基づいて、日本手話と中国手話を考察していく。
 この種の手話における前・後の認知は、方向と移動を表現する以外に、主に時間領域への
 意味変化も表現する。この種の表現は、以下の図に示される。

<p>明日、明日、翌日、次の日</p> <p>顔脇に立てた右手人差指を前へ出しながら倒す</p> <p>明日</p>	<p>将来、将来、前途、事後、間等、今後、後何時</p> <p>顔の脇に掌を前に向けて立てた右手を前方へ出す</p> <p>将来・前途</p>	<p>これから、今後、以後、以降</p> <p>両手甲をつけ合わせ、右手を前に真っ直ぐ出す</p> <p>これから</p>
<p>きのう、昨日</p> <p>顔脇に立てた右手人差指を後に向けて倒す</p> <p>昨日</p>	<p>おととい、一昨日、二日前</p> <p>顔脇に立てた右手2指を後に向けて倒す</p> <p>一昨日</p>	<p>以前</p> <p>左手掌に右手甲をつけ合わせ、右手を手前に引く</p> <p>以前</p>

図 5-18 日本手話の場合

<p>将来 (将来)</p>	<p>远见 (見通し)</p>	<p>前途 (前途)</p>
<p>过去 (以前)</p>	<p>前天 (一昨日)</p>	<p>刚刚 (たった今)</p>

図 5-19 中国手話の場合

以上に示される日中手話の場合、前は未来、後ろは過去の認知が認められる。日中手話でも、肩や左手を参照点として、前への動きは未来、後ろへの動きは過去と認知している。

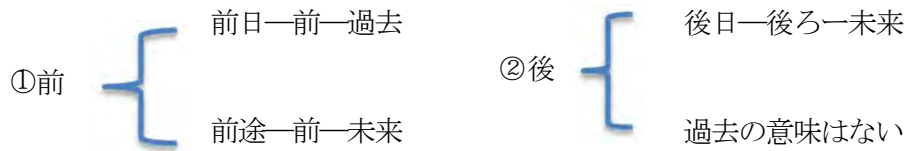


図 5-20 <音声言語の場合>

音声言語では、以上の①②の表現は日中で類似している。手話の場合、前日は過去のことを意味するので、後ろへの運動で過去のことを指す。後日は未来のことを意味するので、前への運動で未来のことを指す。

また、日中手話では、時間・自己同時運動モデルを反映する表現も存在する。

(時間・自己) 同時運動モデル：

(5)

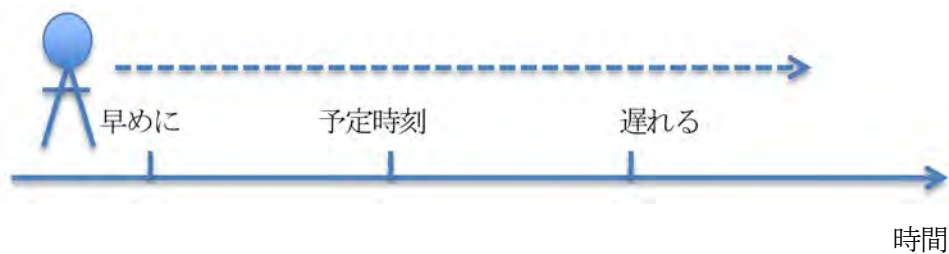


図 5-21

(時間・自己) 同時運動モデルは、予定時刻が参照点になり、時間と自己は同時に運動しているものと理解される。なおこの場合、時間と自己の運動のスピードが異なる。この理解のもとに、早めにと遅れるという状況を認知的に規定することが可能となる。

③ 提前 (早めに) 落后 (遅れる)

事件の発生は、予定より早く (遅れる) 完成する。時間はずっと流れていくが、自分がスピードを控えて動作する。

提前（早めに）：自己運動スピード > 時間流れるスピード

落后（遅れる）：自己運動スピード < 時間流れるスピード

図 5-22

③のように、人（自己）と時間が同じ方向に移動する場合、「早めに」と「遅れる」の状態になるのは、人（自己）と時間のスピードが異なるからである。手話の場合には、<早めに、遅れる>のような表現は、日中手話には存在するが、非対称的に存在する点に注意する必要がある。

日本	速いスピード	<p>打ち合わせ、事前協議、打ち合わせをする、事前相談</p> <p>両手親指を立て、左右から2回軽くつけ合わせる</p> <p>立てた右手掌を後に向けて軽く引き</p>	<p>急ぐ、急げ、早くしろ、急ぐ、急せ</p> <p>右手2指をこすり上げて親指を立てる動きを連続する</p>
	遅いスピード	<p>遅れる（相手と離れる等）、ついていけない</p> <p>立てて前後に置いた両手人差指を前後に引き離す</p>	<p>遅い、遅れる（一定時間等）、過ぎる、過ぎる、オーバー（過ぎる等）</p> <p>右手小指側を左手甲の親指側にのせて小指側へ押し出す</p>
中国	速いスピード	<p>提前（早めに）</p>	<p>提前（早めに）</p>
	遅いスピード	<p>(一)</p> <p>(二)</p> <p>推迟（時間を延ばす）</p>	<p>(一)</p> <p>(二)</p> <p>延期（延期）</p>

図 5-23

時間のスピードに関する手話表現は、(図 5-23 に示される例からみて) 日本手話では、「事前相談」の事前は、肩を予定時間の参照点として、肩の後ろは予定より早い時間を意味する。「急ぐ」は、スピードの速さの表現である。

日本手話には、「速い・早い」は、右手の2指のつまみを開きながら左斜め下へ素早く動かすという表現もある。「遅れる・ついていけない」は、両手の人差し指が距離を置く表現で、「スピードの遅い」を表現する。「遅れる・過ぎる」は、右手を左手の甲にのせて前へ動かす。左手を予定時刻と考え、主体のスピードが遅く、時間オーバーすることを意味する。一方、中国手話では、二つの「提前(早めに)」の表現は、左手を参照点の予定時刻として、後ろ、上への動かす動作で速いスピードを表現する。時間を延ばす、延期の表現は、左から右へ、左右軸の時間線で表現する。手話は、音声言語のように、対称的に表現していないが、ここには同時運動モデル認知が認められる。この認知に基づく時間の概念は、上・下、左・右、前・後の三つの空間に関わっている。

5.2.3 <左・右>の認知と意味拡張

董(2018)の研究では、事件軸と時間軸を組み合わせ分析する場合、横線は時間軸、縦線は事件軸という規定がなされている。事件は縦軸において、事件発生の前後順序によって排列する。そして、観察者は早期発生の事件に向かい、早期発生の事件は参照時間の前方に位置付けられる。後期発生事件は参照時間の後方に位置付けられる。この事件発生の前後順序は、時計の右回り方向で横軸(時間軸)に投射することができ、さらに早く発生する事件は時間軸の左に近く、遅く発生する事件は右に近い。したがってこの場合には、左から右、左は過去、右は未来の認知が認められる。

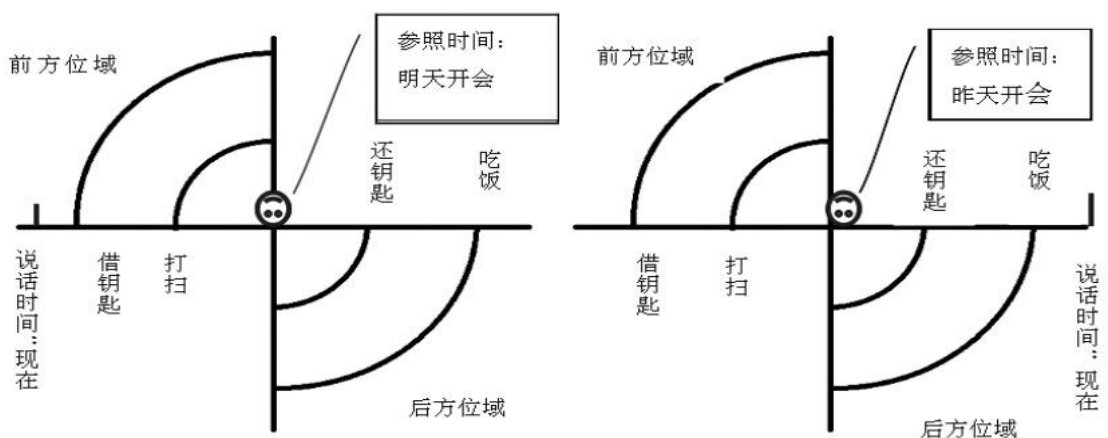


図 5-24 (董 2018 : 29)

以下では、左・右の認知とその意味拡張について分析する。左・右のメタファー表現は、中国の『現代汉语大词典』と日本の『大辞林 第三版』によると、中国語と日本語の場合、空間領域から抽象的な概念への写像は、方位の基本義、政治、地位、支配、順序、自分のそばを示すが、意味が必ずしも一致しない。例えば、社会地位を意味するとき、中国語では、左より、右の地位が高い。ただし、時代によって、左右の優劣は逆になる場合もある。日本語では、右より、左の地位が高い。また、中国語には、性格、程度を表す表現がある（空間領域から抽象的な概念、時間領域、数量領域への写像）。日本語では、左は酒好き、左は後述の文、右は前文の意味が認められる。

中国語の場合

政治：左翼-右翼

地位：左丞相-右丞相（左大臣-右大臣）

支配する：受～左右（～を左右される）

自分のそば：他的左右都是很聪明的人（彼のそばの者は賢い人である）。

性格：左脾气（妙な癖）

程度：十分钟左右，四十左右（十分間程度、四十ぐらい）

日本語の場合

政治：左翼-右翼

地位：左大臣-右大臣

支配する：運命/将来を左右する。

天候に左右される。

順序：左に述べるように。（右から左縦書きにした文面の左側、後述の文を示す）

自分のそば：左右の者に命ずる

酒好き：左党

音声言語の場合には、董（2018）は、事件発生の順序で左右軸の時間に投射して、「左は過去、右は未来」の時間認知ができることを指摘しているが、左・右に関する語彙の時間表現はほとんどない。しかし、手話の場合には、＜左・右＞のメタファー表現は、主に時間領域への写像である。左右軸の時間認知は音声言語より、普遍的であると考えられる。

日中手話の例を下の図に示す。

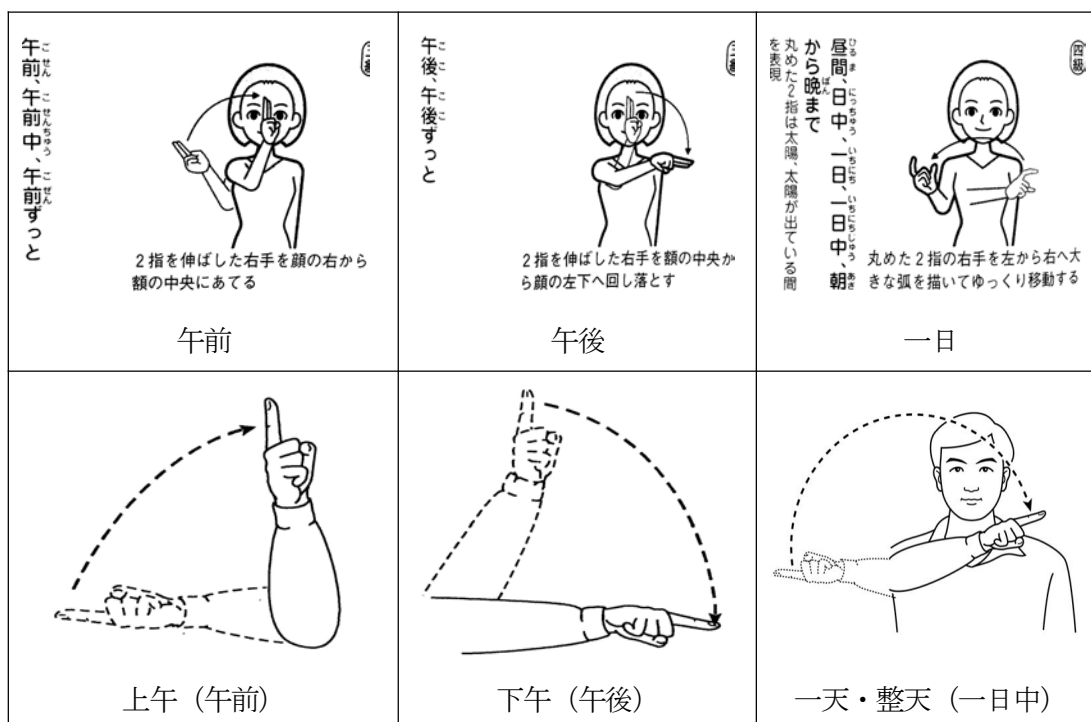


図 5-25 時間の表現

これらの例では、「一天・整天（一日中）」の手話表現は、中国の『国家通用手语词典』に収録されるが、「上午（午前）」、「上午（午前）」は、中国のチベットの手話にはよく表現される例である。日本と中国の手話では、「午前」、「午後」の手話は、太陽が東から昇り、西に沈む事態との関係で表現する。また右から左への表現には、一日の時間の流れの中に、右は過去、左は未来の認知が見られる。音声言語の中には、左・右で時間を表す表現はないが、手話の場合には、太陽の物理的運動軌跡によって、「左・右」のメタファー表現において時間領域への写像が成り立つ。ここには、「未来は左、過去は右」の時間概念が認められる。

また、空間方向の認知に関する李（2013）の研究は、外国の研究資料に基づき、空間方向の認知の差異を、脳の原因（左半球と右半球）と文化の原因（書方の習慣と感情の原因）を二つにまとめている。ここから、日中手話の左右の空間概念から時間概念への写像の差異を考えられる。日中手話では、「未来は左、過去は右」の認知は、太陽の物理軌跡に従う空間の認知である。日本手話には、これら以外の表現も存在する。例えば、「次、順番」と「一生」の手話表現がこれに相当する。



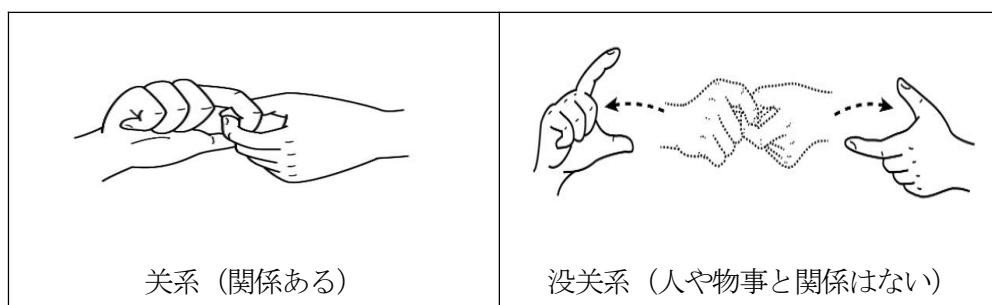
図 5-26 「次・一生」

日本手話の場合、右から左への移動は日本人が右から左への読む順序と書方の順序から考えれば、「未来は左、過去は右」の認知は、文化説に支持されているのではないかと筆者が考える。中国手話の場合には、左から右への時間表現は、前節の「推迟（時間を延ばす）」、「延期（延期）」の例は、「未来は右、過去は左」の時間を左から右への移動は読み方、書き方の習慣からなる表現であると考えられる。

5.3 手話の空間距離と心理距離

前節では、主に手話の上・下、前・後、左・右の空間領域から時間領域への意味拡張の諸相を考察した。手話でも、音声言語と同じく、空間の距離から、心理距離を表現できる。

空間認知には、上・下、前・後、左・右だけでなく、内・外、遠・近、中心・両側、リンク・ノンリンクの表現も存在する。特に、手話話者自身を参照点として、手と体の遠近と両手の間の空間距離で心理的表現が表せる。例えば、両手の距離を表現できるリンク・ノンリンクと中心・両側のスキーマによる表現は、以下の図 5-27、図 5-28 に示される。



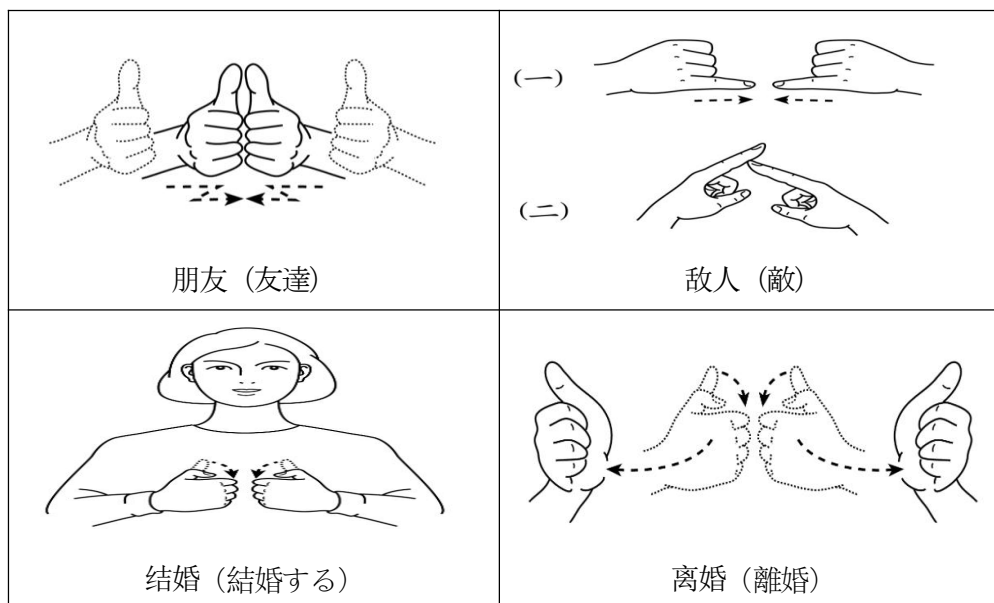


図 5-27 中国手話の場合

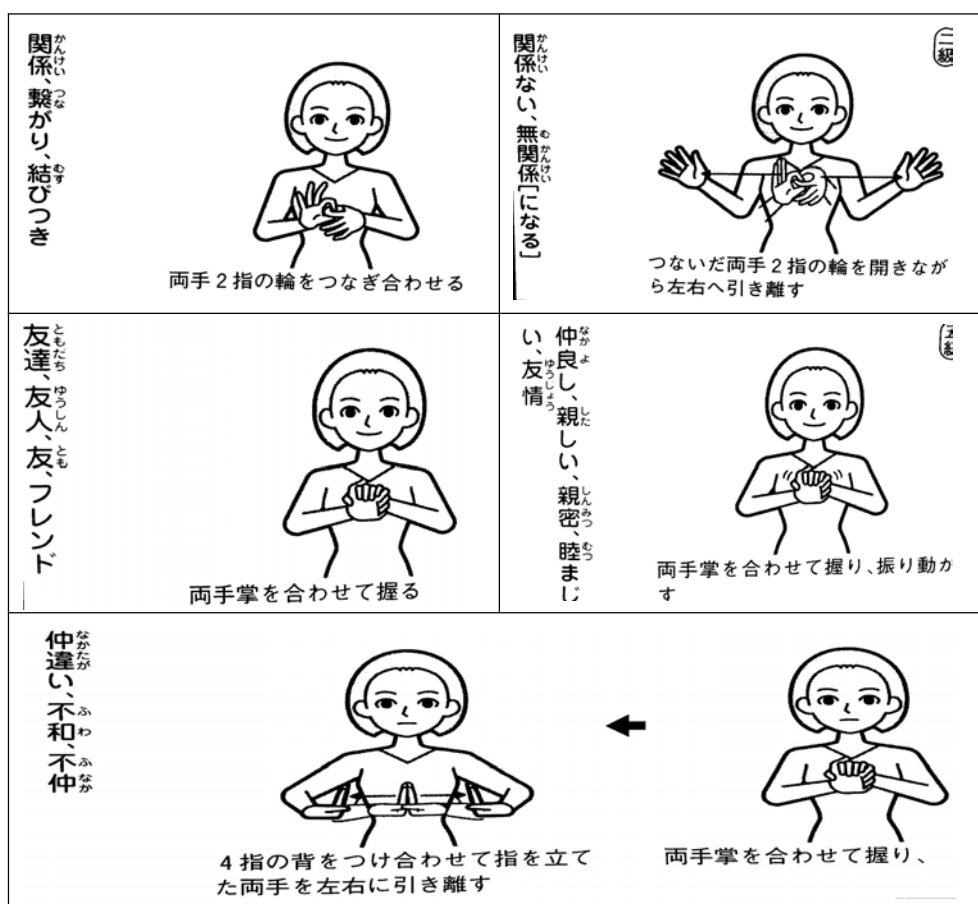


図 5-28 日本手話の場合

以上のような表現は、対称的な表現であるが非対称的な表現も存在する。「関係」と「関係はない」というような対称的な表現は「リンク・ノンリンク」と「中心・両側」のイメージスキーマを写像して表現する手話である。また、物理の関係から感情の関係を表現する表現もあり、両手の空間距離で、心理的な距離の遠近も表す。中国手話の「敵」の表現における、両手を両側から中心への動きは、方向だけでなく、小指のマイナス意味を含み対立の意味を表す。

また、「断る、受ける」の手話表現は、日中でも自分の体を参照点とする。この場合、体に向ける動きは、空間の近さから心理的距離の近いと考え、体から離れ、外への動きは、空間の遠さから心理的距離の遠いと考えられる。そして、日中手話において、手を境として、内・外を区別している点は手話の空間運用と認知の一つ特徴と考えられる。

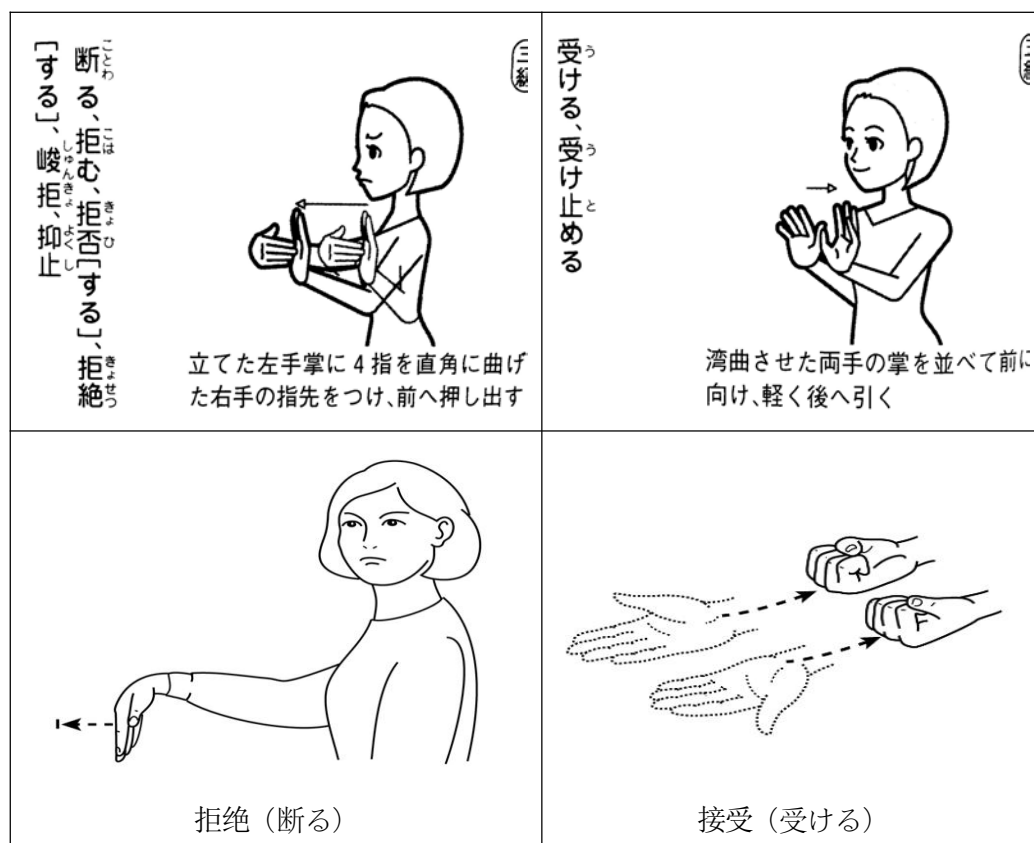


図 5-29 「断る・受ける」

以上の点からみて、空間のメタファーによる意味拡張は、手話の手の形、位置、動き、方向と深く関わっていることが明らかとなる。例えば、手の位置は頭の近くに動かすと、多くの場合、思想、知覚に関する表現になる（第三章、参照）。手の位置は、胸部の位置に

関係する。心を表現する場合、胸は主に心理活動と関わっており、そこに心理的距離が反映されている。

5.4 方向性動詞からみる手話の特徴

方向性動詞の研究は、日中手話の研究者たちが関心を持っている重要な課題の一つである。Friedman (1975) は、動詞の語義に基づき、多方向動詞と非多方向動詞を区分している。鳥越 (1991) は、Padden (1988) による動詞の分類 (屈折動詞、空間の動詞、無変化動詞) を日本手話に適用し、文法的現象を検討するとともに、日本手話の動詞分類の枠組みを再構築した。動詞を無変化動詞 (天候動詞、一項動詞、二項動詞、心理動詞) と変化動詞の二種に分けて、また変化動詞を以下の五つに分けられる。

①三項動詞 (「渡す」、「求める」、「教える」等)

動作主、非動主、主題をとる。動作の方向あるいは運動の位置で動作主と非動主を表示される。

②動作主—非動主動詞 (「見る」、「助ける」、「叱る」等)

動作主、非動作主をとる。動詞の方向あるいは運動の位置で動作主と非動主に一致。

③動作主—主題動詞 (「読む」、「こわす」、「作る」等)

動作主及び主題をとる。動詞は主題にのみ一致。

④相互動詞 (「挨拶する」、「離れる」、「会う」等)

関与する二者に一致する。

⑤位置動詞 (「行く」、「入れる」、「登る」等) 場所に一致する傾向が強い。

鳥越 (1991 : 12)

動作主は終点の場合、逆行動詞と呼ばれることもある。また、Padden の動詞分類に基づき、倪 (2007) は、方向性動詞を空間動詞、一致動詞、双方向動詞の三種を区分している。さらに倪 (2007) は、中国手話の方向性動詞の研究において、手話の動詞の 50% は方向動詞、50% は無方向動詞 (動作動詞、性状動詞、心理動詞、関係動詞) が認められるとしている。この場合、方向性動詞は以下のように分類される (倪 2007, 参照)。

A 空間動詞

①動作動詞「起点→目標」:

来、去(出)、到、进、等(来る、行く、着く、入る、など)

②性状動詞「動詞の運動方向による」:

飞、落、沉、丢、陷、涨、缩、等(飛ぶ、落ちる、沈む、捨てる、上がる、縮む、など)

B 一致動詞(人称一致動詞)

看、骂人、帮助、报告、反对、支持、爱、等(みる、しかる、助ける、報告する、反対する、支持する、恋する、など、)

①双一致動詞「看、骂」(みる、しかる)

一致動詞は、主語と目的語が一致する場合、主語が一人称であるか否かにより決まる。また動詞運動は、起点が主語、終点が目的語によって決まる。さらに運動方向は、受け身の現実の空間位置、あるいは心理空間の位置によって決まる。

②単一致動詞「建议、安慰」(提案する、慰める)

動詞は運動方向を通じて、主語と目的語が一致しなければならない。

③相互一致動詞「结婚、报告」(結婚する、報告する)

両手の手の形は、同じである。お互いに相手の起点と終点。

C 双方向動詞

①与える動詞:「给、递、报告、等等」(あげる、渡す、報告する、など)

②求める動詞:「取、拿、买、抢、收」(取る、買う、奪い取る、集める)

③放置する動詞:「放、装、带」(置く、入れる、携帯する)

④「借りる、貸す」動詞

⑤相互双方向動詞「商量、交流」(相談する、交流する)

以上、日中手話の方向性動詞の分類は、異なる枠組みであるが、Paddenの動詞分類に基づいたものなので、類似している。また日中手話でも動詞の一致現象が見られる。手話は、音声言語と比べ、動詞の方向性が空間(現実空間と文法空間)を利用して表現される点に特徴がある。それゆえ、手話では、方向動詞を表現する時と主語の位置によって、その起点、終点、運動方向が明らかになる。

5.5 手話の主観性と創造性

5.5.1 手話の主観性

われわれは、様々な具体的な経験に基づく比喻により、抽象的な概念を理解していく。また、外部世界を知覚し理解していく認知のプロセスには、外界に対する主体としての人間の主観的なパースペクティブが反映されている。

空間の認知に基づく意味拡張には、時間概念の認知モデルで時間の運動と自己の運動は相対的にみる視点が反映されている。方向を把握して、時間を認知する場合、体や視線の向き、方向などによって、時間の認知が異なる場合がある。例えば、韓・刘（2007）では、中国母語話者には、「過去は前、未来は後ろ」の認知が認められているとしている。しかし、Yu(2012) は、中国人は未来に向けるという異なる考えを指摘している。

また、参照点からみて、手話話者自身の身体を参照点とする場合、手と体の遠近の空間距離により心理的距離が表現される。主体の体を背景化して、頭、鼻、腹、心の位置の焦点の違いで、空間における異なる位置関係が間接的に表現される。この主観的な認知は社会文化に根ざす経験にも関係している。また、参照物の相対位置（上・下、前・後、左・右）に基づき抽象的な概念を比喻的に表現していくことができる（表 5-3、表 5-4 を参照）。このように手話では、空間の認知（特に、上・下の次元による主観的概念の認知）によって多様な意味の理解が可能となる。この種の意味の一面は、以下に示される。

表 5-3 日本手話の空間認知による意味拡張

上・下	成功/失敗、上司/部下、兄/弟、高い/安い、教わる/教える、先輩/後輩、派手/地味、浅い/深い、高い/低い、軽い/思い
前・後	明日/昨日、未来/過去、勝/負、受ける/断る
左・右	左利き/右利き、左寄り/右寄り、午後/午前、

表 5-4 中国手話の空間認知による意味拡張

上・下	好/坏、尊重/不尊重、升/降、高档/抵挡、轻/重、上午/下午、前辈/后辈、进步/堕落、升/跌、高/低、白天/夜晚、成功/失败
前・後	进步/退步、以前/以后、拒绝/接受、买/卖、接受/拒绝
左・右	上午/下午、放大/缩小、结婚/离婚、集合/分离、关系/没关系

5.5.2 手話の創造性

空間認知に関わる経験は、日常言語の意味を理解していく際に重要な役割をになっている。空間の認知的な経験によって形成されるイメージスキーマは、メタファーによる具象的な意味から抽象的な意味への拡張を可能とする。

手話の空間による意味拡張は、遠・近、内・外、中心・両側、リンク・ノンリンクのイメージスキーマによる比喩的に写像される。例えば、リンク・ノンリンクのスキーマによって、友達・敵、連盟・解散、仲良く・不和の主観的な概念が理解される。また、遠・近、内・外、中心・両側、のイメージスキーマは、感情・心理距離に関わる意味を比喩的に表現する。

さらに、手話は視覚的な身体的経験に基づき空間を利用して時間を表現するため、音声言語より直観的に意味を伝えることができる。日中手話では、空間の上下軸、前後軸、左右軸の移動から時間の認知が可能である。「過去は下、未来は上」、「過去は上、未来は下」、「過去は右、未来は左」、「過去は後、未来は前」（「過去は左、未来は右」の時間認知は、中国手話には存在するが、日本手話には存在しない。以上の日中手話の考察から明らかのように、空間の認知による意味拡張は、手話表現の様々な意味の創造性を可能とする認知のメカニズムとして機能している。

第六章 結論

言葉の世界には、外界の知覚と理解にかかわる様々な認知のモードが反映されている。言葉の世界の背後にある主体としての人間には、主観性と身体性によって特徴づけられる一般的な認知能力が備わっている。日常言語の話し手だけでなく、手話話者も人間の一般的な認知能力に基づき、外部世界の様々な意味を表現している。

本論文は、認知言語学の理論枠組みに基づき、手話の身体性と主観性、メタファー、メトニミー、意味拡張、参照点などの認知言語学的視点から日中の手話の基本的なメカニズムの解明を試みている。特に、以上の認知的考察を通して、身体部位の表現、感情表現、空間表現に関わる手話の問題を中心に、聴覚障害者の手話の創造的な表現能力と意味拡張のメカニズムの考察をしている。

6.1 まとめ

本論文では、第一章の先行研究の批判的考察と第二章の認知言語学の理論的な枠組みを背景に、第三章から、以下のような手話言語の研究を試みている。

第三章では、「頭」、「手」、「足」、「口」の四つの身体部位を取り上げ、日本語と日本手話、中国語と中国手話、音声言語と手話、日本手話と中国手話の比較を通し、身体部位に関する手話表現の意味拡張の諸相を明らかにしていく。特に本章では、日中手話のメタファーやメトニミーによる意味拡張のメカニズムを考察し、身体部位の「頭」、「手」、「足」、「口」に関する意味拡張が、修辭的な認知プロセスによりどのように拡張していくかを明らかにしている。

より具体的には、身体部位の基本的な拡張の分類（「形の類似性」、「形態的な特徴」、「機能」、「機能の派生」）に基づき、比較対照研究の考察を行い、日中手話言語の意味拡張のプロセスと意味拡張の方向の共通点と相違点を考察している。また、手話の身体部位としての基本的な関係である「主体—機能」と「手段—目的」の関係に着目し、「頭」、「手」、「足」、「口」の身体部位に関する意味拡張が、基本的にメトニミーの認知プロセスによって可能となる事実を明らかにした。

また、日中手話の身体部位の意味拡張に関わる語彙データを収集し、「頭」、「手」、「足」、「口」に関する意味拡張の過程に、人間と身体的な生理的基盤と社会文化に関わる要因が

反映される事実を明らかにした。この事実は、手話の身体部位に関する修辭的な表現は、生活における身体経験と文化的背景がなければ理解できないことを意味する。

また、本章では、身体部位に関する意味拡張に人間の感情的な要因が関わっている点に注目し、日中手話の感情表現の意味拡張とこの拡張を可能とする認知のメカニズムを明らかにしている。

第四章では、「喜、怒、哀、厭、恥、不安・怖、驚」の七つの感情を分類し、日中手話の感情表現の26語彙の比較分析を試みている。日中の感情を表す手話語彙の感情表現のメタファーには、主に容器のメタファー（胸（心）、頭、腹）、身体部位の機能によるメタファー（頭、鼻、口）と空間のメタファー（上一下、中心—両側、内—外）の三つによる表現が存在する。また、手話の感情表現に見られるメトニミー表現は、主に「原因—結果」

（感情—表情を伴う生理変化）の時間的な隣接関係による表現である。さらに、この「原因—結果」の隣接関係は、「目に見える生理変化（自然的な反応の動作表現）—直接的な感情表現」と「目に見えない生理変化（身体内の生理変化）—間接的な感情表現」の二種類に分けられる。本章では、日中の手話表現を修辭的に特徴づける以上の事実を明らかにしている。さらに、本章では、多義的手話の語義の拡張の認知プロセスを、認知的機能の根底にある「参照点能力」によって規定している。参照点能力は静的な指示作用だけでなく、動的に概念を拡張・縮小しうる認知プロセスである。日本手話は、参照点による認知プロセスのなかで、参照点とターゲットを相対的に変化させ、概念的支配域を拡張することによって、語義を拡大していく。これに対し、中国手話は、日本手話より参照点とターゲットを相対して変化させることは少ないので、概念的支配域も日本手話より狭く、語義の拡大も限られる。本章は、以上のように、参照点構造に基づいて日中手話の意味拡張の共通性と相違を明らかにしている。

第五章では、手話における空間関係の利用と認知の問題を考察している。特に、日中手話の比較により、音声言語と手話の空間認知とメタファーによる意味拡張の関係を明らかにした。空間関係に基づく手話の研究 (Liddell(1995)、McNeill&Pedelty (1995)、Sutton-Spence &Woll (1999)、王・張 (2012)、小藺・木村・市田 (2003)、市田 (2005)、李・呉 (2015)) では、空間の種類に関する分類は必ずしも一致しない。これに対し、本研究では、手話に関わる空間認知に関し、以下の事実を明らかにしている。基本的には、手話に関わる空間は、現実空間と非現実空間の二つに分けられる。現実空間は、現実世界の物理的空間関係を描写し、非現実空間は、空間で指示し文法の意味を表現する。また、空間認知のメタフ

ア表現は、音声言語も手話も、上・下の運用と認知に関わる表現が一番多く、意味拡張も多岐に渡る（例えば：時間、数量、質的レベル、社会関係などへの写像）。手話は視覚的な手段で表現し、身体的経験に基づき空間を利用して時間を表現するため、音声言語より直観的に意味を伝えることができる。日中手話には、空間の上下軸、前後軸、左右軸の移動から時間の認知が可能となる。具体的には、「過去は下、未来は上」、「過去は上、未来は下」、「過去は右、未来は左」、「過去は後、未来は前」（「過去は左、未来は右」の認知は、中国手話の中に存在するが、日本手話の中に存在しない。）

さらに、本章では、参照点能力から手話の意味拡張の主観性を明らかにした。手話話者自身の身体を参照点とする場合、手と体の遠近の空間距離により心理的距離の表現が可能となる。また、主体の体を背景化して、頭、鼻、腹、心の位置の焦点の違いで、思想や感情を異なる位置で伝える。この主観的な認知は社会文化に根ざしている。さらに、参照物の相対位置（上・下、前・後、左・右）によって、抽象的な概念へ拡張していくことができる。また、身体的経験に基づき、空間の認知から、特に、上・下の次元による主観的概念の認知が広範に使われている。本章では、手話の空間性、方向性、等に関わる以上の意味拡張の諸相を明らかにしている。

本研究では、先行研究に基づき、日本と中国でよく使われている手話辞典（『わたしたちの手話 学習辞典』、『国家通用手语词典』）のデータをまとめ、認知言語学の視点から、手話におけるメタファーとメトニミーに関する手話語彙の概念構成のメカニズムを解明した。また本研究では、空間認知のイメージスキーマの観点から、メタファーとメトニミーの根源となるイメージ形成とスキーマ化の能力によって、手話の多義性と創造性が可能となる事実を明らかにした。さらに本研究では、日中手話のメタファーとメトニミーの分析を可能とする認知モデルが提示し、手話表現の文化差異に関する一般的な記述を試みた。

日中手話表現が異なる原因としては、両手話に関わる話者の心的操作やそこから得られるイメージの相違、さらには手話表現の概念構造を特徴づけるメタファーとメトニミーの修辭的な認知の相違が考えられる。本研究では、手話におけるこの種の異文化の発想と認知の相違の一面も明らかにしている。

本論文は、認知言語学の新たな視点に基づく理論的・実証的研究である。現時点では、日中手話の本格的な比較研究はほとんど存在しない。認知言語学の枠組みに基づく本論文は、これまでの手話研究に新たな知見を提供するだけでなく、手話学習者の教育にも貢献する理論的・実証的研究として位置づけられる。

6.2 今後の研究と課題

本研究では、認知言語学の視点から、身体部位、感情表現、空間認知、等に関する手話表現の意味拡張と認知のメカニズムに着目し、日中手話の比較研究を行なった。本研究では、身体部位の目、耳、鼻などの語彙の意味拡張、及び空間認知と文法の相互関係の考察はなされていない。この方面の研究は、今後の課題として残される。また、本論文の考察から得られた研究成果と知見が、日中の手話表現の習得と日中聴覚障害者のコミュニケーションの研究にどのように貢献するかは非常に興味深い問題である。今後は、この方面の研究も試みていきたい。

参考文献

日本語の文献

- 市田泰弘 (2005a) 「手話の言語学 (6) 空間の文法—日本手話の文法(2) 「代名詞と動詞の一致」」『月刊言語』第34巻第6号、90-98、大修館書店.
- 市田泰弘 (2005b) 「手話の言語学 (7) 話し手の身体と視線—日本手話の文法(3) 「動詞の一致(再考)と指示対象のシフト」」『月刊言語』第34巻第7号、92-99、大修館書店.
- 市田泰弘・木村晴美(1998)「手話教育におけるナチュラル・アプローチ」『手話学研究』14(2)、55-59.
- 伊東(神庭) 真理子 (2018) 「日本手話における指さしの空間利用—位置形態素の異同を探る」『東京大学言語学論集』39、119-126.
- 小田侯朗 (1982) 「健聴者の手話学習における手話単語認知の二面性」『名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)』第29号、255-262.
- 小田希望(2003)「甘くてスウィート」『ことばは味を超える』(瀬戸賢一編)、海鳴社、196-214.
- 小藪江 聡・木村晴美・芳仲愛子・市田泰弘 (2000) 「日本手話におけるロールシフト」『日本手話学会第26回大会予稿集』、8-11.
- 小藪江 聡・木村晴美・市田泰弘 (2003) 「日本手話における空間の文法化」『日本手話学会第29回大会予稿集』、38-41.
- 小野寺 美智子 (2018) 「時間メタファーへの認知的アプローチ—日本語の時間表現を中心に」『人文・自然・人間科学研究』39、16-31.
- 大堀寿夫 (2002) 『認知言語学的研究』、東京大学出版会.
- 大石 亨 (2008) 「感情のメタファーの日英差をもたらす要因についての考察」『日本認知言語学会論文集』、8:274-284.
- 大杉 豊 (2002) 『国際手話のハンドブック』、三省堂.
- 大杉 豊・関 宜正 『わたしたちの手話』再編制作委員会 (2010) 『わたしたちの手話学習辞典 I』一般財団法人全日本ろうあ連盟.
- 大杉 豊・関 宜正 『わたしたちの手話』再編制作委員会 (2014) 『わたしたちの手話学習辞典 II』一般財団法人全日本ろうあ連盟.

- 岡 典栄・赤堀仁美(著)、NPO 法人バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター(編)
(2011)『日本手話のしくみ：文法が基礎からわかる』、大修館書店。
- 沖本正憲(2009)「身体部位詞の比喩的意味拡張と顔の認識」『苫小牧工業高等専門学校紀要』第44号、64-79.
- 神田和幸(1994)『手話学講義 手話研究のための基礎知識』、福村出版。
- 神田和幸(2007)「手話の認知的研究」『電子情報通信学会論文誌』第9巻第3号、609-616.
- 川口 聖(2017)「日本手話の漫画語源感情表現の分析」日本語要論学会メタファー研究
(口頭発表ハンドアウト 2017/12/13) .
- 木村晴美(2007)『日本手話とろう文化：ろう者はストレンジャー』、生活書院。
- 木村晴美(2011)『日本手話と日本語対应手話(手指日本語)：間にある「深い谷」』、生活書院。
- 木村晴美・市田泰弘(2014)『はじめ手の手話 初歩からやさしく学べる手話の本(改訂新版)』、生活書院。
- 日下部 直美(2020)「“手”の基本義とその意味拡張」『星城大学 研究紀要』第20号、35-40.
- 日下部 直美(2021)「“足”、“脚”、“腿”の基本義とその意味拡張」『星城大学 研究紀要』第21号、35-40.
- 楠見 孝(2004)「味覚のメタファー 表現への認知的アプローチ」『日本言語学会第127回大会予稿集』、9-14.
- 呉 琳(2019)「日中慣用句における「手」の意味拡張」『日中語彙研究』第9号、53-65.
- 蔡 嘉紘(2018)「感情の表現形式による分類—直接的表現から客観的表現まで」拓殖大学大学院、博士論文。
- 佐伯敦也(2016)「日本手話におけるアスペクト一語の内在アスペクトと運動形式の関連を中心に」『言語情報科学』14、1-17.
- 佐川浩彦・竹内 勝(1998)「空間情報を利用した手話認識方式」『ヒューマンインタフェースシンポジウム論文集』14、169-174
- 島田浩之(2003)「日本の手話における比喩的拡張について」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第25号、20-39.
- 島田浩之(2005)「物体を表すアメリカ手話の類似構造モデルにおけるメトニミーの関与について」『龍谷大学英語英米文学研究』33、83-102.
- 全日本ろうあ連盟(2007)『新手話ハンドブック』、三省堂。

- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』 研究社.
- 段 静宜 (2019) 「植物に関する慣用表現の認知言語学的研究—日中対照分析」 博士論文、
関西外国語大学大学院.
- 長南浩人(2001) 「日本手話、中間型手話、日本語対应手話の構造の違いが聴覚障害者の手話の理解に与える影響」 『教育心理学研究』 49(4)、417-426.
- 鄭 新爽 (2019) 「中国語の時間表現に見られる順序認識—“上下”の時間表現を中心に」 『認知言語学研究』 4:109-131、開拓社.
- 唐 昭君 (2018) 「手話の認知言語学区的研究—日中標準手話の比較を中心に」 未公開修士論文、関西外国語大学大学院.
- 唐 昭君 (2021) 「日中手話の身体部位に関する意味拡張—「頭」と「手」を中心に」 『関西外国語大学大学院研究論集』 43、28-42.
- 唐 昭君 (2021) 「日・中手話における空間の運用と認知」 『日本認知言語学会第22回大会予稿集』 103.
- 鳥越隆志 (1991) 「日本手話の動詞の分類について」 『日本手話学会第17回大会予稿集』 10-13.
- 中村 明 (1993) 『感情表現辞典』、東京堂出版社.
- 馬場典子 (2002) 「「腹が立つ」の動機付けに関する一考察」 『言語と文化』 3 : 31-44.
- 馬場典子 (2012) 「「頭」を含む怒りを表す動詞句の意味の成り立ちをめぐる考察」 『ことばの世界』 4、23-42.
- 坊農真弓(2018) 「日本手話における空間と視点—手話研究とジェスチャーの研究の接点」 『手話学研究』 17、1-10.
- 松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』、くろしお出版.
- 村松 明 (2006) 『大辞林 第三版』、三省堂.
- 山梨正明 (1992) 『推論と照応』、くろしお出版.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』、ひつじ書房.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』、くろしお出版.
- 山梨正明 (2012) 『認知意味論研究』、研究社.
- 山梨正明 (2015) 『修辭的表現論 認知と言葉の技巧』、開拓社.
- 山添秀剛 (2003) 「苦くてビター」 『ことばは味を超える—美味しい表現の探求』 (瀬戸賢一編)、海鳴社、215-241.

矢沢国光 (2013) 「『日本手話』『日本語対应手話』『中間型手話』『ろう学校教師のための言語学入門』12.

中国語の文献

白 彬・国 华・周 聪聪 (2013) 「认知视角下的美国手语象似性隐喻特征探究」『辽宁师范大学学报』、36(2): 276-280.

董 婧 (2018) 「前-后的方位隐喻和时间参照」『文教资料』、4: 28-30.

傅 敏 (2013) 「基于认知语言学的聋人手语转喻研究」『中国特殊教育』、10:31-36.

傅 敏 (2016) 「中国手语和汉语人体隐喻的认知对比」『中国特殊教育』、7:31-36.

韩 玉强・刘 宾 (2007) 「汉语空间隐喻时间中的“前”、“后”认知」『修辞学习』4:15-20.

李 恒・吴 玲・吾根卓嘎 (2013) 「西藏手语时间隐喻和转喻的认知研究」『中央民族大学学报』、40(6):160-165.

李 恒 (2013) 「空间偏向成因研究：理论解释与前景展望」『心理科学进展』、(21)4:637-642.

李 恒 (2014) 「汉语使用者时空隐喻手势的认知研究」『外语与外语教学』、6:38-43.

李 恒・吴 玲(2013) 「中国手语情感隐喻的认知研究」『语言文字应用』、4:54-61.

李 恒・吴 玲 (2015) 「中国手语空间指代的语篇衔接作用」『中国特殊教育』、5:39-43.

李 恒・姜 桂英 (2018) 「汉语情感效价空间隐喻的手势表达」『外国语』、41(2):86-93.

李 恒 (2016) 「时空隐喻的心理实现性：手势和手语的视角」『心理科学』、39(5):1080-1085.

李 美琪 (2017) 「认知参照掉视域下的心理距离」『现代语文』、10:108-112.

刘艳红・顾定倩・程黎・魏丹 (2013) 「我国手语使用状况的调查研究」『语言文字应用』、5(2) : 35-41.

刘 鸿宇, 曹 阳, 付 继林 (2018) 「中国手语动词隐喻调查研究」『中国特殊教育』、12:29-33.

刘 鸿宇, 曹 阳 (2019) 「中国手语动词构词中的隐喻机制」『北京联合大学学报』、115(1): 69-75.

吕 会华 (2019) 『中国手语语言学』、知识产权出版社.

马 赛・何 宇茵 (2010) 「论中国手语的象似性」『大学英语』、(7) 2:30-32.

闽 娜 (2011) 「汉语“足”词群的语义范畴与隐喻认知研究」『哲学与人文科学辑』S1、1-74.

倪 兰 (2007) 「中国手语动词方向性研究」博士学位论文、复旦大学.

倪 兰 (2015) 『中国手语动词研究』、上海大学出版社.

邱 云峰・姚 登峰・李 荣・刘 春达 (2018) 『中国手语语言学概论』、中国国际广播出版社.

- 王 翠艳, 张 凯 (2012) 「美国手语的空间特性及运用」『中国特殊教育』、150(12):30-34.
- 王 珊珊 (2014) 「基于认知语义扩展模式的日语“足”字多义现象分析」『宁德师范学院学报』、4:68-80.
- 王 翠艳·张 凯 (2012) 「美国手语的空间特性及运用」『中国特殊教育』、150(12):30-34.
- 吴 玲·李 恒 (2012) 「中国手语中的时间空间隐喻」『中国特殊教育』、12:25-29.
- 现代汉语大词典编委会 (2010) 『现代汉语大词典』、上海辞书出版社.
- 熊舒婷 (2018) 「从认知语言学看一词多义现象」『安徽电子信息职业技术学院学报』、5:58-61.
- 许 保升·傅 敏 (2015) 「聋人文化视角下手语的省略现象及其语言学分析」『理论研讨』、1:31-34.
- 姚 登峰·江 铭虎·阿布都克力木 阿布力孜·侯 仁魁·哈里旦木 阿布都克力木 (2015) 「基于聋人案例的空间隐喻语义认知计算」『中文信息学报』、29(5):39-48.
- 于 松梅·张宁生 (2004) 「聋人手语的语言学研究」『中国特殊教育』、9:61-64.
- 张 凤 (2001) 「俄汉空间隐喻比较」『解放军外国语学院学报』、24(1):50-53.
- 张 可·卢 卫中 (2013) 「足隐喻的认知研究」『西安外国语大学学报』、21(1):1-4.
- 张 帆 (2015) 「国内近年来聋人学生汉语书面语句法研究述评」『长春大学学报』25(11):133-136.
- 张 晓梅·王惠 (2011) 「中日手指语词汇构成和句式表达的比较」『长春大学学报』21(5):61-63.
- 张 晓梅·于 靖·米 括 (2011) 「中国手语与日本手语发展历程及现状比较」『智能信息技术应用学会会议论文集』2、510-513.
- 郑 璇 (2010) 「中国手语中的比喻和借代——兼谈手语如何表达非视觉概念」『中国特殊教育』、2:1-8.
- 郑 璇 (2015) 『手语基础教程』、华东师范大学出版社.
- 朱 坤花 (2016) 「方位隐喻中“前后”与“上下”的对比分析」『外语教学与研究』、62:80-81.
- 中国残疾人联合会教育就业部·中国聋人协会 (2016) 『中国手语日常会话』、华夏出版社.
- 中国聋人协会·国家手语和盲文研究中心 (2019) 『国家通用手语词典』、华夏出版社.

英語の文献

- Aldrete, Gregory S. (1999) *Gestures and Acclamations in Ancient Rome*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- Brennan, Mary (1990) *World formation in British Sign Language*. Stockholm: University of Stockholm.

- Emmorey, Karen, David, Corina and Ursula Bellugi (1995) "Differential processing of topographic and referential functions of space." In K. Emmorey and J.S. Reilly (eds). *Language, Gesture, and space*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 43-62.
- Friedman, Lynn A. (1975) "Space, Time, and Person Reference in American Sign Language." *Language* 51(4), 940-961.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago press.
- Lakoff, George. (1987) *Woman, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press, London (李葆嘉·张婷·邱雪玫译『女人火与危险事物：范畴显示的心智』、世界图书出版公司).
- Lakoff, George and Mark Turner (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: University of Chicago press.
- Langacker, Ronald W. (1993) "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4(1), 1-38.
- Liddell, Scott K. (1990) "Four functions of a locus: Reexamining the structure of space in ASL." In C. Lucas (ed.). *Sign Language Research: Theoretical Issues*. Washington, DC. Gallaudet University Press, 176-198.
- Liddell, Scott K. (1995) "Real, surrogate, and token space: grammatical consequences in ASL." In K.Emmorey, and J. Reilly (eds.). *Language, gesture and space*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 19-41.
- Matsuki, Keiko (1995) "Metaphor of anger in Japanese." In John R. Taylor & Robert E. Maclauray (eds.). *Language and the Cognitive Construal of the World*. Berlin: Mouton de Gruyter, 137-151.
- McNeill, David (1992) *Hand and Mind: What Gestures Reveal About Thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- McNeill, David and Laura L Pedelty (1995) "Right brain and gesture." In K. Emmorey and J.S. Reilly (eds.). *Language, Gesture, and space*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 63-86.
- Peirsman, Yves and Dirk Geeraerts (2006) "Metonymy as Prototypical Category." *Cognitive Linguistics* 17(3), 269-316.
- Reddy, Michael (1979) "The Conduit Metaphor: a case of frame conflict in our language about

- language.” In A. Ortony (ed.). *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sutton-Spence, Rachel and Bencie Woll (1999) *The linguistics of British Sign Language: an introduction*. Cambridge: Cambridge University Press, 129-154.
- Takashima, Yufuko (2019) “Metaphors of perception in Japanese Sign Language.” In Laura J. Speed et al (eds.). *Perception Metaphors*. Amsterdam: John Benjamins, 303-326.
- Taub, Sarah F. (2001) *Language from the body: Iconicity and metaphor in American Sign Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Wilbur, Ronnie B. (1987) *American Sign Language: Linguistic and applied dimensions*. Boston: College-Hill Press.
- Wilcox, Phyllis P. (2000) *Metaphor in American Sign Language*. Washington, DC: Gallaudet University Press.
- Wilcox, Sherman (2004) “Cognitive iconicity: Conceptual spaces, meaning, and gesture in Signed Language.” *Cognitive Linguistics* 15(2), 119-147.
- Wnuk, Ewelina and Yuma Ito (2021) “The heart’s downward path to happiness: cross cultural diversity in spatial metaphors of affect.” *Cognitive Linguistics* 32(2), 195-218.
- Yu Ning (1998) *The Contemporary Theory of Metaphor, A Perspective from Chinese*. Amsterdam: John Benjamins, 85-91.
- Yu Ning (2012) “Metaphorical expressions of anger and happiness in English and Chinese.” *Metaphor and Figurative Language* 3, 328-359.